文化論集第三一号
二〇〇七年九月

十一章　塔への献呈ソネット

――「思い溢れるわが胸の、雄弁にして物言わぬ使者となれ」――

川中子　弘

『ソネット集』の百五十四篇は、曖昧きわまりない内容のせいで制作年代に関して確かな手がかりといえるものは皆無に近く、あえて推定するのは泥沼に踏み込むような無謀な試みであるばかりか、最近ではどうやらまともな研究の埒外にあるとさえみなされている。たしかに書簡詩の類いであればおのずから垣間見える伝記的背景に到る道筋はまるでわざとのように断たれたり掻き乱されて、状況証拠だけであれこれ詮索してもくたびれもうけの推論倒れに終わるのが関の山だというのは一理ある。従って定説といえるものは生れにくいのだが、とはいえそれでも若干の作は推定するに足る論拠らしきものがあり、とくに107番の場合は一六〇三年三月二四日のエリザベスの死後、というよりその王位を隣国のジェームズ六世が継承した後、という点でほぼ見解が一致している。

一　Not mine own fears, nor the prophetic soul

Of the wide world, dreaming on things to come,
Can yet the lease of my true love control,
Supposed as forfeit to a confined doom.
The mortal Moon hath her eclipse endured,
And the sad Augurs mock their own presage,
Incertainties now crown themselves assured,
And peace proclaims Olives of endless age.
Now with the drops of this most balmy time
My love looks fresh, and death to me subscribes,
Since spite of him I'll live in this poor rhyme,
While he insults o'er dull and speechless tribes.
And thou in this shalt find thy monument,
When tyrants' crests and tombs of brass are spent.(1)

まず5行目の、「瀕死の月が蝕を受けいれた」とは、月女神シンシアをニックネームとするエリザベスが、エセックス処刑後心身とみに衰えて二年程後ついに死に屈したことを仄めかす、と理解してよいだろう。それは他の詩句の暗示とも符号する。だから7行目は表面的な意味とはややずれるが、「種種の不安定さは今や確実なものとなって王冠をみずからに被せた」とは、世継ぎのないエリザベスの後継者という昔からの深刻な問題に関して、これま

で色々の立場からの発言や国内外の権利の主張の渦巻く中、国民は戦乱への不安さえ抱いていたが、しかし女王の死後直ちにスコットランド王ジェームズ六世が何事もなく王冠を戴くことで平和裏に落着したことを指していよう。このincertaintiesとcrownの背後には、詩人とパトロンの関係からいって野望を抱いたエセックスの叛乱が当然控えている。次の「かくして平和は終わることなき御世のオリーブの小枝を宣告する」（8行）も、詩的常套句によるその反復であるが、唯このオリーブは10行の「今やこの最もbalmyな時代の滴をあびて」のbalmyへとつながる。balmyは単に芳香を放つという意味と同時に、その前のcrownそしてこのolivesを受けて王の即位礼の一環である塗油式の暗示となろう（塗油にはオリーブ油が用いられた）。後者の意はthe dropsによってさらに際立つのだが、10行の「わが愛する友は若返って見える」へと続くと、また比喩（換喩）になって、サザンプトンがジェームズの命令で女王の死から二週間後の四月一〇日に釈放された、つまり新王の寵愛に浴したことを仄めかそう。もっともmy loveが誰なのかさえ大問題なのに、瀕死の月の蝕とは何かとなると、言葉だけ見ればいかような解釈も可能な世界ではあるが、しかし以下問題にする同時期―つまり一六〇一年から一六〇四年くらい―の五十程のソネットの文脈におくと、それ以外の見解は成り立ちがたく、この点では大勢の見解に従っていいように思われる。「若返って見える」は入獄以前常々青年の若さと美を称賛していたその延長において、二年余りの辛い獄中生活でさぞかし色褪せ皺でもよったのかと思ったら、さにあらず「君は」返って「みずみずしい」様子ではないかと、ついに塔から無事釈放されたパトロン歓迎の祝意を表したものと解せる。そこには生死の境を生き延びた青年と安堵を分かち合う友愛の念が溢れていよう。1～2行の、「これから先何が起きるのかと徒に思いめぐらす時の、わたし自身の恐れも、また世間一般の見込みも」の「恐れ」とは、継承の紛争より相手が獄中にあったことへの不安に発していよう。サザンプトンは確かに死刑宣告を撤回されたものの女王在位中獄刑を解かれることはな

かったのだから、転変つねならぬ世の中の動き次第では女王や取巻き（つまり枢密院）の思惑でどんな新たな罪が着せられて生命を断たれないとも限らない、予断を許さぬ人質の身の上だった。死の不安はしかし青年への愛の問題として、それでも君への愛を絶つことはできなかったとややずらされるが、この危惧の解消は6行目の「（瀕死の月が蝕に入ったので）悲観的な占い師たちはみずからの予言を嘲ける」において、もう一度より明確に語られている。女王に嫡流の後継者がなく、また彼女は死に際もそれを指名しなかったのだから、普通ならば好戦的な隣国スコットランドの王ジェームズや帝国主義的でカトリックのスペインが戦争を仕掛けて来たり、他の種種の王族血縁者たちが周囲の野心家に唆されて内乱が勃発してもおかしくない状勢だったのだから、牢獄の危険人物としては女王以外にもどんな災いに捲き込まれるか図りがたい。そのことを mine own fears や the sad augurs などは指していよう。しかしそれは杞憂に終わった[(二)]。なおこれは『ソネット集』の Mr. W. H. は誰なのかという問題とも関連するが、ソネットには囚人の解放という表現は一言も使われていない。しかしそれはよく見ると友への忠誠を語る3〜4行、「（私の恐れも世間の見込みも）、confined doom への forfeit〔罰金、没収、代価〕と見なされたわが真実の love〔愛、愛する人〕の lease〔期間、借用権〕を意のままにすることはできない」という、にわかには判じがたい詩句のなかに仄めかされていよう。Forfeit to a confined doom とは何なのかであるが、例えば「限定された運命〔の女神〕への代価」として、長生きの女王への賃貸借物件たる囚人を指すと解することができる。あるいは「監禁された〔元死刑囚〕の有罪判決〔ないし悲運〕」という解釈も成り立つ。この語句は意図的な非決定性の中に置かれているようなのだが、しかしどちらも結局は囚人の解放を、つまり「わが愛する人の賃貸借契約」つまり塔拘留の期間は、長生きの女王への「罰金」としてであれ、「有罪判決の代価」としてであれ、終わったことを暗示していることに変わりはない（参照した三つの版の解釈はこの点でも一致している。注(一)参照）。やはり107は家

族や取り巻きが、入獄中、とりわけ王権交替時その運命はどうなることかと見守っていたサザンプトンがつつがなく塔からでてきたことを言祝ぐソネットだと言える。これは四月十日自宅に戻ったリスリに、その頃に会った後で（my love looks fresh）献呈したのであろうか。ただオリーブによる塗油式に拘ればジェームズの即位礼、つまりそれが七月二五日ウエストミンスター寺院で執り行われた[三]後の作となる。このソネットは、エセックス事件以降と考えられるソネットの中では殆ど唯一明るい作である。なお一六〇一年の『フェニックスと雉鳩』の余波ないし照応は『ソネット集』のあちこちに窺えるが、その文脈におくと最終行「暴君の crest（紋章）や真鍮の墓が滅んでも」の crest は、本来の鳥のとさかだが、さらに羽冠、羽飾りへと意味が拡大するので、tyrant's crest[四]は、『フェニックス』の鳥の王国における“…tyrant wing, sauve the Eagle feather'd King…”に通じてくるが、これは偶然ではなく、どちらも同じ暴君への反感を露わにしているだろう。ここは「月蝕」によってシンシアたる女王の死を明らかにしたわけである。さらに14行目はそれを承けて、エリザベスの死でチューダー朝がスチュアート朝に移行しただけでなく、スコットランドも王国下に加わることでジェームズがそれに相応しい紋章を新しく用いるようになることを仄めかすばかりか、世を意のままにしたさしもの女王もついには時の力に屈したという感慨が籠っていよう。いずれにしてもエリザベスが敵側の人間として扱われていることに留意しなければ、『ソネット集』の大部分は手掛かりのないまま意味不可解に甘んじざるをえない。この箇所も絶対君主エリザベスも死ねばいくら立派な墓（ウエストミンスター寺院の祖父ヘンリー七世のかたわら）で生前の栄光を誇示しようとも、時経ればやがて忘却の淵に呑みこまれてしまう。それに対して彼女のお陰で窮地に陥った my love は時を超えることが出来る、なぜなら私の「この［拙い］詩の中に君は自分の記念碑を見出す」からである。詩が不滅だという自負は繰り返し語られてきたが、ここでも「死も私には降参だ[五]」というのだから、この「君の記念碑」の方は永久に滅びることがなさ

そうである。自負の一例を挙げれば、ソネット18で「不滅の詩」[12行]を自賛し、それが永世の保証となっていた、「人が呼吸し、眼がものを見るかぎり、この詩は生き、君に生命を与える」(13〜14行)[六]。そういえば巻頭を飾るT・ソープの献辞が、誇らしげに「われらのとこしえに生きる詩人」と述べるのも詩人が度々言いたてる自負への目配せであろう。

ソネット123にも同時代の出来事の痕跡が認められる。「否、時よ、私が変わるなどと自慢させはしない、新たな権力が建てたお前のピラミッドも私には何ら新しくないし、何らもの珍しくもない」(1〜3行)のピラミッドとは、前年即位したジェームズ一世が一六〇四年三月一五日に市民へのお披露目の行列をした時に(疫病の蔓延で延期されていた)、新王を歓迎する凱旋門をシティに建立させたのを指すと見なされている。この行列には前年国王一座になったシェイクスピアの劇団員も、揃って拝領の赤いラシャで仕立てた一着をまとって晴れがましく練り歩いた。となるとこれは行列以降の、おそらくそれから間もなくの作である。ものや事を名指しせずに互いに判りあえるこの個人的挨拶において、仄めかしは世間でまだ取り沙汰されている、旧聞には属さないことにどうしても傾くだろう。なおエジプトのピラミッドの存在はすでに知られていたが(『アントニイとクレオパトラ』参照)、たとえ例の巨大四角錘でなくとも荘厳な建物一般を指したと考えられる[七]。但しアーデン版の凱旋門の図[八]を見ると、大きな門の西側にオベリスクが立ち、その天辺に円錐状の飾りが載っているし、中央の門上の塔にも長い尖塔がついているので、おそらくこれをもって門全体を呼んだのだろう。詩的気取りというより、世の権力の空しさを述べる内容がジェームズの陰口になるために、凱旋門と明言するのを避けたのかもしれない。それにしても同じ解放後なのにそれを心から祝福した107番とこのソネットとの口吻の違いは著しい。あちらではジェームズ即位と共についに訪れた限りなくつづく平和な世を「きわめて高い芳香を放つ時代」と讃えて慶賀の念に満ちていたのに、今度は

time つまり時勢、というより時の権力者となった新王をかなり冷ややかに眺めている。世間をあっと驚かせる凱旋門を立ててお得意のようだが、しかしそのどこが新しいのか、珍しいのかね、何回となく繰り返されたことの唯の焼き直し（They are but dressings of a former sight, 4行）ではないかと難癖をつけている。リスリが解放されればもう恩に着ることもないから、というような居直りなのか。しかし居直りにしても理由がなければならない。国王一座として王に拝謁した時に人柄に失望したのだろうか（ジェームズの人物評はあまり芳しくない）。解放されたばかりのサザンプトンが一六〇四年七月陰謀事件の嫌疑で再び逮捕されたせいなのか。[九] しかしこれだと時期が少し合わなくなる。あるいは牢獄生活で気難しくなったらしいパトロンの気分に調子を合わせたのだろうか。または悲劇時代に入っていた作者自身の心持ちの問題なのか。いずれにしてもこの幻滅の表明はパトロンがようやく逆境を脱して幸運を掴みかけた時だから言える軽口めいたものなのかもしれない。なお全ては古いものの焼き直しという123番の言い分は、死ねば全てが良くなると思っていた長生き女王の後々の再評価につながるのかもしれない。シェイクスピアは女王に例外的に哀悼詩を捧げなかったが、新王にも皆がこぞって書きそうな歓迎の詩を書かなかった。とはいえその召使（Highnesse servant）としての職務を怠ったわけではなく、詩こそ献呈しなかったが（『ルクレティア』のサザンプトンへの献辞を義理堅く守ったかのように）、よく言われる一六〇六年の『マクベス』以前に同様に演劇人として腕によりを掛けた新王歓迎の挨拶を捧げてはいたのである。それが『ハムレット』であり、その一六〇三年版に国王一座の名が掲げられたことの重みを考慮しなければならない。だが最大のパトロンであるジェームズへのこの歓迎はどうやら召使いとしての職責を全うする以上のものではなかった。その辺の事情が123番の口調に滲んでいるように思われる。

125番の“Were't aught to me I bore the canopy, / With my extern the outward honouring”（1〜2行）の can-

opy は貴人に捧げる天蓋なので、やはりジェームズの行列を暗に指すと推測されている。この行進で王の頭上には「八人の騎士の捧げもつ天蓋」が掲げられた旨、スチーブン・ハリソン編纂『凱旋門』（一六〇四年）に記されている。(10)「私の外観によって、表向きの名誉に寄与しても」とは、上掲のお揃いの赤い服を着て行列に加わった時のことを言うのだろうが、これも権力への苦々しい思いを漂わせている。どちらも愛する者への揺るぎない信義という主題を落としどころにして終わるので目に角を立てる者はいないだろうが、私信的献呈ならともかく公表するには躊躇させる文言である。見るものが見れば王への不敬を疑っただろう。一六〇九年の初版『ソネット集』、いわゆるQの目立たない出版の理由を考える上で考慮に入れる必要があろう。なお最後の“hence, thou suborned *Informer*, A true soul / When most impeached stands least in thy control（13〜4行）（「ここを去れ、偽証の密告者、真実を守る者は、どんな罪を着せられようと、お前の思う通りにはならぬ」）において「密告者」は意味ありげに―つまり特定の人物を指すかのように―イタリック体で印刷されているが、この「汝」thou とは誰なのだろうか。123番の thou は Time であったが、ここでは1〜12行では三例とも愛する友人を指していたのに突然最後に相手が変わる。新王制下での憎むべき密告者とは誰なのか。差しあたりR・セシルが思い浮かぶ。たしかに一六〇一年リスリの生命を救ったのは彼なのだから罵るのは恩知らずであるが、宮廷内の勢力関係は日々動いている。なお出獄後、旧敵グレイやコバムと小競り合いがあったが、処罰を受けている彼らにこうまで激しく言う必要はないし、「密告者」呼ばわりもふさわしくない。すると少し後のことだが、やはりセシルなのであろうか。王の市内行進から三ヶ月後の六月二四日にサザンプトンは旧エセックス派の残党六名と共に逮捕されて書類が押収され、枢密院の喚問を受けた。有力者ハワード一門の数名を殺害し他の者を枢密院から除名するよう王に強いるという陰謀を企てたという嫌疑である。それを聞かされた王は困惑したが、寵臣たる被疑者の無実の申立てを信用し、翌日無

罪放免となった。[二] 資料が残されず真偽は不明だが、シェイクスピアはセシルの仕業と考えたろう。ノーサンプトン、ノッチンガムなどハワード家はセシルの片腕であった。王位継承の貢で旧に倍する勢いのセシルだが、王の覚えのいい旧エセックス派の動きに神経を尖らせていたふしがある。そういえばこの一節は、『フェニックス』の第二聯で、いきなり遺恨を含むらしい人物に「しかし汝（thou）、金切り声の先触れ…」と呼びかけて、その輩に「この一座には近よるな」と警告していたことを思い起させる口吻なのだが、相手は多分同じ人物である。

以上のソネット107及び123と125（124もこの連作の一つとみなせる）は従ってある程度年代の推定の手掛かりが認めうる場合である。他方1〜17番、そしておそらくダーク・レディものの大部分も、これまでの検討からは一五九二〜四年頃の作と見なしうる。[三] ところが残りの作となると、そうした推測さえ難しくあえて踏み込んでも決め手に欠けるので、その全てが誤りということもありうるのだから、妄想に陥るよりは敬遠した方が賢明だというのも判らないではない。しかし「神話ではなく事実を」求めるのが正しいからといって全く断念するのは研究の放棄、無理解に甘んじることであり、それでいて書簡詩たるソネットの美を讃えるのは矛盾である。言葉の芸術（芸術という言葉が現代人を惑わせるのだが）は意味を切離しては成立たないのだし、もし美しいというならそれは背後の緊張感を踏まえてのことであろう。それに手掛かりが皆無というわけでもなく、歴史家が地道に調べればその内いろいろと分ってこないとも限らない。それはともかく上掲の107番など三〜四作が一六〇三—四年に献呈され、そして一六〇一年後半の『フェニックス』の真意に関するわれわれの推測に妥当性があるなら、それを状況証拠としてパトロンが塔に入獄している時にも、ソネットの献呈は行なわれていたのではないかと疑う必要が出てこよう。そして実際にその観点に立って読み直してみると、かなりの数（五〇前後）のソネットに、『フェニックス』の場合同様、徒に深遠で掴みどころのない無意味な詩的常套句と見える語句の背後に、その時期と結びつく具体的

な人物や出来事の影が透かし見えてくるように思われる。だがその検討に入る前に、二つの問題を片付けておかねばならない。

一つはかりそめにも叛逆罪で一旦は死刑を宣告された危険な塔の囚人にソネット献呈などという気ままな真似が許されたのかという素朴な疑問である。結論からいえば、それは塔の習慣からみて充分可能だった。本来ロンドン塔はウィリアム王による征服下に砦として築かれたが、一五三四年、ヘンリー八世に改築されて以後は貴族や高位聖職者の政治犯用の獄舎に使用されるようになった。といっても、ここの入獄者はたとえ死刑囚であれその社会的地位に見合う丁重な扱いをうけ、懐次第できわめて快適な居住空間を与えられた（つまり食事や部屋代などの諸雑費はフリート監獄で見たように囚人の自弁なのである）。今日観光スポットとなった塔にはW・ローリーが一六〇三年から一三年間暮らしたブラディ・タワーの寝室と書斎が公開されているが、彼はシャーボーン荘園の収入のお陰で、そこに三人の召使をはべらせ、一時は家族の同居も許された。次男が誕生したのは塔の中においてである。ヘンリー王子のために『世界史』の執筆に勉励したのもここの書斎においてなのだ。著述には様々な文献が必要になっただろうが、それを調達する自由はあったはずである。召使か家族の者、場合によっては自から塔の外に足を運んだのかもしれない。というのも塔の囚人でありながら夜そこに戻りさえすれば外出の自由が認められる場合もあったからだ。またローリーの友人で「魔術伯爵」の異名をとるノーサンバーランド伯は、財力にものをいわせて彼を上回る自由を享受している。彼はジェームズ一世からその王権継承の貢献で厚遇されたのだが、一六〇五年のガン・パウダー謀略事件に執事の関与によって連座させられ、終身刑と三万ポンドという罰金としては最高額の支払いを言い渡されてマーチン塔に幽閉される。彼は自からこの塔を選定し、それをきわめて豪華な住居へと改造した。部屋を拡げ、窓を新しく付け足し紋章を掲げたばかりか、「魔術伯爵」の名に恥じない化学マニアとして蒸留

器や溶鉱炉をしつらえ、図書室を作って二百冊の科学や他の難解な書物を手元において好きな実験や研究に没頭した。塔のだす食事は口にせず、友人を迎えもてなし、一年の生活費は一四〇〇ポンドに達したという。[一三] サザンプトンの場合もそれに準じて考えられる。塔を終の棲家にするつもりはなかっただろうから、大金持ちで意欲旺盛なノーサンバーランドのような住居改造は考えなかったろうし、また塔の肖像画を見るとそんな元気があったとも思えない。第一どの塔に収監されたのかも不明なのだが、A・L・ラウスによれば、クィーンズ・ギャラリ（今日のクイーンズ・ハウス―未公開―のことだろうか？）でその東奥の寝室と客室が与えられた。[一四] アクリッグは、入獄中生活費として塔副長官（lieutenant of the Tower）に週九ポンド支払っていたのだから（つまり年で五百ポンド程）、調度の整った広い清潔な部屋だったと想像している。当時の台本が一作四～五ポンド、職人は手間賃が一日六ペンスとすれば三〇〇日働いても年収七ポンド少々の時代だから、魔術伯爵ほどでないにしても相当な費用を払ったわけで、庶民から見れば宮殿暮しである。管理者からも丁重に扱われていただろうが、しかしそれは貴族への敬意というだけではなかった。女王の死後二週間ほどで彼の拘束を解いたジェームズだが、実はそれ以前からエセックスの若い友人の身を案じており、スコットランド王によるイングランド王位継承運動に一役買っていた上記のノーサンバーランドへの密書で、「苦境にある哀れなサザンプトン」に「さらなる自由とより居心地の良い監房（ward）を提供するようご尽力頂きたい」と依頼している。[一五] ジェームズの王位継承は、一六〇一年二月末にはそのための奔走を開始したセシルをはじめ、おそらく一六〇二年には宮廷の暗黙の了解になっていただろうから、その意向は塔でも大いに尊重されたはずである。ただし一六〇一年の夏ごろには、クロムウェル、マウンティーグル、サンディスなどクーデターの同志たちが釈放される中、彼ひとりは家族の面会さえもなかなか許されなかったが、前からの病気申し立てが通り八月になって母に、一〇月は妻にその許可がおりた。その年末には友人（誰かは不詳）の訪問

も許されているのだから、この段階ではもはや書簡の自由は実質的には―例えば面会者の持ち物に紛れて―あったと思われる。また塔内で肖像画を描かせているのだから（もっともこれは釈放の少し前と考えられる）、そうした芸能の徒の出入りも許可されたのかもしれない。もっともシェイクスピアは心から友の身を案じるソネットを次々に献呈したが、なぜか自から塔に出向くことはなかったようだ。それが塔側の許可が下りなかったためなのか、庇護者にそうはできない事情があったのかは不明である。

第二は例のMr. W. H.とは誰なのか、である。このことに関して、われわれはすでに前章の『ヴィーナス』に始まる詩、ソネット、劇などの分析において、いわば引き返し難いほど深くHenry Wriothesley説に入り込んでいて、今さら旗幟を翻えすことはできないのだが、しかし未だ決着が付いたとはいえないこの問題について、補足する形でここでもう少し検討を加えておきたい。ただしWilliam Herbert（1580-1630）以外のW. H.は候補者から外すことにする。ペンブルック伯がW. H.として取り沙汰される理由は、ほぼこの頭文字の一致とフォリオ初版の献呈を受けたことに尽きよう。E・K・チェンバーズは、「サザンプトンが生きているのにハーバートとその弟」にフォリオが献呈されたことに「一種の衝撃をうけた」とまで言う。[18] しかしシェイクスピア自身は六年前に死んでいるのだから、もともと劇団のパトロンでもないサザンプトンと演劇界との縁はそれで表向き切れていたのではないか。あるいは後者が少なくとも三〇年前の二作の詩集の個人的パトロンとして知られていたとしても、フォリオ版は芝居しか載せてないのだから、その点でも義理を立てるつながりはないわけで、チェンバーズの驚きの方が筋違いというべきだろう。もちろんヘミング、コンデルという昔からの友人はこの私的親交を知っていたろうが、一六二三年頃のペンブルックが宮廷においてバッキンガムと張り合う一大勢力をなしていたことを考えると、彼の庇護を仰ぐ方が国王一座の将来にとって利に適うのは間違いない。彼はサザンプトンとは類を異にする目先の効く男で、一

六〇一年の叛乱時その参加を期待していたエセックスとは巧みに距離をとって災いを免れ、有力な友人を多くつくってしたたかな宮廷術を発揮し、サマーセットに奪われた宮内大臣（三大勢力の一つ）の椅子を一六一五年についに手に入れている。お陰で配下の饗宴局を介して宮廷内の余興（仮面劇、劇、音楽）を牛耳る立場にあり、劇上演の許可は彼の検閲上の権限だったし、それに劇団としても彼の父との昔からの縁がある。彼の父をパトロンとするペンブルック一座のレパートリーは、一五九四年結成の宮内大臣一座に渡り、じつはシャイクスピアも前者の劇団に所属していたというのが本当なら、三代目ペンブルックの方が国王劇団の古株役者たちにはずっと馴染み深い人物なのだ。彼の母メアリがフィリップ・シドニーの妹でS・ダニエルや例のジョン・デイヴィスを初め多くの文人のパトロンだったこともあっただろう。ウイリアム当人も宮廷の勢力を強めるにつれて大パトロンとなり、それもこと細かに宮廷楽師の選定まで争って自分の庇護者を押し込めたぐらいだから芝居人としてもうっかりプライドを傷つけるような真似はできない。とはいえヘミングたちもあるいはサザンプトンへの献呈を一度は考えたのかもしれない。彼もほどほど日の目を見ていて、ペンブルックから大分遅れてだが一六二〇年についに枢密院入りを果たしていた。しかしその経緯がまずかった。こともあろうにペンブルックの最大の敵バッキンガムの推挽を受けたのである。もしサザンプトンに献呈すれば野心的な宮内大臣を敵に廻すことになりかねない。職務に突けこんで難癖を吹っかけられ、ヘイウッド『ヘンリー四世伝』一五〇〇部の没収・焚書などの二の舞を踏むことになりかねないのだから、彼らばかりか七五〇部の高級フォリオ本に投資する出版人の方もここが思案のしどころで、たとえ役者たちに昔の親友を押されても軽率に首を縦には振れなかっただろう。しかもサザンプトンは翌一六二一年一月些細なことで王に楯突いて入獄しているのも躊躇させる材料になったろう。つまり後にフォリオを献呈するパトロンと同じ頭文字だからといって、『ソネット集』の W. H. をペンブルックだとする積極的理由にはならないのである。

ではもしサザンプトンなら頭文字が逆になる点はどうなのかであるが、それはMr.という称号を用いたことにもつながる韜晦であろう。この称号はW. H.が二人の伯爵のどちらであっても不適切で、「無作法」(一七)になりかねないのは同じである。それにしてもRight Honorableで始まり、相手の称号（伯爵と男爵）を恭しく大書した最初の二詩集とは大違いであるが、市民にも用いるMr.は倒置した頭文字と共に『ソネット集』のパトロンの身元を表沙汰にしたくないという配慮のように思える。もっともこのことはソネットの内容上二人の伯爵のどちらにも当てはまる。たしかにこの二人は一見したところ幾つも共通点がある。共に男前で、エリザベスの女官と浮名を流し妊娠させ、不興を買って入獄し不遇の時期をへてジェームズ王の時代になってその寵臣として返り咲いた。しかしそれをもう少し詳しく検討すると、これらの類似はとうてい同断には論じがたいことが判る。

107番のmortal moonのeclipseを女王の死とすれば、ジェームズの王位継承と共に若がえったmy loveは、ソネット全体の内容から見てそれまで塔に囚われていて、且つ死の危険への心配さえ抱かせた人物でなければならない。くり返せば「これから何が起きるのか思いめぐらす私自身の恐れも、世間皆の抱く先行きを訊ねる心も、だからといって私の真実愛する人の賃貸借権を意のままにはできなかった、その権利は監禁された者の［＝有限な］最後の審判（doom）への罰（金）とみなされるが」（1, 4行）とか「死は私に屈服した」（10行）などから、明示こそされないがそのことに疑問の余地はないのだが、この条件はサザンプトンにしか適合しないのである。確かにペンブルックも女官メアリ・フィットンを妊娠させ、しかも結婚を拒んだためにフリート監獄に入れられるが、それは一六〇一年の、三月二五日～四月二六日の僅か一月間だけで、しかもこの懲らしめの入獄に死の影は少しも差していない。主観的な「私自身の恐れ」ならともかく、「世間一般の」先行きへの不安となると、一ヶ月お目玉を喰った彼には不適切で、二年余も拘束を解かれなかった元死刑囚にしか当て嵌まらない。つまり107番のmy loveはペ

ンブルックではなく、従って後者は『ソネット集』の「唯一の」パトロンではありえない。

ソネット20はまず、「君は自然の手によって女の顔に描かれたのだ、わが愛のmaster mistress（男でも女でもある御主人）よ」と呼びかけていた。更に君は「女のやさしい心」をもち、君が来ると「男たちは盗み見、女たちの胸は時めく」〔8行〕とも述べる。その後で、君は「最初女として造られたとしても」、自然が私には邪魔な一物を付けてしまった以上、それで女たちを喜ばせてやりたまえと結ぶのだから、1～17番とおなじ結婚ないしは生殖の勧めシリーズに属しており、その限りでダークレディとの不埒な色恋以前の一五九二年位の作と思われるが、この女性性も、二〇歳位から女好き一方だったらしい[一八]。ペンブルックにはふさわしくない。一旦は女嫌いのアドニスに描かれたH・リスリの方が似つかわしいのである。肖像画を見るかぎり、同じくハンサムという評のあるペンブルックだが彼の風貌は男性的で、とても「女の顔」を持つとまでは言えそうもない[一九]。ソネット3では「君は母上の鏡です。母上は君を見て、彼女の青春の美しい四月を思い出されよう」（9～10行）と歌われるが、サザンプトンはこの描写にも当てはまる。N・ヒリアード作になる若き日の彼の肖像画を見ると、細面の長い顔立ち、眉と口元（おちょぼ口）、額の広さや髪の生え際の線、それにおそらく鼻の形も母の肖像画[二〇]と比べるとよく似ている。「君の顔は自然が描きあげた女の顔だ」（20番）というのもこの母似とつながるだろう。

T. T.によるW. H.への献辞にもサザンプトンを思わせるふしがある。それはまず「以下のソネットの唯一のbegetter（生みの親）であるW. H.氏に、われらの不滅の詩人が約束するあらゆる幸福とあの永生を〔祈る〕」で始まるが、begetterは議論はあるが、『ヴィーナス』の献辞の「かくも高貴なgod father」と同じパトロンをさす言葉だろう。即ちソネットの動機となった文字通りの生みの親であり、献呈を受けたものとして権利上その所有者でもある。そこに「唯一」が付くことにも注目を払わねばならない。前章でシェイクスピアは個人的にはリスリ以

外にパトロンを持たなかったという推測を述べたが、それは相手の裏切りを隠れた動機とする『ルクレティア』においても献辞によって明示されていた。「私がなしたことはあなたのもの、私がこれからなすこともあなたのもの、〔あなたは〕私の持てる全てに参加されているので…」はこの「唯一の」と対応していよう。つづく「私の価値が大きくなれば〔閣下への〕私の義務もより大きく見えて参ります」は、この頃に宮内大臣一座の株主座員になった事情、つまりパトロンへの強い恩義を仄めかしているのかもしれない。それは「閣下のご長寿があらゆる幸福によって更に長からんことを祈ります」で終わるが、その反響もここに聞こえそうだ。この詩集は折々の興にまかせて書いた作を一冊にまとめたというのとは微妙に異なる。一見内容は雑多だが、「唯一の」読者のために書き、捧げた詩集なのである。なお「あの永生」（傍点引用者）とは、『ソネット集』で何度も「君は私の詩の中では永遠に若い」とか、暴君の真鍮の墓が磨り減っても「君」はそこでいつまでも生きると述べたのを踏まえているのだろう。T. T. の献辞は“WISHETH. THE. WELL-WISHING. ADVENTURER. IN. SETTING. FORTH”とさして意味のなさそうな文句で終わる。しかし第二詩集の献辞に裏切り事件が影を落としていたように、ここにも「唯一の」パトロンが置かれた状況への示唆がないとも限らない。これは普通 T. T. が出版事業（SETTING. FORTH）に乗り出す投資家（ADVENTURER）としての心意気を述べたものと解されているが、T. T. ことトーマス・ソープは徒弟奉公の後すでに一五九四年に一人前の職人になり、一六〇〇年マーロウの翻訳原稿を手に入れて出版し、J・マーストン『不満の士』（一六〇四年）、B・ジョンソン『セジェイナス』（一六〇五年）、など次々に出版を重ねているのだから、自立後一五年経った古株の書籍組合員[三]がいまさら ADVENTURER などと気負った自己紹介をする立場にあったとは思えない。ましてわざわざ献辞で麗々しく申し立てる必要などない。むしろこれは被献呈者のことをそれとなく語っているのではないか。サザンプトンはジェームズの好意で一六〇三年にガーター勲章を授与され、入

獄前のすべての資格を取り戻したうえ、エセックス因縁のスイート・ワイン専売権も譲られたが、一説にはソールズベリつまりセシルの入れ知恵のせいで[三]重要な公務に就かされず、いわば宮廷のお飾り貴族に甘んじていた（例の縁談がまだ祟っていたのだろうか）。一六〇四年のスペインとの平和条約締結の折には―七つ年下の他ならぬW・ハーバートと共に―使節の余興などの接待役を命じられるが、残された外交交渉の図を見るとその席に彼の姿はない。このとき若干二四歳のW・ハーバードも会見の席に望んでいないが、しかしシドニー家の七光りか、初謁見時において王に抱きつき接吻したその堂に入った追従振りが気に入られたのか、もともと機を見るに敏なやり手なのか（お陰で成算のないエセックス叛乱の累を免れた）、一六〇八年要塞司令官、一六〇九年ロンドン塔やポーツマス島の長官に任命され、宿敵のサマセット伯が失脚して塔に入った一六一五年にはその宮内大臣の後を襲う出世ぶりだったのとは対照的である。彼が一六〇五年から北米バージニア開発に加わり、一六〇九年はバージニア会社の役員となり東インド会社にも投資しているのは、そうした不遇をすでに感じて他に活路を見出そうとしていたのかもしれない。その打ち込み振りは伝記作者のA・L・ラウスに「ヴァージニアのパトロン」（副題）と彼を呼ばせたことに窺える。するとadventurerとはおりしも海外の事業に打ち込みかけていたサザンプトンにこそふさわしいのではないだろうか。従ってsetting forthは「出版」に乗り出す（アーデン版）という意味の背後に、より普通の「海に行く」という意味を仄めかしつつ[三]、詩人の昔からのパトロンの目論見を―おそらく詩人の意を体して―それとなく励ましていたのではないか。つまり「海外の事業前進に意欲盛んなる冒険的投資家」ということになろう。すでに何度も見たように私的状況への仄めかしはパトロン文学の重要な心得だから、ソネットの「生みの親」もその件を匂わせていると理解したのではあるまいか。この曖昧さの理由はMr. W. H.という二重の韜晦（称号と頭文字の逆転）によってパトロンの身元の割り出しを難しくしたのと同じ、ソネットの内容に公表をはばからせる

点があったからだろう。そこには私生活上の暴露への懸念と同時に、『フェニックス』で一瞥した政治的な検閲への警戒心があってもおかしくない。もっともこの国王勅許のバージニア会社には他に六人の伯爵が名を連ね、ややこしいことにW・ハーバートも加わっているのだが、しかしその二年後にサザンプトンより年齢では一六年早く枢密院入りを果たし、やがて第一の寵臣サマセットと張り合い追い落とすことになる野心家の彼にとって、この事業はさして重要な位置を占めなかっただろうし、宮廷での権勢隠然たるそういうやり手の政治家にadventurer呼ばわりは揶揄した表現と怒らせかねない。W. H. の二大候補の内最近の傍向はW・ハーバート説に—おそらく単に旧説への反動として—傾いているが、われわれとしてはこのベン・ジョンソンのパトロンとシェイクスピアとの関係を示す証跡が「まったく知られていない」以上、[四]そしてそれに対してサザンプトンとの関係は二冊の詩集によって動かし難い事実であり、さらにわれわれの考えでは『ヴェロナの二紳士』『恋の骨折り損』、『恋人の嘆き』『フェニックス』（1601）ばかりか、問題のソネットの例えば1〜17番や107番[四A]においてもかなり確実といえるのだから、どちらか二人といえばこのことだけでも『ヴィーナス』以来のパトロンこそW. H. で考えるしかない。それは「より妥当性が高い」[四B]という以上のものである。もう少し付け加えれば『ナルキソス』（1591）＝ソネット1〜17＝『ヴィーナス』（1593）間の脈絡、裏切りを語るソネット群＝『ルクレティア』（1594）＝『ウィロビーとアヴィサ』（1594）間の連鎖の存在も、この緊密な親交を踏まえなければ成立しない。それは当然他のソネットについても同様で、すべてはこのonly begetterに捧げられた作品なのだ。ではそれらに107番で解放の喜びが語られた塔のサザンプトンに向けられたと覚しき言葉が見え隠れしていても当然である。

このリスリ説に立つと、“my rose”（109番14行）という呼びかけにもパトロンへの暗示が込められていそうである。roseの頻度はざっと数えると一一のソネットで少なくとも一五、六回に及び、いずれも相手のパトロンを

それとなく指している。その内直接の呼びかけは一回だが、後は青年の裏切りを責めた群の中で、逆に相手に同情してくよくよしなさるな、「バラには棘があるもの」（35番）とか、「バラは美しい」が香りも必要だ、やがて「美しく愛らしい青年」の美が消えた時でも、私の詩が香りとなって君の「真実」を残すだろう、という具合に青年の別称めいたものになる。ダークレディ群の130番で「私は赤と白が織り混ぜのrosesを見たことがある」が、それは「（色くろき）彼女の頬には見かけない」と言っているバラも、おそらくリスリを念頭においている。だがこの頃ダークレディ（とみなす女性）は青年を知っていたのか？　これは答えられないが、しかしすでに述べたように答える必要のない問題である。このソネットも唯一のbegetterたる彼に献呈されたのであり、使いなれたroseを持ち出すのも、実際に語りかける相手がそれを心得た青年だからである。もっともこれだけでは詩的誇張において、W・ハーバートにも適用できないとは言えない。その点でソネット99でもバラの花の赤、白の色が問題になり、それは「君の息」を盗んだものだと、今は会えないらしい青年こそ実は本家本元のroseだと暗示するが、その出だしは、すみれに向かって「美しい盗人よ、お前はその甘い香りをどこで盗んだ、わが愛する者の息からでなくて」（2〜3行）と叱り付ける。しかもスミレの紫色は「わが愛する者の血」で染めたもの（3〜5行）なのだから、殺された死体の血から「その血によく似た紫色の花」が生い出る『ヴィーナスとアドニス』（1165〜69行）を想起しないわけにはいかない。しかもソネットは「百合を私は君の手〔の白さ〕を盗んだと非難し…」（6行）と続く。ヴィーナスが掴んだ若者の手も「百合」（362行）に譬えられていたのだから、アドニスの姿にその相貌を描きこんだリスリに語りかけていると考えるべきではないか。だがそれならなぜ、スミレ（一回使用）や百合（二回、おそらくではなく、roseを多用し、my Rose（109）とさえ呼びかけるのか。それはどうやら単なる詩的美化ではなかった。青年がH. Wriothesleyという名であることを思い出すべきではないだろうか。[二七]つまりmy Roseと一五、六度も呼

びかけるのは、それがmy Wriothesleyを響かせていたからなのであり、1～125番のあちこちで使われるmy loveの、よりパトロンに即した愛称だったのだ。するとソネット一番で「美の *Rose* が死ぬことは決してない」（2行）とイタリックにしたのも拘泥していいだろう。これは相手への呼びかけというより比喩である。しかしイタリックは総計三五回用いられるが、神話や古典文学の人物名に十回、中には意味不明のものもあるが、普通活字との対立で自ずから読者の注意を喚ることにはなる。この場合はパトロンの名との語呂合わせを擬人化でより際立たせ、それを冒頭に出すことで以下のroseに隠れた意味を波及させている。[二八] リスリ説にもう一点加えると、ソネット105番は「三つの主題が一つになれば素晴らしい世界が見えてくる。美しさ、優しさ、真実はしばしば一人で生きてきた、この三つが一つところに宿ったことは、これまでは一度もなかった」で終わるが、これはサザンプトン家の紋章銘「全ては一を、一で全てを」と一致する、とピエール・メシアンは述べている。[二九] メシアンはサザンプトン派である。ついでに言えば『ソネット集』（36, 37…）や『フェニックス』で二は一、一は二という論理が度々用いられるが、これも家の銘のせいなのかもしれない。

ではどんなソネットが塔の友人に献げられたのだろうか。一六〇一年二月、エセックスをはじめ謀反の死刑囚は次々に処刑されたが、サザンプトンだけは家族の嘆願が功を奏して女王から死の減免を赦された。当人も関係者も胸を撫で下ろしたに違いなく、これは友人で庇護者としては是非とも一言申し陳べる機会である。しかしだからといってお祝いの言える状況ではなく、詩人としてはこの喜びをどう表明したものか一思案あったに違いない。物の言いようによっては、エセックスたちへの深い哀悼に浸る誇り高い貴族の心なり体面なりを傷つけ、心無いことをいう下司下郎と怒らせかねない。ソネット30, 31は詩人がこの辺りにどう対処したのか、慎重に熟慮した末の手際のほどを見せているように思われる。それは一言でいえば、死んだ同士たちへの心からの哀悼の情と、おめおめ一

人生きることとなった相手の青年の積極的な存在意義の誇示である。30番は、意訳すると「甘く（sweet）静かなもの想いの法廷（sessions）に過ぎしことどもの思い出を召喚すると、私が探し回った数多くのもの（thing＝人）が欠けていることに嘆息し、そして深い嘆きでわが愛しい時間が無益に過ぎ去ったことを改めて悔しく思う」（1～4行）と始まるが、「過ぎしことども」や探し回っても見つからない「多くのもの」とは唯の過去の感傷的な追憶ではない。法律用語、sessions, summon upが、wail（泣き叫ぶ）, woesという強い感情的表現と相俟って、そう落着するのを引き留める。不在を嘆かれる「多くのもの」ないし「多くの人」とは何なのか、それは続く二行でもう少し輪郭を現してくる。「そんな時私は、死の際限のない夜に隠れた大切な友人たちのために（普段は流さない）涙で目頭を一杯にすることもできる（can I drown an eye）」。過ぎたこと、多くのもの、とは死んだ大切な友人たちのことだった。lack（三行）がただの不在ではなく死のことなのであれば、いくら探しても見つかるはずはない。どうして死んだのか。二つの法律用語はその死が自然死ではないことを暗示していよう。かといってそれが処刑だとか、ましてや謀反の罰だとあからさまに言うわけではもちろんない。それは言ってはならないことである。たとえ献呈時に露骨な表現が使われたとしても、それは出版時に作者によって訂正されたはずである。そう考えると詩の主旨が汲みやすくなることは事実である。続く「そして私はずっと以前に取り消されたloveの深い嘆きのために改めて涙を流し、多くの消え去ったsight（目に映る姿）という犠牲（expense）を嘆く」（7・8行）も、要するに親しい友人たちの死を嘆くと解せるが、ではexpenseの背後には遺恨が渦巻いているだろう。とはいえ“love's long since cancelled woe”が不可解である。cancelled woe（取り消された悲嘆）とは何なのか。おそらく処刑という深い「嘆き」が献呈を受ける青年だけにはcancelされたことを仄めかしている。その意味はwoeを「嘆く」（weep）の目的語にすることで表面上成立しないとしても、これは危険な第三者への目晦ましでしかないだろう。

この loveは一行目の sweet, 四行目の my *dear* time's waste（強調引用者）と共に、かって惜しみなくこれらの語で称えたパトロン個人をそれとなく指している。sweetはソネットにおいても青年への常套的呼びかけであるが、sweet thought（1行）は女性的な青年への友愛を込めており、ここでは従って相手がつつがなく生き残ったことへの秘かな喜びの表明となりうる。「わが愛しき時間の浪費」とは愛する君が塔の中で無為無益にすごす囚人としての身の上への同情を死者追悼に紛らせて語ったのではないか。真摯な哀悼を述べながら、実は何より一青年が生命長らえたことを、その被害者的相貌を濃く隈取りながら慶賀することを動機としていたと思える。次の三行の「そんな時私は過ぎ去った深い悲しみを悲しむことができる、深い悲嘆から悲嘆へと、すでに嘆きおえた嘆きの悲しいaccount（明細、勘定報告、説明）を何度も語ることができる（can I grieve…and〔can〕tell…）、」（9～11行）は、それまでの死者たちへの哀悼の繰り返しとも見えるが、微妙にそこからずれ始めている。grievances foregone（9行）, fore-bemoaned moan（10行）と、それがすでに過去の出来事であることが、2行目の「過去のことども」と響きあって少々過剰に強調される。いやそれはその後に「（そのaccount）を私は、新たに支払う、以前に支払い済みではないかのように」ともう一度繰返されるのだから、重点はどうやら哀悼自体からその一件はもはや「支払い済み」、つまり過去の話だという方へ移っている。いや「記憶を召喚する」位だから、最初からその趣旨は一篇の動機に根ざしていたと言える。単なる真摯な哀悼の表明であれば、涙を流すこともできる、嘆くこともできる…という二回のcanは少々首を捻らせる。哀悼の念を捧げながらも、死者たちとはやや距離を取りだしていたのだ。そしてそれは生き残った青年の慰撫こそ作者の真意だからではあるまいか。最後の二行、「しかしそんな折、親愛なる友よ、君のことを思うと、失った全て（loss＝死）が取り戻され、悲しみは終わる」になると、その主調音が哀悼の背後からせせり出てくる。生きていてくれてよかった、君が生きていればどんな犠牲も埋め合わされる、と

今やかなり率直に喜びを表明しているのだ。塔の青年は一人生き残ったことに安堵と共に慙愧の念も抱いているのを察した上で、悲しいことが起きたが、しかし私には君が生きているだけで救われると述べて、素直に嬉しがれない忸怩たる思いを払拭してやろうとしたのだ。とはいえこれでは少々身びいきの感を免れない。他の処刑された友人たちの浮かぶ瀬がなくなる。おそらく少々言いすぎたのを修正しようとして同趣旨の31番が書かれたのではないか。例の反復癖、主題の可能性を掘り下げる連作傾向が基本的にあるとしてもである。

修正は二つの方向においてなされるが、それも結局は一つに帰する。第一は、天国で生きているとまでは言わないが、友人たちは実は本当に死んだわけではないこと、第二は君が生きているからこそ彼らも生かされていること、である。「見かけないので死んだと思い込んでいた全ての心（hearts＝愛する者、勇気ある者）」（1～2行）、「埋葬されたと思ったこれらの全ての友人たち」（4行）とは30番の「死の際限のない夜に隠れた大切な友人たち」のことであろう。だからここでも、彼らに抱く「敬虔な愛」のために「私の眼から何とたくさんの神聖な哀悼の涙」が溢れ流れたことかというのは、30番の繰り返しに思えるが、しかし「…思い込んだ」（supposed）とか、「…思った」（thought）には事実認定への婉曲な否定の気配を覗かせている。死んだと確かに「思った」が、しかし彼らの「心」のお陰で「君の胸底は大切なもの〔場所〕となり、愛とそのあらゆる美徳がそこに君臨している」（1～2）、なぜなら埋葬された友人たちは「私の眼から隠れはしたが」（6行）、「移動して、君の中に隠れて〔永遠の眠りを〕眠っている」（8行）にすぎないからだ。この世に生きているのではないようだが、しかし死んだわけでもない。「君は、埋葬されたloveが〔その中になお〕生きている墓であり、〔墓は〕今は去りし愛する友人たち（my lovers）の記念の品で飾られている」（9～11行）。loveは君と友人たちとの愛であり、また少々はloversであろう。彼らの幽明の境が判然としないのだが、彼らは君になった、だから君が生きているお陰で彼らはなお生きている、ということ

なのだろう。悪く言えば、言葉の抽象性に突けこんだアクロバティックな誇張だが、しかしアドニスを始めとする数々の死後の再生神話を伝え持ち現に毎年復活祭を最大の行事とするキリスト教圏ではそれなりの説得力はある。最後はそこからまた微妙に趣旨がずれ、私と君の関係に主題が絞られる。「彼らは私から得たものをすべて君に与えた。多くの人の当然得るべき〔愛の〕持分は、今や君一人のもの」（11～2行）になったと例のごとくのパトロン一人に向けた愛の信義の表明である。それは更に強調され、「私の愛した彼らの姿を、私は君の中に見る。そして君は彼ら全員なので、私の〔愛の〕全てを自分のものにする」と締め括られる。

他の同志が処刑される中一人生き残りそれを喜んでいるだけに心咎めているだろう、いまだ血気に逸る青年にとって、君は死んだ彼らがなおも生きつづける墓だというのはその面目を救って余りある。青年が生きつづけ、友人たちのtrophies（本来は戦利品）を飾る栄誉の場となることで、彼らも犬死にを免れられる。なお墓とは本来再生した死者の生活の場であるという信仰の記憶が見えるが、他方でこの語は塔に囚われた青年自身の姿も仄めしている。彼自身、塔という墓に「埋もれて」いるのだ。「彼らの姿を今君の中に見る」とは、だから彼の置かれた傷ましい状況を指しうる。ところで死んだ友人の身元に関して改めて考えると、例えばtrophiesという語は戦いがあったこと、また死者たちを嘆く悲しみの強さはそれが非業の死であることを匂わせるし、また友人たちがおそらく全員一度に死んで詩人のパトロン一人だけ生き残った様子などから見て、これはやはりエセックスの叛乱と処刑を背景にしていると言うべきである。サザンプトンの生涯において、多勢の友人を一時に失いだから庇護詩人が彼を慰め励ますような状況は差し当たり他に見当たらない。するとここに同じ悲劇への挽歌とわれわれの考える『フェニックスと雉鳩』に通じるものがあっても不思議ではない。今回も死者の一種の哀悼である。sessions, sigh, buried, といった単語レベルの類似も偶然ではないだろう。執筆時期は死んだ友人たちとの時間的距離に留意する

と事件の動揺が鎮まりかけた頃、早くともリスリが妻との面会を許された一六〇一年一〇月か、友人が訪問が出来るようになった一二月以降であろう。つまりは『フェニックス』と同時期か少し後、例えば一六〇二年初めということが考えられる。であれば30番で友人たちの死が「過去のこと」となり、また「私の愛しい〔友の〕時間の空費」が問題になり、どうやらそれに死刑判決が「ずっと前に」撤回（cancel）されたことなどとも辻褄は合う。

ソネット107番（一六〇三年四月以降）のtyrantは「瀕死の月」と相俟って、女王の暗示だった。これは『フェニックス』のtyrantに関するわれわれの推測と、庇護詩人がサザンプトンに女王をどう現していたかという点で合致する。といってもソネットのtyrantが常にあの憎い王を諷するわけではない。たとえば内容から一五九二年頃と推定できる1〜17番にはこの語が二回使われているが、これは誰も勝つことの出来ない、全てを破壊する「時」の比喩的表現である。これらの「暴君」も「時」も、結婚に尻込みする青年に若さも美もうつろいやすいから、それを保つには子を早く作って後々まで伝えるしか手立てはないという生殖の勧めの中で使われており、政治的含意のない、いわば唯の物理的な時間のことだとひとまず言える。それに対して塔への献呈と見なせるソネットではtyrantは107番を除くとあまり用いられないが、その同義語としてのTime/timeはまさに暴君的相貌において頻繁に登場する。予め二例挙げれば、63番で「わが愛する者は〔…〕時の横暴な（injurious）手で押し潰される」と言う時、また116番で「私は時の暴政（tyranny）を恐れつつも、君を愛する…」、「時のおこした無数の事件が誓いの間に割り込み、国王の布告を改変させ…」という時、これらの「時」には無常な物理的時間の背後に好き勝手に振舞う—と庶民には見える—時の最高権力者であるあの女性の姿が透かし見えるようだ。とはいえこれらの詩行も1〜17番でのように語の辞書的意味だけで理解が不可能というわけでもない。従ってそこに政治的批判を見るのはあくまでも一つの解釈にすぎず、僻目のなすわざと反論されれば絶対にそうだと言い張れる確証はないのだ

が、作者としては叛逆者を励まそうとすれば検閲上表現に用心せざるをえないことを念頭におく必要がある。それらはいわば文脈の絡みの中で、済ました表情にちらりと浮かぶひき攣りや渋面でしかなく、言葉尻を掴ませない多義的曖昧さを利用して反対側に逃げ道を用意しておかねばならない。でなければ何も言えなかったろう。言わずして語る修辞学が要請される。time という中性的抽象的な言葉に対してならいくら悪罵を浴びせようと誰も目くじらを立てはしない。そこを付け目にことさらなる攪乱戦法であの人物を苛責なく罵倒したのである。生殖の勧めソネットは「時との戦い」(15, 16番)という主題からいって「時」という語を使わない場合でもその威力との戦いが問題になるが、ところがそれらにおいてさえすでに物理的な時間の移ろいから擬人化されたものまで微妙に意味のニュアンスが異なって到底一つには収まり難い。その一方で「時の湾曲した大鎌(sickle)が振り回されるところに、〔君の〕バラ色の唇や頬が置かれようと」(116番)は、12番の「時の鎌(scythe)に逆らえるものは何もない…」と同じ鎌の比喩が用いられている。しかし若さを失なわせる同じ鎌でも両者の切れ味は大分違う。12番は青春は短い、ぐずぐずするなという老婆心からの誇張である。しかし116番の鎌は血の味がする。といってもそれはこの詩自体ではなく、関連ソネット(これから取り上げる)を幾つも重ね合わせて始めて得られる感触でしかない。ただ何故こうも残忍な比喩を誰も免れぬ時の移ろいに適用したのか、とは問える。これはやはりエセックスを処刑した、そして今サザンプトンの青春の若さを頓に獄中で失わせているあの人物への、詩的誇張に紛れた当てこすりだからだと思われる。だが面白いことに、より残酷な色彩を施されるのは116番ではなく、結婚ソネットに属する12番なのだ、「なぜ君はこの血みどろの暴君である〈時〉ともっと有効な方法で戦わないのか」(1〜2行)。結婚して子を作れという説得において、「時」をいうのに“this bloody tyrant Time”(16番)と「血みどろの」「血に飢えた」を意味しうる bloody を使うのは、少々大げさすぎる。だから「この残虐な暴君」(高松訳)と文脈上比

喩的に処理せざるをえないのだが、この不適切さは実は上掲の意図的な攪乱の類いではあるまいか。16番ならbloody tyrantは甲高い詩的誇張で済む。12番のTime's scytheもそれから身を守れるのは「子を生む」以外にないという文脈に紛れて、政治的含みでもあるのではないかといった疑いは起こさせない。しかしこれらの剣呑な言葉遣いは「わが愛する者を押し潰す」"injurious time"〔116番〕の方が適切であろう。つまり一六〇一年二月二五日以降でなければ出てきそうもない「時」の見方が、一五九二～三年のソネットに使用されているのだ。これは年代推定の見直しを迫るものではなく、出版時に作者によるソネット全体の慎重な再編集があったことを語るのではないだろうか。杜撰な校正、字句の誤り、一貫性のない大文字やイタリックの使用などから、作者は『ソネット集』の原稿を渡した後は出版人のT・ソープに全てお任せだったのではないかという見方もあるが、実はそれもこれも正反対のお呆けでしかなく、用語であれ構成であれ検閲の眼を晦ます綿密な仕掛けが施され、その上で全体を見渡しての最終チェックさえ行なわれたのではあるまいか、という疑念を用意周到なる『ハムレット』の作者は抱かせるのだ。timeという語はその惑わしの手口の最たるもので、意味の詮索を辞書に任せきりにしてはならない。と言っても一筋縄ではいかないその多面的意味の交錯は、たとえ裏があると睨んでも生真面目な読者を混乱させ追求を断念させるのに充分である。というより意図的にそう企んだのに違いない。何度も繰返すように作者は自立した詩の客観的理解を求めたわけではなく、いやむしろそれをできるだけ妨げつつ、愛する青年がいわばあうんの呼吸で理解すればそれで用は足りたからである。さらにこのtimeはハムレットの、「今や時の間接が外れている」という科白にも影を落としているだろう。それは彼の母ガートルードが支配するデンマーク、あるいはこの国を支配する王妃のことだった。16番の「時」に戻ると、そのbloodyはすぐ後の「全てを貪り食らう〈時〉よ」で始まる19番にすんなりつながる。しかし指示対象は全く別だろう。こちらは政治的批判のこもった、つまりはあのお偉い方の

ことなのだ。「長生きのフェニックス」（44行）という、チェスターの長詩（このフェニックスは女王である）とそのシェイクスピアの付録詩（「長生きカラス＝婆あ」）を混ぜ合わせた表現も、この背後の意味に根ざしていよう。といっても簡単に尻尾は掴ませない。「時」の残酷な破壊力は詩人ならずとも誰もが言うことだし、シェイクスピアがあれこれ参照したオウィディウス『変身譚』にも、「おお、ものというものを喰らいつくす『時』よ！　嫉み深い歳月よ！　お前たちは一切を破壊する。時間という歯にかけて、あらゆるものを、徐々にゆっくりと死滅させる」[110]と時を敵視しているのだから、いくら非難しても文学の神の心強いお墨付きが楯になってくれる。では単に伝統を踏襲しただけなのかといえば、ソネット1～125篇全体の主調音といえるほどのこの主題への偏愛、というより一貫した敵対から言えば、やはり常套に突け込んだ罵倒のたぐいと言わねばならない。「嫌な天気だ！」と散々詰ったからと言って、誰が侮辱された天気のために声をあげようか。その調子で言いたい放題が許されることがらなのだ。ただしラテン詩祖の方は、時の破壊力を難じた後で、逆に「この世界に何一つ滅びるものはない」と続ける。創造もまた時のお陰で可能だという、その積極的な意義を前面に打ち出すことを忘れなかったのだが、そこでルネッサンス詩人は袂を分つ。いうまでもなく「時」に酷い目に遭っている友人の庇護者としての立場からである。19番で列挙される〈時〉の悪行とは、「獅子の爪をなまらせ、大地に彼女の愛しい子供たちを貪り喰らわせ、猛々しい虎の顎から鋭い歯を引き抜き、長生きのフェニックスを彼女の血の中で焼き殺す」ことである。四つとも破壊力の例示なのだろうが、これらが選ばれた理由を憶測するとやはりあの謀反の悲劇へと導かれそうなのだ。チェスターの流れを汲むかぎりフェニックスは女王であり、従ってそれが焼死するのは最後に雉鳩を追って炎に飛び込んだ心中に通じるが、シェイクスピアの付録詩ではこの鳥はエセックスだった。するとここは、この二つの詩を介して女王によるエセックスの首切りを、その残酷さを「彼女の血の中で」に込めつつ、遠まわしに述べていたのでは

あるまいか。16番の「血なまぐさい暴君」も溯ってその影を濃くしている。また長生きについては、「汝〔時〕の古代のペン」や「年老いた〈時〉」でさらに強調される。なぜここにantiqueやoldが使われるのか、文脈的必然性がないので、冒頭で「全てを貪り喰らう〈時〉よ」と呼びかけられた人物の老齢を嘲笑う毒気にみちたあてこすりと思うほかはない。詩人の呼びかけはさらにこう続く、「季節を楽しくも悲しくもするがよい（…）、この広い世界や消えうせていく彼女のsweets〔愛しい人々〕に対して、好き勝手な真似をするがよい」（5〜7行）。これはまず相手の「時」がこの世〔英国〕は望みどおりというあの支配者であることを語るものだろう。となると「彼女の愛しい人々」とは、愛人エセックスを誰よりも指すことになろうが[三]、これは二行目の「自分の愛しい子供たち」と通じており、それを大地に貪り食わせるがいいとは子供ほど年の離れた愛人を殺して大地に埋めたことを当てこすっているようだ。「消えうせる」fadeもこの世から抹殺したことの変奏である。獅子の爪をなまらせ、虎の牙を抜くというのも、武装したエセックスたちの蜂起に先手を打って手も足も出せないように仕向けたことを、逆恨みながら述べたというところだろうか。始めの七行で何でも好きなようにしろ、殺せ、焼けと不貞腐れ気味に譲歩した後で、しかしその引き換え条件を出すように「ただし、汝に禁じる、最もおぞましきこの罪悪だけは」と言いだすので、よほど邪悪な罪なのかと思えるが、しかしそれは「わが愛する人の美しい額」に「古代のペン」で皺を刻むことでしかないのである。いわば残虐をつくして世界を蹂躙し破壊しようとも、こればかりはどうしても許せないと、あの青年をお前の時の歩みで汚さないでほしい、と要求するのだから、これではいくらなんでも身贔屓である。しかし友への愛ゆえにこれほどにことの軽重を失した（同志達は首を切られ、内臓を抉られたのに）特別扱いをするところに、パトロン文学の本領があるともいえる。この言い分から見ると、エセックスとその同志たちが処刑され、愛する青年の処刑が特赦されて大分経った頃の作ではないかと推し量れる。女王（old Time）に年の醜さ

を当てこすりつつ、どうかせめて彼だけは塔の中でその若さを空しく朽ち果てさせないでほしい、と頼みこんで見せるのは減刑の有難みが薄れて、むしろ監禁を解かないのを横暴と思うようになっていたからだろう。なおこれが「時」すなわち女王への嘆願でないことは言うまでもない。そういう体裁で、パトロンに向かって自分の信義を披瀝したのである。すると19番は一見したところは、時は恐い、いつまでも若くはいられないからという生殖ソネット1〜17番に連なると思えるが、上掲のように同じ time でも指示対象は別物で、たとえば後述の63, 64, 65番における time, つまりあの支配者の風刺なのである。19番の最後は、しかしいくら頼んでも無駄、どうせお前（＝「老いた時」）はその痕跡を刻み付けるはず、だがそれが何だ、「我が愛する者は私の詩の中でいつまでも若くいられるのだ」（14行）と時への勝利を宣言する。時の破壊を免れるものは何もない以上、せめて文学による時の超克を期して、君は君を愛する者の詩の中に永遠に生きるよ、と時をせせら笑って見せた。これはその時は引かれ者の小唄めくが、押しもおされぬ文豪となった作者の余慶で今も読む者がいるのだから空手形にはならなかったわけである。いや当時も、T・ソープの献辞に「W. H. 氏にわれらが不滅の詩人によって約束されたあの永遠を〔…〕祈る」とあるのが、オウィディウスやチョーサーの驥尾に付さんとする作者の自負を反映しているとすれば、口先の気休めではなかったのかもしれない。107番の暴君の立派な墓が消え失せても変わらない「君の記念碑」を樹立するというのも、そこに根ざした刊行意図を決まり文句の下にちらつかせていたことになる。詩による永世が、最初に（一六〇九年版の配列順序を踏めばだが）[三三] 豪語されるのは18番において、人が生きている限り「この〔詩〕は生きる」と述べたのが最初で、その前の17番でもそれを語るが子を作るのが先決で、詩的永世の主張はごく控え目であった。19番は old Time の威光をその数々の悪行を挙げて詰る調子から言って30, 31より少し後の塔への献呈、エセックスの刑死を嘆き、またサザンプトンの助命を喜ぶ時期をかなり過ぎた頃と推測したが、ではその前の18番も拘束

中の青年に向けられたのかもしれない。まず「君」が「夏の一日に比べられた」後で、「荒い風が五月の愛しい蕾を揺すり、夏の賃貸借期間（lease）は余りにも短く終わる」（3行）と続くが、これは何を言うのだろうか。いわば若さの盛りで突然凶変が襲いかかった、つまり「荒い風」が吹いたのではないか。leaseは107番でも塔に拘束された青年の立場を言うのに用いられたが、たしかに拘束は強制的であるとしても、高い生活費を払って入居していることを思い出せばこの用語は言いえて妙である。つまりどうやら18番もすでに塔への献呈なのである。そうすると「死も、君がおのれの影の下を彷徨っていると自慢することはない、私の不滅の詩の中で君が生きているかぎりは」（11～2行）というのは、謀反人たちを処刑したあの人物が青年を塔に閉じ込めている状況を踏まえている。いわばそこは常に政敵や女王の悪意に曝され、拾った命もいつ失うかと疑心暗鬼に駆られてもおかしくない場所なのである。だから、大丈夫、この詩が君に命を与える、という慰めが意味を持つ。もっともそれを直截に述べれば、囚人の不安を掻き立てるだけである。詩の中で「君の永遠の夏は色褪せることはない」（9行）と、死ではなくまず青春の衰えに焦点を据えたのはその配慮であろうか。

ではエセックス自身に焦点を当てることはなかったのか。25番は一瞬ながら彼の姿を浮かび上がらせていると思える。全体の主旨は、この世には王侯の寵愛をえて世（つまり宮廷）に時めき栄光を恣にする方々もおられるが、しかし玉顔くもれば千の功も空しくたちまち失脚の憂き目をみる。その点私は最高の栄誉に恵まれて幸せだ、愛し愛される君との仲に少しの揺るぎもないのだから、と例の如くの青年への愛の表明である。しかしそれは副次的な動機にすぎない。そのパターンを借りて、エセックス事件への党派的論評が織り込まれている。それはとくに「その功労により武勲かくかくたる苦痛にたえた戦士も、数々の勝利の後に唯一度でも敗れれば、栄光者のリストから完全に抹消される」（9～12行）に仄見えている。これはローリーがいわば自分の後釜に座って宮廷にのし上った

エセックスへの面当てをしているのではないかという見方もあるが、[三三] ローリーの躓きとしては秘密結婚と謀反が考えられるが、戦闘による失敗は知られていないし、シェイクスピアが問題にすることでもない。エセックスの失墜と処刑は、一言でいえば、一五八六年のオランダでの戦闘、一五九六年のカディス攻略（つまりは略奪）、一五九七年のアゾレス遠征などで女王のために勇敢に戦って勝利を収めたのに、惜しむらくはアイルランド遠征で無念にも武勲を立てられなかったためだという見方―好意的な―[三四] もできるだろう。ハムレットの科白が思い出される。王子は久しぶりに会ったホレーショに、女王の結婚と国王即位の乱痴気騒ぎを聞きながら、ああいう習慣はやめるべきだ、お陰で折角見事に達成した偉業も骨抜きにされると苦々しく述べた後、それは個人も同じだがと話頭を転じ、「人は唯一つの欠点を、〈自然〉のお仕着せであれ Fortune の星であれ、身に烙印されると、その grace（優雅、好意、恩寵）のように純粋で、人が持ちうるかぎりの数々の他の長所も、唯それだけで世間の非難を浴びて汚され、朽ちる…」〔1-4〕と世の不公平を難ずる。作品内での機能的意味などさして無いこのお喋りは、ソネット 25 と同様に、エセックスの失脚をことの序でに暗示していたのではないか。差し当たり一～二年の差は考慮せずに言えばどちらも時期は同じ、つまり一六〇一年末～一六〇三年三月位の作であろう。25 番は「自分たちの星（their stars）の寵をえている人たちには、世の栄光と高い肩書きを自慢させておけ」（1～2 行）で始まり、だが生憎「私はそういう勝利の幸運（fortune）からは遠ざけられているが」、しかしそれが何だ、君の友情という最高の栄光に恵まれたのだから（3～4 行）、と続く。『ハムレット』との単語上の類似はおそらく偶然ではない。ここも悲劇と同じく、fortune は国家つまりは宮廷の人事を思いのままにする女王を指すようだ。宮仕えの辛さは「偉大な王侯たちの寵臣も、陽光を浴びる金盞花のようにその立派な葉を拡げているが、彼らのプライドは胸底に押し込まれている、不興を蒙れば栄光のさなかに死ぬ」（5～9 行）と、一度の失敗で宮廷から「抹消された」有能なる人物つま

りはエセックスの暗示へと続くのだが、このfortuneの恩寵はここでは二重の意味を持つ。後半は処刑されたエセックスの正当化へと傾くが、実はそれを凌ぐもう一つの動機も揺曳する。栄光の高位・高職にふんぞり返る重臣たちは放っておけ、いずれ気紛れな恩寵に泣かされようという前半は、今窮境にある人物への、そんなことでくよくよなさるな、やがて海路の日和ありという慰めになる。しかしこれは老女王の先は長くないという言うべきでない大胆なことを言ったことにもなるから、「君の愛があれば…」という信義の決まり文句で曖昧にぼかされる。そこに着目すると、19番のようにエセックスの処刑との距離と相俟ってやはり一六〇一年末以降、女王在世中でもかなり後の作ではないかと思われる。つまりこれも塔のソネットなのである。

ソネット65もこの死刑免除以降の作と思わせる仄めかしが散見する。主旨はやはり、何ものも時の破壊力には抗しえないのだから、花よりもかよわい愛する友に一体何ができようか、わが詩の中で輝きつづけるという奇跡が起きらぬかぎりは、という18, 19番と変わらぬ詩による不滅の生の言明である。「時」に対して「夏の甘い吐息がどうして持ちこたえられよう」（5行）などに注目すると、19番の動機反復である。しかしそのあちこちに、単なる青年礼賛には帰しがたい切迫した戦闘の気配や干戈の響きが聞こえてくる。このソネットには、蜂起したエセックスが万策尽きてシティから辛うじて屋敷に戻ったものの、政府軍の軍門に降ることになった一六〇一年二月八日の経緯が、織り込まれているようなのだ。それもつまりは塔の中に囚われて運命の日の出来事をあれこれ歯噛みしつつ思い出しているに違いない青年の気持ちを忖度してのことであろう。「真鍮〔の碑〕brassも石碑stoneも大地も果てしない海も悲しい死の定め」に打ち克つことはできない、まして花一輪の腕力もない美にどんな抗弁（plea）ができようか？（1～4行）と言うのは、家族による死刑減刑の嘆願（plea）に絡ませているようでもある。続く「攻撃する月日の破壊的な包囲（the wrackful siege of batt'ring days）に対して、夏の甘い吐息がどうして持ちこたえ

ようか」〔5～6行〕は濃く蜂起の様子に触れているようだ。この「包囲」云々とは、その日市民煽動の働きかけも無駄に終わってシティから舟でテームズ川伝いにエセックス・ハウスに辿り着いたものの、すでに頼みの人質は逃げ出し、圧倒的な勢いの政府軍に取り囲まれてもはや抵抗のすべもなく屈服した反乱軍の敗北を諷しているのではないだろうか。一行おいて「鋼の門もそう強力ではないのだから」と続くと、この感はひとしお強くなる。直接にはエセックス邸の鉄門を、さらに刀剣や甲冑による武装を指すのかもしれない。政府軍と切り結んで生命を落す者もいたのである。その後は若さの衰えへの懸念へと戻って、「時は荒廃させる」（8行）と続き、生命の危険はもはやそう感じられない。「時の最上の宝石を時の小箱からどこに隠しおおせよう」（10行、傍点引用者）とおろおろしてもこの時の小箱（chest）は、女王管轄下の牢獄ではあっても棺ではなさそうである。なおこの二つの時は意味が別で、前者は「現代の」位であろうが、後者はあの君主であろう。それは次の「どんな強力な手が時の速い足をおしとどめえようか、誰に時が美を損なうのを禁じられよう」（11～12行）に引きつがれ、しかしもはやここでは愛する者の若さが衰えることへの危惧に重心が移っている。といってもそれは歳月と共に避けがたく来る現象への思い患いではなく、青年が大切な時期を将来への希望を断たれて「死の影」の下に閉じこめられていることへの切歯扼腕の思いであり、19番で時＝女王に皺を刻むなと、やや威高丈に命じていたのと同じ発想である。すると冒頭の全てをなぎ倒す「悲しい死の定め」（2行）は存命中の愛する友には適切を欠く。この死は処刑された同志たちの不幸を述べていたのではないか。その背後の状況をここに見てとれば、上掲のソネットの立場とも符号する。叛乱の記憶はまだ失せていないが、しかしエセックスの処刑の悲嘆と哀悼に言葉もないという時期をこれも大分過ぎた頃の作と思われるのだ。もっとも女王の在位中なのかその死後なのかはそれだけでは察しがつけにくいが、「恐ろしい想像が沸く！　時の最上の宝石を時の小箱に入れないように隠せる場所がどこにあろう？…」〔9～10行〕

が、塔の幽閉を解かれない友の身の上を案じているのであれば、やはり女王在位中であろうか。もっとも他のソネット（63, 64）と照合すると、逆に「時の小箱」たる塔から出た後、またそこに戻りはしないかと危惧したと言えなくもない。一六〇四年の夏誰かの讒言でサザンプトンが逮捕され、当人の必死の弁明でどうにか塔に戻らずにすんだ事件があったからである。

63, 64番も65番と同工異曲で、言葉や角度を変えてほぼ同じことを語っていると見える。64番の最初の4行、「時（time）の破壊的な手によって擦り切れ（＝忘れられ）、埋葬された時代（age）のあのきらびやかで尊大な〔人たちの〕犠牲を損ねる（defaced）のを見た（have seen）時、以前そびえ立っていた塔が跡形もなく倒壊し不滅の真鍮〔の碑〕（brass）が死の怒りに屈服するのを見る（see）時（…）」は、重複し錯雑しまともに字面を追うと訳がわからないが、これまでの見方に従えば1～2行の埋葬された犠牲者とは叛乱の処刑者たち、「破壊的な手を持つ時」とは、女王を暗示するとひとまず見なせる。deface とは「顔を―首を切って―損ねる」ということになる。だが同時にageはしばしば老いた女王を諷することも忘れてはならない。するとburied ageを「葬られた過去の時代（の人）」として、それが「擦り切れた」のはあの老いた女王の時代は終ったと告げていたことになり、続く3～4行はその流れを汲んでいよう。高い塔や不滅の真鍮碑などを、悲運の青年に対して庇護詩人が無邪気に口にしたとは思えない。これまでのように裏のある表現ではないのか。塔の倒壊とは塔を一角とする国の秩序の改変を、つまりはチューダー朝が滅んでサザンプトンが釈放されたことを、不朽の真鍮碑が死の怒りに屈服するとは、107番と同じく女王を筆頭とする権力者たちの勢威も忘却の淵に沈むことを、いやなにより女王の死を仄めかしたと見なせる。「時」たる女王も時の破壊（死、忘却）を免れないわけだが、これは未来の予言ではなく女王はすでに鬼籍に入っていたからではないか。1～2行における処刑の目撃証言は現在完了で示されているのに[三五]、3～4行の塔と真鍮碑の

方は現在のこととして語られているのは、制作時期も107番と同じ頃だからかと推測させる。といってもことはそう単純ではなさそうだ。65番で推定したようにたとえそれが女王最晩年の塔への献呈だとしても、出版は一六〇九年なのだからその間（つまり出版時に）、検閲への配慮から作者が手を入れ直した可能性は充分にあり、それでなくとも困難な伝記的な追跡を更に意図的に紛糾させることになっただろうからである。つまり「擦り切れ埋葬された時代（＝老齢 age）」とは、一六〇三年三月二四日に死にウェストミンスター寺院に祖父ヘンリー七世の真鍮碑の脇に葬られた女王を一瞬照射していたことも考えられる。それにエセックスに対して、力尽きた、とも取れる outworn というやや貶辞的な語を使うのは、たとえ一六〇三―一六〇四年以降でもまだ党派的に憚りがあったはずだ。確かにそれを含む冒頭四行は、107番の「暴君の紋章と真鍮の墓が朽ち果てたとき…」（14行）と響きあっている。次の四行の陸の王国と大洋の一進一退の戦いとは英国のエセックス遠征軍やスペインとの衝突を語っているようだが、それを受けた8, 9行の「私は見た、国家自体願いを打ち砕かれて滅び、入れ替わってしまうのを」とは、女王の死という文脈に立てばまさに新王ジェームズ即位の、今回はやや気の乗らない記述であり、11行の「廃墟」とは朽ち果てる真鍮の墓を介して死んだ女王の時代を指すことになろう。最後の三行は「〈時〉（Time）がやってきてわが愛する者を奪い去る（…）。この考えが死のようなもの、失うと怖れているものを手にして泣くほかはないのだから」と死の懸念を―若さの衰えではなく―表明する。では女王という「死の影」の下を彷徨っていた頃なのか。だが塔の囚人に対してこんな口は聞けないのではないか。独裁者の一存でどんな目に遭うのか不安の拭えない人間に、いっそう恐怖を煽ることになる。するとそんな恐れのなくなった頃、といえばつまり女王の死後、そして釈放される四月一〇日前が考えられる。もっともこの〈時〉は大文字にも拘わらず栄枯盛衰の場としての無害な時一般なのかもしれない。

63番も同じ話題と見なせる。盛りの花も年と共に衰えていくが、しかしその美しさは私の詩の中でいつまでも滅びることはないというパターンの踏襲である。ただそれだけでは一篇の動機は半分しか伝わらない、という点でも65, 64番と軌を一にする。しいて後者との違いを言えば衰退する若さへの歎きにことよせて、より生生しく入獄の原因となった出来事や女王への反感が込められたことだ。「今の私のように、愛する者が時（time）の非道な手で押し潰され、擦り切れてしまう時のために…」（1〜2行）、の「時の非道な手」は、「時（hours）が彼の額を大小の皺でみたした時…」（3〜4行）、「彼が今王者として君臨するこれら全ての美が消えて」（6〜7行）などと相俟って、若さを失わせた時への不満や憎しみが籠っている。しかしこのinjuriousという語の「不当な、権利を侵害する」という法律的な意味や、身体を「傷つける」という意味も次第に文脈的に浮かび出てくる。「時間は彼の血を呑みほした」（3行）、「彼の青春の夜明けが、急激に募る年齢（＝老齢Age）の夜に向かって苦しみつつ旅した時」（4〜5行）などと結びつくと、どうしても死刑判決の衝撃と長期に渡る塔拘束の苦境を思いうかべさせる。これらのtime, hours, Ageも濃淡の差はあれそれぞれにあの女王を指しているのではないか。その上でtime's injurious hand（2行）を改めて眺めると、死刑執行書に不当にも—それもまさに「なんという邪悪な速さで」—署名した女王の手が見えてきそうでなのある。なお最初は未来の懸念だったのが、ここでも三行目以降、奇妙にも現在完了、現在進行、過去になっているのは、エセックス処刑の露骨な表現（例えば“With time's injurious hand crushed”）を見咎められるのを配慮した時間的暈しなのかもかもしれない。だから平気というわけでもないだろうが、下って10行目の「当惑させる老齢の残酷な刃（confounding Age's cruel knife）」は、その余韻を引きつつ青春の衰退を歎く表向きの文脈の下から、かなり露骨に叛逆者の断頭刑を浮かび上がらせている。次行の、「この〈年〉（ないし老齢）が、たとえ我が愛する者の生命を断とうとも、その美を世の記憶から断ち切る（cut）ようなことはさせない」

（10～12行）も、なぜならその美は「この黒い〔インクの〕詩行」にその盛りを享受し続けるだろうから、と表面の主題パターンに収まって終るのだが、ことさらに険のある言葉遣いで血みどろの処刑の場面を背後にちらつかせている。「たとえ…生命を断とうとも」とわざわざ言ったのは、まさに実際に断たれた前例があったことを踏まえ、しかし他方友人の生命の方はもはや不安が解消した時期の言であることを思わせる。遡って6～7行の「そして彼が今はその〈王〉となったこれらの美は姿を消しつつある、あるいは姿を消してしまった」とは30番（「多くの消え去った（人たちの）姿」）、31番（姿が見えないと思ったら、君の中に隠れていた我が愛する死者たち）の死んだ大切な友人の追悼の流れをひいて、「姿を消しつつある」美とは確かに塔で空しく朽ち果てるパトロンであるが、「姿を消した（…）これらの美」とはこの死んだ友人たちのことではあるまいか。「今は我が愛する人がこれらの美の〈王〉になる」のも、今は彼しか生きていないからだろうし、この〈王〉とは、31番で君は友人たちの埋葬された愛の生きる、そして彼らの戦利品で飾られた「墓」であり、彼らへの愛は全て君一人のものになったというのと照応するだろうが、エセックスの野心を仄めかしてもいそうだ。この裏の文脈を辿ってくると、13行のblack linesも不吉な影を滲ませて、インクが黒いから音節揃えに添えたまでとは思えなくなる。追悼と共に、死の恐怖を潜り抜けたものの若さを失いつつある青年の暗鬱な想いに同調してくる。この黒は、女とも見まごう美しさを誇ったサザンプトンが、二年余の獄中生活で（このソネットを一六〇三年三月二四日～四月一〇日とすれば）、その面影はどこへやらすっかり色褪せてしまったことにもつながりうる。おそらくこの頃の作と思われる彼の肖像画を見ると、苦渋覆いがたい中年男が疑りぶかい眼をわれわれに向けている。時の手に押し潰され、（青春の）血を呑まれ、額に皺を刻み、老齢の夜へと急激に落下した…と歌うとおりなのである。作者はこの絵を見たのか、伝聞なのか、いずれにしても父を早く失ったとはいえ気随気儘な貴公子だけに、二年余の獄中暮しは人が変わるほどの

経験だったに違いない。もう一つ、なぜ「当惑させる confounding」なのかにも、『フェニックス』で confounded があっただけに拘泥わりたくなる。後者では reason ならぬ treason（叛逆の企て）が機先を制したセシルの策に嵌まって「狼狽した」ことを指すと解したが、今度はその立場を変えての能動表現ではあるまいか。とすればこうして老女王がエセックス派を手も足も出ない窮地に追い込んで、「残酷な刃」で首を刎ねた次第に触れていたことになる。

19, 63, 64, 65 番はエセックス派への女王の仕打ちを、滅多なことは言えない分、くり返し様々な暗示で難詰し陰口をたたいて、パトロンとの精神的紐帯を結びなおすことに狙いがあったと思われる。『フェニックス』との類似を見出そうとして取り上げたのだが、しかし時期的にはそれより一～二年遅れるのかもしれない。この四篇は動機において連作をなすが、もう少し後の 66 番にも同じ音色が聞こえる。このソネットはかなり直截に宮廷権力者を批判した点で重要なのだが、他方庇護者としては当然なパトロンの特別扱いがより曖昧でなく現れている点でも興味深い。冒頭の「こんなことはうんざりだから、心安らぐ死よ来たれ」は、相手がもはや死の恐怖に患わされなくなり、しかしそれは表に出さずに一捻りして、自分のこととして、たとえ生きていても何というおぞましい闇の世か、と憤って「心安らぐ死」が来るのを願うという体裁だが、それはよしなきことがまかり通る社会への鬱憤を―パトロンに成り代わって―ぶちまけつつ、同時に死を免れたことを反語的に祝ってもいるようだ。以下「こんなこと」、つまり世の中の堕落や悪弊を十件列挙して、「生まれつきの乞食が称賛を受け、貧しい〈無価値〉が綺羅びやかに身を飾り、一点の曇りなき信義が意地悪く偽証され、金メッキの栄誉が恥知らずにも不適切な位を与えられ、処女の貞淑が無作法にも淫売呼ばわりされ、この上ない完璧さが不当にも不興を蒙むり、力が足萎えの統治（limping sway）に動きを阻まれ、学芸が権力に口を封じられ、〈愚かさ〉が〈学者〉面して賢さを抑えつけ、ありのま

まの〈真実〉が〈ばか〉とこきおろされ、囚われの善（captive good）が邪悪な〈主人〉に仕えるのを見るなんて」（2～12行）と不平を述べた後、「ああこんなことはうんざりだ、こんなことにはおさらばしたい、唯君を一人残すのを別にすればだが」と終る。「学芸が権力に口を封じられ」（9行）はすでに言及したが、これが当時の検閲への批判であることは言うまでもないだろう。だが、とすれば女王や枢密院を風刺したかなり大胆な発言であり、場合によっては―つまり人によっては―叛逆罪に問われかねない。なお沈黙を強いる検閲とは、ますます中央集権化の進む中で体制保安上、とくにカトリック絡みの宗教＝政治的反政府キャンペーンに関して次第に必要性が高くなったカンタベリー大司教を責任者とする公的機関の整備・拡充が、饗宴局による上演台本にまで及んだことが背景にあるだろう。もっとも一五九〇年代における饗宴局長E・ティルニの検閲はそう厳しいものではなく、お陰でロンドン市当局から再三枢密院に苦情が持ち込まれたという。記録に残るのは一五九七年の『犬の島』が煽動的という廉で関係者が逮捕、投獄されたぐらいである。[三六] しかし一五九八年の放浪者規制の法令は、その煽動性を危惧した枢密院の警戒感が芝居の周辺に向けられたことを告げる。それに台本の刊行は主として書籍組合が担当するが、後から咎めを受けて出版の投資を棒に振るのは何としても避けたい出版人としては几帳面に対応していただろう。当然作者も表現や題材には細心の注意を払い、いわゆる自主規制も進んだに違いない。『リチャード二世』の刊行（一五九七）において王の降位と殺害を、『ヘンリー五世』の出版（一六〇〇）でアイルランド平定に向かうエセックスの雄姿を、それぞれ削除したのは後からの外的点検であるが、『フェニックス』を愛と信義の象徴たる二羽の鳥の、一見毒にも薬にもならない挽歌として仕立てた時、検閲は言説の規範として内面化されて言葉の選択や組み合わせといった美的作業の根元を侵蝕し、制作の一環をなしていたとさえ言えよう。これまでのソネットにおいても言明と緘黙とのせめぎ合いを縫って、戦略的ともいうべき曖昧な言説が生じるのを何度も目の辺りにしてきた。だ

がその事態をこうも開けひろげに語ってよいのだろうか。1〜17番の「時」の破壊力をもう一度取り上げただけとも言える63〜5番の後に、こういう批判がその延長とも見える厭世観の主張としてさりげなく置かれている配置は、それらを隠れ蓑にする狙いが感じられる。この周到さは、前述のように『ソネット集』全体に行き渡りその構成や用語を秘かに制御しているとわれわれには思われる。いずれにせよここで慨嘆される不正の箇条書きは、その一般論的な装いの下にそれぞれ特定の人物や出来事を指しているのではないかと疑うべきである。そしてその裏の話題とは作者の立場からも時期的にも、あの悲劇的出来事を措いて他にはない。そう見なすと幾つか心当たりが出てくる。たとえばサザンプトンに向かって「この上ない完璧さが不当にも不興を蒙り（disgraced）」（7行）と憤れば、『フェニックス』で灰となった「美、信義、稀有、優雅（＝恩寵）」として表現され、そしてソネットでは姿を消した「大切な友人たち」として哀悼されたエセックスとその仲間の、まさに急坂を下るような恩寵からの転落を思い出さないわけにはいかない。「不当に」というのはいわゆる党派的な贔屓目のたぐいである。エセックスの謀反判決に異論を立てる者はいそうにないのだが、その取巻きにとって裁判は政敵セシルの仕組んだ謀略であり、またそれを支持して死刑執行書に署名した女王の果断な措置は、愛人への残忍な裏切りとして大きな衝撃を与えていただろう。あるいはそれが旧エセックス派の人たちのいわば公式の見解だった。『フェニックス』や一部のソネット、そして先回りしていえば『ハムレット』の罵詈雑言はそう思わせるものがある（但しこの党派的硬直性から、シェイクスピアは一六〇八年頃には抜け出す）。すると列挙の最後、「囚われの善が邪悪な〈主人〉に仕える」（12行）とは、他ならぬサザンプトンのことを言っているのではないか。この死刑囚は助命嘆願において敵の首魁R・セシルの発言力に大いに助けられたのだから、それによってその傘下に入ったかたちである。しかしまずその前に、彼を塔に閉じ込めている女王こそ「邪悪な主人」なのかもしれない。その前行の「偽りなき信義が〈ばか〉とこきお

ろされ」（12行）も、直情径行ぎみのパトロンにその裏面をなす真価が認められていない、それだから善なのに囚われて悪の言いなりになっているとつながってくる。するとその前の「〈愚かさ〉が〈学者〉面して賢さを抑え」（10行）も、宮廷におけるエセックスとR・セシルの勢力争いが―一五九九年一〇月には―後者の勝利に帰したことを踏まえているだろう。セシルは蒲柳の性で大学には行かなかったが、優秀な家庭教師に学び、教育に当たった母はケンブリッジ大学の著名な古典語学者の娘で当時最高の教養の持ち主だった。父バーリーもケンブリッジ在学中に早くも第一線の古典語学者とみなされ、後にも多忙な政務の合間に諸外国語の著作を繙くのを楽しみにした。なお彼はエリザベスを除くと当時最も多くの献呈を受けた大パトロンであるが、それは彼の教養の深さの現れでもあろう。息子のロバートは両親程ではなかったかもしれないが、古典語、諸外国語、自由七学芸をたしなみ、晩年は当時盛んだった新光学を研究していた。ただそんな博学ぶりも、敵側から見れば似非学者扱いされるのだろう。『フェニックス』でも「先触れ」、「神官」の皮を剥いでセシルの顔を見出そうとしたのだが、このソネットでは背後の彼の存在はより濃厚である。その点で注目すべきは、「この上ない完璧さが不当にも不興を蒙り」に続く8行の、「力strengthが足萎えの統治に動きを封じられ」と言う表現である。虚弱なR・セシルは足に障害があった。足が斜めに歪んでいたか、もしくはがに股だった。[三七]普通なら人の身体的欠陥をつくのは紳士の嗜みにもとる行為であるが、その悪だくみに嵌まってひどい目にあった憎んでも余りある相手なのであれば、しかもそれが尋常では勝ち目のない飛ぶ鳥を落とす権勢者であれば、せめて一矢を報いるべく格好の嘲笑材料として突けこむのを躊躇しないだろう。つまり8行は、エリザベスの不興を買って蜂起したエセックスが、政敵セシルの手の内に乗った格好で動きを封じられ、有罪判決、刑死という羽目になった次第を仄めかしていたのではあるまいか。strengthには身体の頑健さの他に戦闘力の意味もあるから、二一歳の時、オランダでの対スペイン戦で向う見ずな勇猛振りを発揮して、

翌年には早くも最高の栄誉であるガーター勲章を授爵したエセックスに当て嵌まるが、セシルは一度も戦闘に参加したことはない。おそらく詩人が死ぬほど嫌だと悲憤慷慨する世の悪弊とは、彼の立場から言って多かれ少なかれこの敵対者への当てこすりではないかと頭から疑っても見当違いではないだろう。「生まれつきの乞食（begger = 嘆願者）がお褒めに預かり」（2行）は、宮廷の高いポストをめぐるエセックスとセシルの熾烈な争いが殆ど常に後者の勝利に帰したことを踏まえ、遠く王族の血も引く大貴族に対して、市民出ながら宮廷官僚として女王に重用された後者をbeggerで揶揄したのではないか。これは党派的言辞においては大いにありえる。おそらく「貧しい〈無価値〉が綺羅びやかに身を飾り、（…）金メッキの栄誉が恥知らずにもお門違いの人間に授けられ」（3行、5行）もその類いの、貴族でもないのに宮殿で大きな顔をしている廷臣への―やっかみ半分の―当てこすりである。

「足萎えの統治者」がセシルを諷しているなら、またしても『フェニックス』に戻らねばならない。その四篇の付録詩は、その前に分不相応な三篇程の「祈願詩」、献呈詩、序文詩（?）が付くのだが、最後の序文詩が匿名なのに対して初めの二篇の作者名はVatum Chorusである。これは「がに股（ないしそり足）合唱団」とでもいう内容だが、他愛のない道化面の下に実はここでも主人を酷い目に遭わせた人間への悪意が込められていたのかもしれない。「足萎え」は他のソネットでもあげつらわれる。89番では、「私を足萎え（lameness）だと言いたまえ、その通りびっこを引いてやろうじゃないか、君の言うことに逆らわず」（3~4行）、37番では「私は〈運命の女神〉の手厳しい憎しみで足萎え（lame）にされたが（…）」、徳に秀でた君とつながっていれば「私は足萎え（lame）でも、貧乏でもなく、蔑まれもしない」（13行）とこの障害に絡んでくる。[三八] 89番は少なくとも（理由に立ち入る余裕はないが）エセックス蜂起以前と思われるし、また詩人自身のこととして語るのだが、だからといってこれがセシル当て擦りのアリバイになるとは言えない。セシルが父バーリーの後を襲って宰相（Principal Secretary of

State）になった一五九六年には両派の対決姿勢は明らかになっていたから、サザンプトンはこんな憎まれ口を面白がっただろう。37番の〈運命の女神〉による足萎え云々は、やはりセシルを当てつけつつ青年の境涯を自分のこととして語ったのかもしれない。とすれば蜂起以降であるが、それは判断を控えておきたい。唯国王の信用が厚く位人身を極めても民衆には常に不人気だったセシルの身体障害は当時誰もが知ることであろうし、それに貧乏や蔑みと足の障害を並列するのもやや不自然であるから、この「足萎え」にはやはり敗北した側の毒気がこもっていそうである。(三六)

60番は、これも時の破壊力を取り上げた1～17番の流れを汲むと見えるが、そういう当たり障りのない「時」ではない。他方、君の美はその餌食になろうともわが詩の中で生きながらえるというパターン化した趣旨と、そこに射す兇々しい影は63, 65番を思わせ、明らかに同じ系列に属す。「時は青春の盛りにある者を刺し貫き、美の額に皺を刻む」（9～10行）は、この「時」も「その残酷な手」（60番14行）に63番のconfounding age's cruel knifeを持つことを示す。ではこれも謀反で逮捕され処刑されたエセックスを語っていることになる。細かく言えば、「刺し貫」かれる青年は死んだエセックス、「美の額に皺を刻」まれるのは獄中に鬱々と燻ぶって中年を迎えんとしているサザンプトンであろう。その観点から改めて読み直すと、最初の四行の、「波が小石を敷いた浜に向かうように、われわれは刻一刻とその終着点へと急ぐ、それぞれが前のものに取って代わり、絶えざる労苦の内に前に向かって争い競う」は、まずは鎬を削る宮廷の勢力争いのことではないかと見当を付けたくなるが、ここでそこまで言うことは許されていない。しかし五行以下になるとその一方の雄の相貌が見えてくる。「一度、光の大海原に生まれ出た者（nativity）は、成熟へと這いにじり、そのお陰で栄光の座についた（crowned）ものの、捻じ曲がったeclipses（蝕）が彼の栄光に戦いを仕掛け、時は一度与えたその贈り物を、今や狼狽させる〔＝〔希望を〕打ち

砕くconfound」（5〜8行）。この謎めいた物言いはいろいろ仔細があるように思えるが、それはいわばエセックスの後半生の縮図である。大海原で生れ出た者、とはエセックスを指しうる。彼は二一歳でのオランダにおけるスペイン戦を手始めに、ノルマンディ、カディス、アゾレス、アイルランドと、海戦もしくは海を越えて戦った。戦局上大きな手柄は立てなかったようだが、その目覚しい武勲を認められて女王の寵愛を得たという見立ては党派内なら説得力がある。するとnativityとは海を舞台に活躍した英傑の士が女王の眼にとまり宮廷で勢力をなした（つまり「成熟に這いすすんだ」）事情に触れたわけだが、となるとそこにはnavy（艦隊）がいわゆる「絨緞の模様」として隠されているのかもしれない。その方が「大海原」との取り合わせはいいし、世の生存闘争を語るのに一行目から波や砂利の浜を比喩として持ち出したのもそこに焦点を合わせていたなら首肯ける。つまりこの5〜6行は、エセックスが海に関わる戦いの功によって宮廷に位置を占め、やがてその実力者の一人になったことを述べていたことになる。「そのお陰でcrowned〔栄光の座についた〕」とは、従ってこうして寵臣がのぼせ上がって王位crownに野心を抱いたこともことの序でに触れていよう。というのも次の二行はそんな図に乗った廷臣を女王が懲らしめた次第を語っているようなのだ。eclipse（蝕）は冒頭に挙げた107番を持ち出すまでもなく、月女神シンシアの、それもここでは老齢でそろそろ姿を隠すという意味を込めた隣接表現であろう。なお107番では彼女の死を「蝕をついに受け入れた」と述べていたが、ここでは先の見えた瀕死状態への当てつけだろう。となると“crooked (eclipses)”にもわけがありそうだ。それはエセックスが一五九九年のアイルランド遠征中に吐いた女王評を思い出させる。この反乱鎮圧将軍は、日々莫大な戦費を費やしながら捗々しい働きを見せず、しかもどうやらその謀反の気配を嗅ぎ取っていた女王は報告を受けるごとに怒り狂っていた。それを宥めようと、エセックスは悔恨や忠誠の手紙を得意の詩的文体で次々に書き送ったが、それは上辺だけのことで、ある日一向に怒りを鎮めない女王につい

て、「今や婆さんになって、頭の方も死骸に劣らず捻じ曲がっている（crooked）」と側近に雑言を吐いたという。[四]
従って7行の「捻じ曲った蝕が彼の栄光に戦いを仕掛け」は、女王が年来の野心からついに決起した寵臣を武力で制圧した二月八日の示唆である。では8行の「時は、一旦与えた贈り物を、今や狼狽させた」とは、ガーター勲章、枢密院入り、スイート・ワインなど様々な名誉や実益で寵臣の愛にこたえた女王が、一六〇〇年七月の裁判でそれらの特権を全て爵位と共に剥奪して「狼狽させた」ことを指していよう。つまりこの「時」も女王なのであるが、巨額の借金（一万ポンドといわれる）を抱えた廷臣はとりわけスイート・ワインの更新拒絶には困惑しただろう。それになにより女王の愛想尽かしを認めざるをえなかったはずである。その後に彼の処刑（「時は青春の盛りにある者を刺し貫く」9行）が続くのだが、しかしそこまでは主題に入る踏み台に過ぎない。献呈の相手はエセックスではないのである。そのことを考えれば、凄惨な斬刑よりその悲劇の余波でなお獄中にある友人の身を案じる方がより重要な問題となる。つまり「時が（…）美の額に皺を刻む」（10行）ことへの心配こそが、ここでも一篇の動機として中心をなすのだ。もっとも皺をparallelsで現したのは、相手がエセックスの運命を辿ることへの懸念を込めているのかもしれない。「〔時は〕自然の生んだ類いまれなる誠実さを貪り喰らう、そして彼〔時〕の大鎌に刈り取られないものは一つもない」（11～2行）はその敷衍であるが、しかしともかくも命拾いをした貴族が余命の見えている老女王の下で二年ほどの歳月を棒に振ったと言うにしては大げさである。大鎌とか貪り食うとか剣呑な物言いをしたのは、詩的弊習と言うべきなのか。おそらくそれを逆手にとって、上でちらつかせたエセックスの影（5～9行）や特に凶器のイメージを、無害な青春のぼやき一般へとずらして紛らせる計算があったのではあるまいか。その上で、「来るべき世々まで、君の美点を称える我が詩は残り続けよう、彼〔時〕の残酷な手にも拘らず。」（13～4行）と締め括られると、この「時」から一瞬浮かびかけたあの人物の影が薄くなっていく。

シェイクスピアは塔のサザンプトンに面会したことがあるのだろうか。それを示唆するものは『ソネット集』には見当たらない。しかし逆にmy loveと会えないことを嘆いたと解しうるソネットにはこと欠かない。塔の囚人がたとえ丁重に扱われ多少の自由を享受できたとしても、彼の場合は屋上の散歩はともかく外出の自由はなかったようだし、またその面会は特定の関係者に限られたのかもしれない。あるいは逆にシェイクスピアの側に訪問できない事情があったとも考えられる。たしかに一六〇一年二月七日の『リチャード二世』上演の入れこみようからいって、謀反人たちへの追悼や励まし、敵への嘲罵が彼の口から出てくるのは当然だとしても、しかし国に弓を引いた元サザンプトン伯（この身分は剥奪）に会いに行くのは、劇団のパトロン格の女王や実際のパトロン宮内大臣ハンズドンの手前憚りがあったのではないか。いずれにしてもソネット詩人は、最低でも二年二ヶ月間（一六〇一年二月八日以来として）、107番で示唆されるリスリの釈放までおそらく彼と会うことは多分なかった。だからその代わり、塔の内と外に隔てられて友に会えない辛さ悲しさを繰返しソネットに托して陳べたのではないか。それらはほぼ三つか四つの趣向に分けられる。それは肖像画に関する眼と心の争い、二人を隔てる遠い距離、金庫に蔵う宝もの、待つ身の辛さ、そして献呈自体などであるが、それらは必ずしも厳密な区別は困難である。まず献呈という主題であるが、23番はそのこと自体を語っている。とはいえこれも奥歯にものはさまった、判然としない印象しか与えない。前半八行は大雑把には、私の（君への）愛が強すぎてそれをうまく口に出して言うことができないという趣旨で、だからその代わりに「私の詩（my books）に、私の想い溢れる胸のうちを雄弁に語る無言の先触れの役をさせよう」（9～10行）と述べる。口下手だから会わずに詩を贈ると説明したことになる。my booksをmy looksの誤植とする意見もあるが[四]、たしかに愛が烈しく、またそれをうまく言う自信もないので、「愛の儀式（ないし真実right）の作法に叶ったことを完全に言うことを忘れてしまう（forget to say）」（5～6行）と言ったば

かりなのだから、口下手の詩人としては溢れる想いを言葉ではなく「外見」で判断して貰いたいと続くのはそれなりに理に適う。しかしそれは早呑みこみで、よく見ると同じ言葉でも別のことが問題になっている。say とは第一義的には口を使うことだろう。つまりここには口頭表現と書き言葉（それも高雅な詩）の相違への着目があることに気づかねばならない。my books について、「それは（…）より多くのことをよりたっぷりと表現する舌（tongue）よりも、もっと愛のために弁じ、より高いものを追求する」〔11～12行〕のだと、舌と比較して詩の効力をより高く評価している。これは文学者として饒舌な話し言葉に非を鳴らしたということではない。それは言うに足らないことで、はるかに重要な二つのことを示唆しているのだ。もう一度見直すと、冒頭の「駆け出しの役者が舞台に出ると物怖じして（with his fear）自分の科白を忘れるように、あるいは激情の余りその勢いを外に迸らせて、胸中の想いを弱めてしまう粗野な手合いのように、私も自信がないので完全な作法どおりに愛の誠を陳べるのを忘れる」（1～6行）とは、要するにお目に掛かっても口ではうまく気持ちが伝えられないということである。そこで my books つまりは私の詩の方がずっと雄弁だという主張を持ち出すのだが、なぜそんなことをわざわざ言い出すのかと考えると、塔の友人に会いに行けないよくよくの事情が詩人の側にあったからではあるまいか。言ってみればこれはその言訳である。本当なら悲嘆にくれる友を訪ねて、信義と愛情を直接伝える方が、たとえ舌足らずでも書簡詩よりはるかに慰めになろう。それが許されぬ事情とは、この6行を見るとやはり相手が叛逆の罪人だからだと推察したくなる。fear が二回、舞台に立った役者と、友に会って愛の誠を伝える詩人に使われているが、そこに fierce（激しい）、rage（憤怒）、strength's abundance（溢れる力）という言葉が絡むと、不器用な役者や口下手という内容とは無縁な物々しい緊張感が走る。囚人に例の謀反に目配せして、事情を汲んで欲しかったのではないか。もう一つは、いわばソネット読解の手ほどきである。前掲の「我が詩をして胸に溢れる想いを語る雄弁にして

物言わぬ使者たらしめよ」の「雄弁にして物言わぬ」とは、何を言うのだろうか。おそらくそれは、塔の囚人を慰め励まそうとすればエセックスの大逆罪を多かれ少なかれ正当化するという禁忌を冒さざるをえないが、かといってそれを馬鹿正直に言うわけにはいかないから、従ってここにははっきり言えないことが多々隠されている、つまり言わずして語る塔献呈ソネットの真意を見抜けという読みの心得を伝授していたのではないか。締め括りの二行はその辺りをもう一度言い含めた観がある。「沈黙の愛が書いたものを読み取るすべを学びたまえ、愛の優れた知恵に属するものを眼で聴きとるすべを学びたまえ」（13～4行）[図1]。塔において手紙の検閲があったのかどうか不明だが、女王最晩年の王位継承に揺れている不安な時期、しかも慎重なセシルの下で叛逆者に情報収集が行なわれなかったとは考えにくいから、詩人もきわめて慎重だったに違いない。おそらく献呈は偽名か無署名で行なわれ、サザンプトン夫人か信用できる取巻きの紳士に託されたのかも知れないが、それでも当局に筒抜けになる惧れはあっただろう。従ってこの用心深さを、庇護者の誠意の欠如と見なしてはならない。

26番は、「君にこの書かれた使節（written embassage）を送ります」（3行目）と献呈自体を語り、23番と同じ趣向と思われる。唯こちらは冒頭二行で献呈の理由を述べる言い方に持って廻った気配がある。「わが愛の君主様、私は君が卓れているので、臣下として君への尊敬〔duty〕の念を強く抱く。その君にこの書かれた使節を送るのだが、それは尊敬の意を表明するためで、私のwit〔知恵、機智〕を示すためではありません」（1～4行）。23番の後だとすればwitはその「愛のすばらしい知恵〔wit〕を眼で聴きとるすべを学びたまえ」（14行）に掛けた地口であるが、それによって23番のwit、さらには全体の真意を溯って掻き乱してもいる。言葉遊びでその真摯な感情を否認している（とすればこれはリスリへの反応というより、検閲の攪乱である）。それに「我が愛の君主様」とは、それまでの親密な仲を考えるとかなりふざけた挨拶で、「臣下として…」も心からの尊敬というより慇懃無

礼な卑下である。すでに少なくとも塔以前に三〇位のソネットは献呈しているのだから、その理由を改めて説明する必要はないはずである。思うに、塔のパトロンは、例えば23番に対して不機嫌な反応をみせたのだ。それで『ルクレティア』の献辞やタルクイニウス（彼こそ戯画化された「わが愛の君主」である）を思わせる表現を使って、それは相手の思い上がりだと切り返した上で、本題に入ったのだろう。本題とは言うまでもなく、23番の「沈黙の愛が書いたものを読みとるすべを学びたまえ…」（13行）である。その最後の語「すばらしい知恵（wit）」に掛けて、偉そうにそうは言ったがしかし実は才（wit）浅くして、「君への尊敬」と「君に負う巨大な義務」（duty so great）を「語る言葉が出てこない（in wanting words to show it）（4行）」と謙虚に出たのである。この言い方は、23番の「物言わぬ先触れ」にも通じるが、唯こちらでは趣向を逆にして「物言わぬ」や「沈黙の」を、才智の言葉という衣服を着ない「裸の（bare）」へと取り直したようだ。しかしbareには飾らないという意味もあるのだから、この献呈詩をまる裸のまま「君の心の奥底にしまってくれればと期待している」（7～8行）と言う時、はっきり言えることではないので我が真意を理解してほしいという23番と同じ呼びかけが聴き取れそうだ。その点でここで四度もshow（表に出す）が、理由は異なるもののいずれも否定的に使われていることは興味ぶかい。細部の文脈を離れて、ソネットには表立っては言えないことが込められているという注意の喚起ではないのか。なお見せられないと言われるのは、機智（4行）、君への敬意（6行）、君の尊敬に値する我が姿（12行）、自分の顔（14行）と散らばるが、おそらくさらに前二者には23番の尾をひいて、たとえ無理して会っても不調法でろくに口も聞けません、つまり会わないほうがいいのですという弁解が響いていそうだ。後二者はそれとは別の慰撫のニュアンスを帯びている。収監によって会えないのもそう長くは続かない、と聴けそうなのだ。「我が姿」の場合、「私の人生を導く星が（…）私に慈悲深くも光を当てて、ぼろを着た私の愛に立派な衣装を着せて、君の尊敬に値する」（11行）

ようになるまで、人前に出られないわけだが、しかしそれは逆にいえば、君が立派な服を着せてくれる「まで」（8行）のことでしかないという暗示にもなる。「それまでは」（14行）、君に試されるような場所に顔を出さないというのは、相手が塔から釈放されて以前通りのご引き立てに預かれる時「まで」と、その時期を問題にすることによって、ボロ着の情けない姿でおいて下されるなとさもしい頼みごとをするかたちで相手の一刻も早い出獄の祈願になっているし、それで明るい見通しを点じていたのだろう。もっとも最後の二行には、詩人の微妙な立場も覗いているのかもしれない。君がはれて自由の身になれば「いかに私が君を愛しているか自慢するのに憚りはない」（13行）とは、今はそれを思い切って言えない状況にあったことになる。23番の「物言わぬ」、「沈黙の」には世渡り上の配慮があったことを思い返すべきところである。この憚りは当然の配慮であるが、不幸のどん底にある貴公子には気に入らなかったかもしれない。14行目の「私が君に試されるような場所」とはどこなのか？　三度用いられるshowにはまた見せ物、例えば芝居上演の意味もあることに思い当たる。といっても芝居をしないわけにはいかない。唯、ある場所においてだけはそれをやるな、という相手の気持ちを察した上で、そんな場所には顔を出しませんと約束したのではないか。その場所とはエリザベスの宮廷である。まさか女王の前で、反逆者を「いかに愛しているか自慢する」わけには行かない。第一そこにしゃしゃり出ること自体がサザンプトンにはきわめて面白くないはずで、まさに日ごろ公言する忠誠心とやらを「君に試される場所」とはそこなのである。だが宮内大臣一座の役者にそんな約束が守れるのだろうか。おそらく実際には約束はその後何度も破られたに違いなく、後に二人の仲がしっくり行かなくなる原因はそこにあるのかもしれない。塔からの釈放後と思われる110番はその違約を詫びていると見なせる。「確かに私はあちこちに出掛け、まだら模様の道化服でわが身を人前にさらし、私の心を傷つけ、最も大切なものを安く売った、古い愛を新しい情愛で辱めた」〔1～4行〕。「あちこち」（here and there）とは、そ

の一般性の下に「君が私〔の信義〕を試せるような場所」つまり宮廷を指した遠回しの表現であろう。言葉通り唯あちこちで役者稼業に精を出したというだけであれば、弁解する必要などないはずである。行くべきでない場所で上演した、しかもそこで多分ご引立てに預かったことが背景にありそうである。「あちこち」はまた、それが一度や二度ではないことも示唆しうる。「きわめて大切なものを安く売った」とは君への愛にも拘わらずあの人のご贔屓を断れなかったことを指すことになる。君の友情に背くのは私にも辛いことだ、しかし私はしがない役者なのだから（「道化服」が自分で自分の身が自由にならない芝居渡世の辛さを戯画的に訴えている）、浮世の義理でそれはどうにもならないこと、どうか大目に見て頂きたい。それがこの四行の趣旨である。「新しい情愛」とは君以外のご贔屓筋一般ではなく、もっぱら宮廷上演のことと推測する。詩には詩の物の言い方がある。しかしさらに本音に入って、「私が真実（truth）を横目で知らん振りで見たのも、紛れもない真実」と言い切ってから（truth はここでもまず愛する友の異名である）、しかしこうして真実から逸れたお陰で、「私の心に第二の青春が訪れた、つまらぬ方に浮気心を向けたせいで君こそわが最高の愛（愛する人）であることが確かめられた（proved）」（7～8行）と新たな忠誠を誓って機嫌を取り繕い、新しい愛で古い友を試す（proof）ような真似は二度としないから、「愛の神よ、君の汚れない、いともいとも愛情深い（loving）胸に、どうか私を受け入れてほしい」（13～4行）と仲直りを願いでる。prove, loving と、26番と同じ言葉を使うのは偶然ではないだろう。塔に「書かれた使節」を――一年以上は――送りつづけた詩人の実績、つまり信義に注意を促しているのだ。しかし今度の愛の誓いも空手形になるのではないか。どうやらそうではない。なぜなら「今や全てが終った」（9行）からである。これは要するに女王は死んだ、だから板挟みは終わった、ということに思われる。「愛の神」（つまり君）に「私にはそれ（君）しかいないのだ」という関係詞節がつくが、この to whom I am confined（12行）は「私は監禁されていた」と友の身の上

をそれとなく語ったとも解せる。同時期と思われる107番でもconfinedはそれを匂わせていた。だから「全ては終わった」は、107番の「瀕死の月が蝕を受け入れた」に対応しよう。そうであれば固い口も少し解ける。110番の「道化」や「こよなく大切なもの〔＝君の愛〕を安く売った」がそうであるが、111番になるとさらに、「さあ、私のために運命の女神を叱ってくれ、私が酷いことをした罪はあの女神にある」（1～2行）と責任を転嫁しはじめる。fortuneとは誰のことなのかが、周囲のソネットを文脈としてかなり際立ってくる。しかしこの女神には誰も逆らえないのだから、「あれは人前での行儀作法で煩わしい思いをさせ、人並みの食いぶちを当てがってくれただけ云々」（3～4行）と弁明しても一理はある。唯、宮廷上演ならいろいろと肩のこる気遣いを要したとしても、その見返りも多いだけに筋をはずした苦しい言い訳に汗顔の体ではある。第三者から見れば、シェイクスピアは仕事を忠実に果たしただけであるが、パトロンが悲運を嘗めたせいで有難い女王の思し召しが仇となった。この女神の跳梁を心から憎んだ人物の眼には、その庇護者が自分に友愛の信義をいくら説いても素直に耳に入らなかっただろう。しかも昔助けてやったその男の盛名はどうやらますます上がって、娑婆でゆうゆうとそれなりの栄誉を享受しているのだ。

これらの110, 111番の背後にはサザンプトンの憮然たる面持ちが控えていると想像してよいだろう。塔の釈放前後と思われるソネット（100～125番）で、昔からの私の愛は今になって更に強まった（102, 108, 109, 115, 119番）、君を不滅にする詩をもっと書かなかったことの後悔（100, 101, 103番）、改めての君の賞賛（105, 106番）、昔に変わらぬ美しさ（104, 105, 107, 108番）、だがそれは私の見間違えではないのか―だって君はもう三〇歳なのだから―という態とらしい疑い（104, 113, 114番）、君への忠誠心に揺るぎなし（105, 110, 116, おそらくは123, 124, 125番）、君から他のパトロン（つまりシンシア）に乗りかえたことへの詫び、弁明、抗弁、時に居直り（110, 111の

他に、112, 少々113, 117, 118, 119, 120, 121番）などなど、いずれも機嫌を損ねた相手をくり返し宥めすかしているように思える（上掲の分類は一応の目安を立てたまでで、内容は相互に絡まり錯節している）。ここでそれらを逐一検討するのは適切ではないが、女王の死ないし釈放後と思われるものの内、幾つかに一瞥を投じておきたい。塔へのソネット献呈というわれわれの推測の根拠、つまりは関連する他の作品の創作時期の手掛かりとしてである。113番は二年余りの拘束による別離の寂しさを訴えるものと思える。これを巡業の旅とか多忙な仕事によるしばしの別れの挨拶とする見方もあるが、だが野暮用が済めばいつでも会えるというにしては、以下に見るように思い入れが強すぎ、時には緊迫した気配さえ帯びている。つまり冒頭の「私が君のもとを去ってから」とは、他のソネット（43～52、57～8、97～9番など）と照合すれば、自分の出発ではなく相手が塔に連れて行かれたことの迂回的な隠蔽表現とみなすべきである。この別離による思慕の情はすでにそれらのソネットで、文字通り君恋しさの余り寝ては夢起きてはうつつ幻の…といった表現で語られていた。ここでも、君と別れてから「我が目は心の中に引きこもり」、お陰で何を見ても君の姿に見えてしまうという調子だが、これは詩だから許される空疎な誇張とは違うように思われる。その点で「何を見ても」の列挙に『フェニックス』を思わせる例があるのにまず注目しておきたい。私の眼は、君のことで胸が一杯で、「どんな粗野な眺めも、どんな優雅な眺めも、こよなく美しく愛すべき人でも、きわめて醜悪な人でも、山、海、昼、夜でも」(9～11行）と一見無作為にあれこれの嘱目例を挙げた後、「カラスでも、あるいは鳩（dove）でも、眼はそれを君の姿に変えてしまうのだ」(12行）と続く。一六〇一年の付録詩で罵倒されていたカラスと美と誠実の鑑と讃えられた鳩（turtle-dove）をこだわりなく並列したと見えるのだが、両者はまさしく対極にあるからこそ選ばれたのではないか。つまりこんなに違うものさえ区別のつかない役立たずな自分の眼を扱き下ろすことで、君に会えないでおろおろ嘆く詩人の一途な愛情を浮き彫りにする狙いだろう。だ

がそれは表向きの主題である。この二種の鳥が他意なく選ばれたとは思えない。しかも上で「こよなく美しく愛すべき人（The most sweet-favoured）」と「きわめて醜悪な人（deformed'st creature）」（10行）が問題になったところに曰くつきの二羽が登場すると、実はそれぞれ雉鳩に譬えられた青年と、「三倍長生きするカラス」と謗られた女性を―交差的に―指しているのではないかと疑りたくなる。役立たずの自分の眼を責める体で、人知れず友を称賛し老女に悪罵を放っていたことになる。もっともそこには御前上演でエリザベスに拝謁している照れ隠しが混じっているのかもしれない。いずれにしても、サザンプトンはやはりR・チェスターの詩集をすでに塔で読んでいたのではないか。でなければこの細部の半ば暗号的に仕組まれた意味を読み解くことはできないからである。片言隻語で真意が通じることにパトロン文学の醍醐味がある以上、詩人としてもその特権的な満足を被献呈者が味わえるように作品を書こうと工夫したはずである。そうであれば113番は、いくら早くてもチェスターの詩集出版以降、近い将来の塔釈放が予測された時期までの間に作られたことになる。

しかし二年余りの別離をより感じさせるのは、例えば104番や108番である。前者で、「美しい友よ、私にとって君は決して老いることがない」というのは、私以外の者の眼には老いたとしても、という語られない現実を暗黙の前提にしている。一言でいえば、長い別離の後さすがの「君」も若さを失ったか失いかけていたのだが、その原因としては塔の拘束が最も有力である。H・リスリの入獄は二七～九歳で、永遠の青年アドニスとして何事もなく遊び暮らしていても中年へと差しかかる時期である。まして前途の閉ざされた元死刑囚として長い暗鬱な日々を送れば、解放の一瞬は安堵と喜びで、そして詩人からの励ましも込めて「若々しく見えた」（107番）としても、辛酸を嘗めた苦悩の痕跡は肉体ばかりか表情や身振りにもいやおうなく刻まれていたに違いない。入獄前の若さを知る詩人は中年男に変貌したmy loveの姿に驚いたはずである。というのも彼は友のあちこちに昔の面影を見出そ

うとし、その溝をこの詩でも埋めようとしているのだが、それはうまくいっていない。「私が君の眼を始めて見た時と同じ美しさを君は保っているようだ」（2～3行）とか、「まだ君は青々としているけれど、最初に君の若々しい姿を見た時…」（108番）などとつい言ってしまい、返って青春の日々との隔たりを浮き上らせている。かといって最初の頃（一五九二年前後）の様子と変わっていないとまで言えば、空疎なお愛想の感は否めない。そこで歳月は時計の針さながらいつの間にか動くので、「君の美しい姿も移ろっている」のに私の眼は惑わされて気づかないのかもしれない（104番12行）、と付け加えるのだが、これだけとってもサザンプトンとの別離が相当長期に及んだことを窺うのに充分である。このソネット104は、この期間にさらに具体的に触れたと思える。君の美しさはなお昔のままだと述べた後、「三度の寒い冬が森から三度の夏の栄華（pride）を振り落とした。三度の美しい春が三度の黄色い秋に変わった〔…〕三度の四月の香りが三度の暑い六月において燃えた」（3～7行）と三年の経過が強調されているが、これは意外に正直に二人の別離が相手の入獄によることを語っているのではないか。この「三度の寒い冬云々」が、リスリが塔で送った歳月とある程度一致することにまず注意しなければならない。それは厳密には二年二ヶ月程であるが、例えば塔のサザンプトンの肖像画には肩の脇に一六〇〇年二月八日から一六〇三年四月（一〇日）と記入され[四]、今風に言えば一六〇一年から一六〇三年まであしかけ三年幽閉されたことになる。それにソネットの「三度の…」は必ずしも満三年間であることを要求していない。囚人は「三度の寒い冬」を塔で過ごしたが、秋と六月となると二回しかそこで経験していない。もっともこの三年は頭から詩的常套句の類いとみなす研究者が多く[四四]、したがってサザンプトンの獄中期間との一致の可能性どころかその推測自体が問題外なのだが、この一部の矛盾に関しては彼らに少々耳を傾けてよいのかもしれない。「三度の冬…」で始めれば「三度の〔…〕秋」とすべて三回で通す方が、但し秋は二回だがと煩瑣に十九世紀的な歴史記述法で正確を期するよりも詩的文体には

適切と思える。相手がそれで了解できるのだから差し支えないわけである。ただし六月に関しては必ずしも詩的音調を優先したわけではなく、月を限定したのは四月と共に具体的な背景を暗示しているのかもしれない。「三度の四月の香りが三度の暑い六月の中で燃えた」（7行）の四月は、確かにリスリは塔で三回過ごしている。なぜ入獄した二月でも、また春にふさわしい三月でもないのか。おそらく一六〇一年四月に死刑一等が減じられ、そして一六〇三年四月にジェームズの命でついに釈放された記念すべき月だったからではないだろうか。では六月も夏の表現としてたまたま用いたのではなく、何らかの事実に触れていたのだろうと疑いたくなる。差し当たり考えられるのは一六〇三年六月にシェイクスピアはサザンプトン伯（身分は今や元に復した）に―塔から出ておそらく初めて―会ったのではないかということである（この推測についてはソネット97, 8のところで別の角度から考えたい）。その解釈で問題なのは、次の8行で「まだ若々しい（green）君を最初に見た時以来」と時の副詞句がつくことにある。そのためにこの三年を相手との交際期間と見なす説もあるが[四五]、8行目だけならともかく、ここの、そして他のソネットの詠嘆調と照らし合わせると首肯しがたい。それでは気を遣って、老いは時計の針のように忍び寄るからいつの間にか君も老いたのかもしれないとごく婉曲に述べ、しかし最後には「美の夏は終った」と断言したことがまるで読めていないことになろう。知り合って三年でここまで言うだろうか。つまり相手は年齢的にも、おそらく容貌からももはや青年とは言いがたい人物だと考えねばならない。なお会って三年後に若い盛りが過ぎたとはサザンプトンにも、W・ハーバートにも当てはまらない。この三年は―再びサザンプトン説に足場を戻して―やはり塔の拘束期間と考えるべきである。しかしいかにもそう思わせるような表現はできなかった、叛逆者への処罰に関して何かを言えば王権委譲の不安定な時期、当局（つまりはW・セシル派）の神経を逆撫でしかねないと危惧する理由は充分にあった。したがってまだ若い君に会ってから三度の四月が過ぎたとも読める言説に振り回されずに、

それを全体の中に置きなおして若さとは入獄前の相手の状態と理解すべきだろう。なおこの“Since first I saw you fresh, which yet are green”（8行）は、107番“My love looks fresh”〔10行〕と通じている。塔に行く前は無論若かったが、「今も」若々しいよという嬉しがらせである。しかし他方で「夏の盛り」は振り払われ、「美の夏」は死んだと言い切っている。若さの衰えは自他共に認めざるをえないことだったからだろう。因みにこれも当時二三歳のペンブルックより、三〇歳を迎えるサザンプトンの方が似つかわしい。そしてそれは相手と長く会っていないために生れた感慨だと思われる。つまり「三度の冬が…」とは相手の獄中期間を踏まえて、そしてそれを痛みとして若さが失われたことへの悲しみを述べていた。「三度の春…」も「三度の四月…」もその反復である。かつて一五九二年頃今の若さと美も時の破壊力に踏みにじられるから、子を作ってそれをいつまでも確保しろと冗談まじりに言っていたのが、今や現実となってしまったのだ。もっともサザンプトン説だけでなく、二年余の塔への献呈となるとさらに支持のない仮説なので、木の黄葉や落葉に滲ませた相手との交際の長さを、趣向の似た108番を通して確認するのも無駄ではないだろう。ソネットは、君については全てを語りつくして改めて言うことは何もないので、「君は私のもの、私は君のもの」という昔から言ってきたことを一つ覚えに繰返すしかない、と始まる。このこと自体交友の長きに渡ることを窺わせている。相手が若くては成り立ちにくいのだが、その後相手の年齢は一層はっきり浮かびあがる。「最初に私が君のうるわしい名を神聖視した時のように、永遠の愛は、愛の若々しい姿に収まって、年齢の塵や損傷などものともせず、さけがたい皺にも一顧もくれず、老齢を永遠の使用人とし、時と外見がそれをもはや死んだものと見せ付けるまさにその場所に、愛の最初の感情が生れ出るのを見る」（8～14行）。年齢の塵、老齢、時と外見、にも拘わらず最初の愛は今も昔と変わりないという慰め方が、かえって年齢の「避けがたい」侵食を露わにしている。くり返しまだ君の若さは失われていないと詩人が慰めるのは、長い獄中生活の苦患からよ

うやく社会に戻った昔の貴公子が、逆に今や別人の顔を呈していた驚きに発しているようだ。精神的にもかつての無邪気さを失い猜疑心の強い中年男が詩人の前に現れたのではないか。世間の苦労では兄貴分だった庇護詩人も、自分はその二年余日当たりの良い場所を歩いてきただけに忸怩たる思いがあったに違いない。

塔釈放後の113番の「君と別れてから、眼が心に入り込み」や、114番の私の眼は何を見ても愛する君の姿に変えてしまうという、眼を修辞的契機とする類いのソネットは他にもかなりある。24, 27, 43, 46, 47番などがそうである。もっとも後者はいずれも「君」との別離への感極まった詠嘆を共通の特徴とするが、前者の113, 114番にはその響きは殆ど聴き取れない。両作は別離を悲しむより、眼の不正確な働きを前面に出しているが、それは104番（君は老けないが、時の歩みは妨げられない）や108番（「古いことも古いと思わず〔…〕、永遠の愛は年齢の塵と損傷を気にせず…」と思い合わせると、蓋いがたく刻まれた年齢の痕を認めながら、しかしそんなものは私の目には見えない（113番）、あるいは君は昔の君じゃない、だけど我が眼は錬金術を用いてどんな醜いものも昔の君そっくりの天使に変えてしまう（114番）と強引に否定したり、ある場合には辛辣に容貌の衰えを指摘したうえで、そんなことは気にしていないよという意味の混みいった冗談に紛らわせる。これは両ソネットがおそらく―その前後のものと同様に―塔釈放後の献呈であることを窺わせる。その時の久々の再会の印象を、かつての美しい君への変わらぬ愛という趣向の延長に述懐したものではないだろうか。となると24, 27番などはどんな状況で書かれたのか、逆にそれらとの対比で見当がついてくる。眼、といっても心の眼、が重要な役を占めるという点では似ているが、しかし色調は全くと言っていいほど違う。こちらでは相手に会えない悲嘆が動機をなし、そこでやむなく「君」に会うために心の眼に頼ることになるのだ。相手にしばらく会っていない点は同じだが、当然相手の若さの衰えはこちらでは全く問題にならない。だがロンドンを主な仕事場とする作者が何故こうも切に会いたいのに会えないのか

ともう一度考えると、いわゆる世間一般の用事が二人を隔てているのではなく、いかんともし難い障害が間に立ちはだかっていた、そして二人の交際史には不明な点が多々あるとしてもそれは差し当たり塔の監禁以外にはないという見解に導かれざるをえない。27番は、しいて大意を言えば、仕事でくたびれきって寝室に戻るが、しかし君のことを思うと眠れなくなるという訴えである。例の如くの庇護者かつ友人としての忠誠表現とひとまずは読める。しかしこれも巡業中のご無沙汰の挨拶ぐらいに片づけるには物の言い方が―詩的誇張をこえて―なんとも重苦しい。あのからかい好きは、軽妙・洒脱は、どこへ影を潜めたのか。そういう余裕のない状況だったのではないか。この種の主題は他のソネットでも繰返し語られるが、会えないからやむなく思念や夢で君を偲ぶという一途な気配は共通している。旅から戻ればまた会えるという風な気楽な了解のない、否応ない何かが二人を引き裂いていると思わせる。つまりは塔に閉じこめられ絶望に陥った者に、会いに行けない詩人がそれを、その理由が彼の側にあるなら心で詫びつつせめて変わらぬ愛を誓い慰めようとしたという風に読める。確かに「travailに疲れ」（2行）とか「（君に向かっての）旅（journey）」という言い方は惑わせる。詩の意味が曖昧なので、さては巡業かととびついてしまうところである。英語のtravelは仏語のtravailler〔苦労して旅する〕を語源とし、今は「苦労（する）」のtravailとまるで別の語になっているが、当時は多少の心得があれば仏語のニュアンスは生きていたろう。たしかにこれは「頭の中の旅」、つまりは友への心の旅へと収まっていく、「私の想念は、私が今も留まる場所から遠く離れて、君に向かって熱烈な巡礼の路を辿ろうとする」（5～6行）。しかし他方のtravailも一行目のtoil（骨折り、労苦）を承けて意味を響かせている。しかしそれは肉体だけではなく、その両義性（労苦・旅）を生かし精神にも及ぶ。3～4行目では、「肉体の仕事が終った時、精神を働かせようと頭の中の旅が始まる」、さらに最後に「こうして昼は手足が、夜は心が、君のため、そして私自身のために、休む暇がない」（13～4行）という具合である。

昼の仕事と夜の旅の労苦の対立であるが、後者に重みが掛かることはいうまでもない。君が遠くにいるために眠れないで物思いに耽る時、この巡礼の旅で「私の見えぬ眼」が闇の中を凝視する、するとついに君に廻り逢って慰めを得る、それが一篇の趣意である。といっても思念の巡礼だから、出会った君は「君の shadow」でしかない。この shadow は、姿、影、幻のいずれにも解せるが、いずれにしても影の薄さは争えず時に霊体の凄みさえ帯びてくる。影が「身の毛もよだつ（ghastly）夜の中に宝石のように垂れ下がっている」（11 行）とは、一義的には多くの死刑囚を閉じ込めてきた塔に美しい君が―生き残った主謀者たちの中で一人だけ―未だ囚われていることを踏まえていようが、107 番の「私自身の恐れ」に見えた死への不安も滲む。なおこの宝石のような君の shadow は、「黒い夜を美しくし、彼女の老いた顔を若返らせる」と続くが、これはかつての美青年へのせめてもの慰めの言葉だが、例えば巡業中で逢えないからといってこういう暗澹たる発想は生れてこないだろう。もっともここには、青年が詩人の黒い愛人に手を出した昔のことを思い出させる積もりも混じっているのかもしれない。もちろん緊張を解きほぐすジョークとしてであるが、過去のことは水に流したことは判るものの、ユーモアは感じられない。この暗闇の巡礼で魂の目が浮かび上がらせた「君の shadow」は、24 番では君の肖像画として語られる。「わが眼が画家を演じて、君の美しい姿かたちを心の画布に鋼のごとく刻みこんだ」（1～2 行）、あるいは「君の真の肖像画がわが胸底のアトリエにまだ掛かっている」（6～7 行）。もう一度言えば、用事が済めばいつでも逢える人間にこんな言い方をするだろうか。君の影といい心に刻んだ肖像画といい、相手に逢えない状況を強いられたための、苦しまぎれの詩文的な彌縫策である。さらに言えばこの離別の悲嘆の背後には、生身の君は「遠い」夜の中にいて逢えないとしても、しかし生きているだけでも有難いという一抹の安堵感があるのかもしれない。

43 番も同系列で、夜に友に逢える喜びを語る。「わが眼はぴったり閉じたときに一番良く見える、昼は一日中ろ

くなものは見ないのに、眠ると君の姿を見るからだ」（1～3行）で始まり、最後は昼夜逆転して「君に逢うまでは、わが眼には昼はずっと夜なのだ、だから夢が君の姿を見せる時、夜が昼の明るさを放つ」（13～4行）。夜の物想いや心中の画像が夢に変わったのだが、ここではそれがやむを得ぬ次善の策に過ぎないことを愚痴としてちらりと洩らしている。「君の shadow」だけでも夜を明るくし見えない眼に輝くのだから、君が「明るい昼」に本当に姿を現せば「どんなに楽しい眺めとなろう！（…）真昼間に（in the living day）君が見れば、わが眼は何という至福に浸るだろう！」（5～11行）。この living（10行）はそのままでは訳しようがない。だが相手が女王（今や死の女王）の囚人であることを、つまりは次行の「死の夜」に閉じこめられていることを考慮すれば、そこから早く「生きて」出てきて欲しいという表に出さない願いから前後の脈絡を無視して跳びだしてきたと思える。同様に今の「君の影」はまだ本当の君ではないという本音から、imperfect というもう一つの唐突な語が跳びだしてきたのだ、「死の夜の中の、君の美しい、完璧ならざる影がものみえぬ眼にとどまる時（…）」（傍点引用者）と。しかしいわば深層ではどちらも不協和音を発してはいない。生きた、完璧な君の姿に会いたいという願いの表明なのである。絶対読者は苦もなくそれを了解したに違いない。おそらくシェイクスピアは献呈詩の写しないし下書きを取っておいたのだろう。重複も避けられるし、それまでの献呈作品を踏まえて生きた言葉が使える。このソネット43が27番などの着想と戯れているのは明らかであり、関連テクスト的響きあいもこうした詩の醍醐味である。したがってそれは塔ソネットだけのことではない。「君に逢うまでは昼も夜」は、例えば109番の「わがバラよ、私は君がいなければこの広い世界を無と呼ぶ、君はこの世の全てなのだから」、要するに君がいなければこの世は闇、とも反響しあっている。『ソネット集』に構成的統一がないのは当然だとしても、こうした横断的なつながりの糸は随所に張り巡らされていて、動機において細部において遠く近くあちこちで照応し共鳴して、二人の交友に帰する親密

な小世界をなしてはいる。

しかし27番のように、昼に仕事をした後、寝てから君への巡礼の旅に出るのでは休む折がない。好い加減に勘弁してくれ、としのび逢いの喜びを逆手にとって、その労苦に文句をつけるのも早く会いたいという願いを述べる一趣向だったが、61番はそれを取り直して、「君の姿が私の重い目蓋を開いたままにして疲労困憊の夜にするのは君の意志なのか？　君によく似た影で私の眼を嘲り、眠りを破ろうと企んでいるのか？」（1～4行）と、不眠症の愚痴でもぶつける始まり方である。次の四行も、君は嫉妬から自分のspirit（この場合は、生霊である）を「家から遠く離れた」場所に送って、私の行動を監視しようというのかね、とこれまでに似ず食ってかかる風になる。しかしそれもいつもの主題に一味つけただけで、後半はそれを踏み台として、「いや違う」と否定し、「私の眼を覚ましているのは私の愛、私の休息を損ねているのはわが真なる愛、それが君のためにたえざる夜警を勤めているからだ」（9～12行）と、忠誠心の披瀝へと収まる。「遠く」は二人を隔てる牢格子という障害の婉曲表現であるが、ここで「家から遠く」と述べるのは中々自宅に帰れない相手の身の上を指しているだろう。「監視人watchman」という語を用いた―しかもさらに「監視する」と繰返した―のもこの囚人の状態を仄めかしたに違いない。すると詩人が友のために寝ずの番をしている時に、「君は他所で目覚めている、私から遠く離れ、他の者たちとは余りにも近くで」（13～4行）を、私を仲間外れにして相手は悪友と遊興に耽っているなどと解してはならない。「遠く」離れた「他所」とは塔以外ではないし、「他の者」とは狭い文脈では彼の監視人たちを第一に考えるべきである。相手が「目覚めている」のも夜遊びではなく獄舎の苦患で眠れなかろうという気遣いの表明だろう。第一、遊びごとに忙しい人間が、自分を思って眠れないという忠実な詩人のところに、嫉妬から霊を送って様子を探らせたりするだろうか？

46, 47番も君の姿や画像が取り上げられ、同じ塔の系列に連なる。ただしもはや「影」ではなく、「君の眺め（sight）」「君の絵姿の眺め（thy picture's sight）」（46番）が語られる。これは単なる言葉の綾なのか。どうも様子が違っている。43番で滲ませた本当の君に会えないという不満が表に出てきていない。かといって「絵姿」なのだから、実際に会ったわけでもないのだろう。まず46番では新プラトン主義の流行に乗ってなのか、その眺めをめぐる心身二元論に立った、眼と心の「生命がけの争い」に焦点が当てられる。「私の眼は、私の心が君の絵を見る邪魔をする（bar）、心は眼がこの権利を自由に行使する邪魔をする」（3~4行）、心は君が自分の中にいると申し立て（plea）をすれば、被告たる眼は君のうるわしい容姿は自分の中にこそ住むと主張する。そこで裁判が開かれ、陪審員が選定されるが、しかし彼らは全員心に組する「思念たち」（thoughts）なので、眼の取り分は君の外観のみ、心の権利は「君の内側なる心からの愛」（14行）という裁きが下される。このソネットに裁判に関する語彙が相当数あるのにまず注目したい。上から挙げると、bar（法廷）、plea（申立て、弁明）、defending（被告）、empanell（陪審員を選ぶ）、quest（陪審員）、verdict（判決）である。これにa mortal war, conquest（征服）、pierce（突き刺す）などが絡むと、どうしても心の「法廷」（30番）に呼び出された「死の夜に隠れた大切な友人たち」つまりはエセックスたちの事件を想起せざるを得ない。これもその折の裁判の思い出を織込みつつ、塔に友愛の深さを吟じた一曲とひとまず言えよう。では眼と心の争いとは何なのか。というより改めて争う必要が両者にはあったのか。勝敗の決着はすでに付いていたはずである。27, 43番で君に逢うことが語られた時、君を見るのは肉眼ではなく心眼、つまりは「魂の視力」や「夢」の幻視によってであり、それが引き渡すのは「君のshadow」というどこかこの世のものならぬ心霊性を帯びていた。したがってそれを見るには肉眼を閉じねばならなかったくらいである（“my sightless view”27番、“When most I wink”, “unseeing eyes”43番）。この肉体蔑視は、反唯物論

的な44, 45番ではさらに著しい。少し寄り道すると、これらも別離詠嘆の同じ動機に立つが、44番はこう始まる、「もし我が肉体の鈍重な物質が思考（thought）であれば、無礼な（injurious）距離も私が進むのを妨げまい。そうなれば隔たりなど何のその、私は遠く離れた地の果てからも、君が今いる場所へと運ばれていくものを」（1〜5行）。この遠い距離も法律的禁忌を空間に投影したもので、友が獄中にいて会えない状態を暗黙裡に指す。すると〈時〉に付いていた形容詞injuriousが、ここで「距離」に冠されているのも注意を引く。距離となって二人を隔てているのはあの女王だとも言えるからだ。続く「敏捷な思考は、行きたい場所を思い浮かべると、海も陸も跳び越えて〔そこへ〕行く」（7〜8行）は、眼を瞑ると君の影が見えると語っていたことの修辞的な模様替えだと言えよう。しかし「私〔という存在〕は余りにも多くの部分が土と水で仕上げられているので、嘆きつつも私は時の都合の良い折（time's leisure）を待たねばならない」は、だから例の「時」のご意向でお目通りが適わぬ立場にあることの示唆であろう。物質たる私は霞を喰らって生きるわけには行かないので、お気の毒ながら、あの人物（＝時）の顔色を窺わないわけには行かないのです、という釈明である。45番は明らかに44番を承けて、四大の残る半分が話題となる、「他の二つ、軽い空気と浄めの火は、私が〔君に〕とり残されたのがどの場所であれ、両者とも君と一緒にいる」（1〜2行）。この二要素は、「いたと思えばまた消えて、すばやく移動する」のだが、それは「君のところへ優しい愛の使節」として伺うからである。すると私は水と土だけになってとり残され、お陰で「メランコリーに苛まれ、死へと沈み」かけるが、そこに「あの足早の死者たち」が君のところから戻ってきて、「君は元気でいる」と安心させてくれる。しかしこの喜びもつかの間、すぐ彼らを使いに送り出すので、私の悲しみは再び始まる（10〜14行）。このメランコリーや死ぬほどの悲しみとは、行き着くところ相手の苦境への同情であるが、同時に作者のディレンマも伝えている。このソネットのtender embassy of love, とswift messengersは、ある程度23番の「わ

が溢れる胸の想いの雄弁にして物言わぬ先触れ」たるmy booksや26番のwritten embassyの言い換え、つまりは献呈ソネット自体を指すだろうが、この「使い」が足早なのは、単にそれが思念のせいなのか書簡だからなのか、「はるか遠くの」―塔の―君の元に行けるからで、土と水の作者が「鈍重で」、つまり社会のタブーを破れぬ肉体の悲しさでそうは出来ないことへの弁明にもなっている。火と空気（欲望と思念ともいわれる）も庇護者の半分なのだからそれが君を見舞えば、土と水の方は遠くでおろおろ悲しむだけで勘弁してくださいというところだろうか。45番では言訳の屁理屈めくが、しかし肉体への精神の優位は揺るがしがたい。そこで46番に戻ると、それまで無視されていた肉眼が、ここではにわかに心ないし心眼と平等の扱いを受けているのが首を捻らせる。しかも陪臣員は皆「思念たち」なのである。当然、後者にもっと有利な裁きが下ってもよかったのではないか。にも拘わらず同等の権利を与えられたばかりか、「水晶の眼」（6行）とか「透明な眼」（12行）といった、鈍重な二大に属するとは思えない篤い尊敬の念で遇されている。これにはなにか特別なわけがありそうである。何が起きたのか。「君の姿」が、これまでのようにthy sightやthy shadowではなく、thy picture's sight（3行）と表現されていたことに注意を払いたい。まさしくリスリの肖像画が話題になっていたのではあるまいか。シェイクスピアはサザンプトン夫人なのか他の誰の仲介なのか、塔にいる友の絵姿を見る眼福に恵まれた。そう仮定すると、肉眼の尊大とさえ言える強持てぶりを初め、それにともなう隅々までの調子の変化が腑に落ちてくる。「わが眼のdue（当然受けるべき権利）は君の外側の部分」の外側とは、要するに絵姿なのである。であればそれは確かに「当然受けるべき権利」というも愚か、肉眼があって初めて成り立つ領域ではないか。だから「眼は心に君の絵姿を見せまいとする」のだが、絵なら眼の助けを借りなければ宝の持腐れで、どうしても心は下手に出なければならない。鈍重で役立たずの眼にようやく出番が回ってきたわけだ。「透明な眼」と持ち上げられる所以である。といってもそれまで散々扱下

ろしてきた手前があるから、心としてもそう簡単に敗北を認めるわけにはいかない。そこで心は「死の戦い」と第三者による裁判という手続きを踏んで新プラトン主義的により貴重な内側〔＝魂〕の愛という半分を領有し、それで面子を保ちつつ一歩を譲った。もちろんその辺りは面白おかしい言葉の遊びであるが、別離を嘆くのに終始してきた友に肖像画にせよ再会する至福の喜びを味わえたのだから、それを歌わない手はない。逢えない悲しみという主題の開発も底を尽きかけていたかもしれない庇護者にとって格好の題材が提供されたのだが、なによりその眼福の感激を直ちにパトロンに伝えることは、当時の詩人にとって欠かしてはならない心得だったのではあるまいか。もっともそれらしき画像は残っていないのだが[四六]、しかしその存在は次のソネット47を読むとますます確かなものに思えてくる。

ここでは眼と心の争いや裁判沙汰は今は昔の話らしく、両者は互いに助けあう対等の「同盟」関係にある（1〜2行）。眼が君の姿が見たいと焦がれ、愛する心が溜息吐いて胸ふさがると、「眼はわが愛する者の絵姿で祝宴を開き、この描かれた饗宴に心を招く」（5〜6行）。描かれた饗宴とまで言うのは、やはり久しく会えない友の姿が実際に—想像ではなく—描かれていたからである[四七]。その後の「君自身は遠くにいても、眼も心も君の絵姿（thy picture）によって、あるいは私の愛によって、依然として私と一緒にいる」（9〜10行）も、重ねて肖像画実在の蓋然性を高めている。それまでプラトン主義的二元論の驥尾に付してきたために、その行きがかりで「あるいは私の愛によって」と付け加えるが、二人の結び付きの媒介はここでは明らかに絵姿にあるし、第一絵がなければ47番は—46番と共に—書かれなかったとさえいえるだろう。とはいえ唯心論が旧の勢いを戻したかのように、次いで「君はわが思念の外には出られない」（11行）と言うものの、最後の頼みの綱はやはり眼の宰領下にあるthy pictureなのである。「もし思念が眠り込んでも、わが眼に映る君の絵姿が、わが心を目覚めさせ、心と眼の喜びとなる」（13〜4行）。

心身二元論に欠陥があるせいか最後は論理が縺れて判りにくいが、眼は心と対等どころか優位に立っていてかつてのライバルにおこぼれを施している様子なのである。その理由が「君の絵姿」の出現にあることは言うまでもない。堅持していた精神主義をなかば見捨てたのもそのためである。いずれにしても相手との再会が叶わぬ厳しい状況がその背後にあったことは間違いない。唯、ひとつ気になる点がある。心が眼に膝を屈して「描かれた饗宴」を有難涙を流さんばかりに享受しながら、肝心の絵については一言も述べていないことである。機を捉えてはmy loveの美と若さに絶賛を惜しまなかっただけに、この沈黙はいささか奇妙である。53番で、「君の実体は何だろう、何で出来ているのだろう？　無数の異質な影が君に付きまとう（…）、アドニスを描けば、それは君を真似したお粗末な贋者だ。ヘレンの頬に美のあらゆる手管を凝らしても、君がギリシアの衣装で新しく描かれただけのこと」（1～8行）と、大げさに褒めちぎったのは恐らくつい最近のことである。[四八] このソネットは27番43番と同じ、思念による君の影との再会ものに属している。何故この調子で肖像画に賛辞を連ねなかったのか。一つ考えられるのは容貌への言及を控えさせる何かが絵姿にあったということだ。女王の寵こそ得られなかったが、かなりすき放題にやってきた伯爵にとって入獄以来の経験は余りにも厳しかった。画家は醜さは多少修正したろうが、モデルと目立って違えば記録者としての技量を問われるから、例の出獄前後の画像がそうであるように出来上がったものに自ずから辛酸の跡が刻み込まれていても不思議ではない。その変わり様に詩人は絶句したのかもしれない。十年の長い付き合いで見えすいた空世辞を言う気にもなれず、かといって相手を悲しませることも言えず、そこはしばし等閑に付して「描かれた饗宴」で切りぬけたということなのではないか。とすれば釈放後の107番で、君は「若返って見えた」と述べたのも、獄中での苦労の跡が家に戻った喜びで、一瞬にせよかき消えた時に再会したとすれば首肯ける。その頃から、君は昔の若さを留めていると繰返すようになるのは、事実を指摘しても仕方がないことだか

らだろうが、相手の不機嫌を宥めすかすのに精一杯だったこともある。

以上三十ほどのソネットを取り上げたが、それらを入獄以降、とくに塔へのソネット群とすると、他にも十を下らぬ詩がほぼ同時期の作として考えられる。一見したところまるで違うことが話題になっているようでも、実はしばしば同じ動機に根ざし、一六〇三年四月以前なら友と会えない悲嘆を手を変え品を変え繰返し語りかけている。これは折々の出来事を織り込みつつも、ご機嫌伺いに主動機がある献呈書簡詩の必然的帰結である。その幾つかに眼を投じると、48番は、旅に出た時大切な君を安全な場所に置いて鍵をかければいいのに、私の胸に蔵っているだけなのでいつ人に盗まれるかと心配だという主旨で、相変わらずの愛の信義もの、そこに何か深刻な時代の影など探る必要などなさそうに思える。ところがよく読むと、友愛を打ち明ける文面のここかしこに引っかかる物言いが見えてくる。まず旅に出る時下らぬ持ち物を「きわめて安全な場所に蔵う」（2行）の“Each trifle under truest bars to thrust”だが、bars はひとまず金庫のように安全な保管場所であるが、これまでのように法廷、さらに弁護士、刑務所の窓格子の意味も重層的に抱えている。そこに thrust（押し込む、突き刺す）が続くと、どこかに塔の囚人への暗示が隠されているのではないかという疑いが湧くのは単にわれわれの先入観のせいなのだろうか。しかし不審はさらに掻き立てられる。4行目で下らぬ品々を「虚偽の手」から守ると言った後、「安全確実な場所に〔置く〕」と解せる“in sure wards of trust”へと続くのだが、これは「確実な管理下の監獄」ともなる。[四] 塔に「押し込まれた」ままの友人の苦境が浮かび上がってきそうなのだ。その方が6行目の撞着語法がよく判る、というよりそうでないと判らなくなる。つまり「〔君は〕こよなく尊い慰めにして、今はわが最大の嘆き」の「今は」とは、愛する友が塔に送られた今は、であろう。次行の「君はこよなく大事なものの最たるもの、そしてわが最大の悲しみ」の対句もそこを踏まえている。ありふれた痴情の縛れめくが、あちこちの目配せがそれとなく異議を突きつける。

シェイクスピアは監視者の眼に触れないように用心したであろうが、相手が叛逆罪を冒したのだからいつ取り押さえられてエセックス正当化の嫌疑をかけられるか不安である。とはいえ度々言うようにそのいわば急所に触れなければ庇護者の責は充分に果たせない。つまりコミュニケーションが成立しない。そこで字句の扱いは念には念を入れた結果、時に唐突、時に意味もなく呟くような朦朧体で読者を攪乱するのだが、しかしほんの一言半句で友は理解したに違いなく、彼こそ唯一の読者なのだからことはそれで済んだのである。すると「君はあらゆる泥棒の餌食になった」（8行）も読み替えねばならない。泥棒呼ばわりされているのは、友を監獄（bar, ward）に押し込んだ枢密院、要するにR・セシルあたりではないのか。「金庫（chest）に鍵をかけなかった」（9行）のをいいことに、連中は大事な宝を詩人から盗んだという見立てである。泥棒に向けた「卑しい」「虚偽の手」は彼らへの罵りである。chest は韻をふむ breast（11行）と意味的にも通じる。君は「わが胸の寛容な囲い地」から「好き勝手に出入りしている」（11～2行）とは、「押し込むのに一番信用できる保管場所」や「安全確実な監視下の」を承けて、好き勝手な出入りの許されない場所に相手が今いることを遠廻しに述べているのだ。しかし表向きは鍵をかけないから、「そこ〔胸の内〕からも盗まれないか、心配だ」（13行）と当たり障りなく進むが、最後の「truth（正直・真実）も、これほどの値打ちものには泥棒に豹変しようから」が辛辣で、2行目の under *truest* bars を響かせてセシル攻撃の第二弾を放っている。口の聞き方に気をつけながら、どんな人間も君を見たら放っておかない、それでこんな大変な目に遭ったわけさと洒落のめしたのかと思える。唯 truth はしばしばリスリの美称だから、そこに着目すると彼が自分の黒い愛人を寝取った昔のことを冷やかしていないとは言えない。もちろんこんな時に言う位だから、ここでも旧怨は水に流した戯言である。なお友を「盗んで」逃亡できない監禁下に置く「虚偽の手」は、『フェニックス』の三回の罵倒、なかでも「いんちき検事」と解したものに通じるように思われる。

52番も同じ趣向で、「私は金持ちのようなもの」と始めるのは、貴重な宝物を問題にしたいからである。「〔金持ちの〕有難い鍵は、自分のやさしい錠をかけた宝（his sweet up-locked treasure）のところに行かせてくれる」（1～2行）。しかしこの宝がいくら大事でも、そうしょっちゅう開けて眺めては喜びも薄れよう、祭りも年に一度だから有難みがある、と続けるのは鍵をかけた宝に本当は会えないことを背景にしている。宝をsweetと形容するのは強引であるが、しかし宝石がそれに比すべき愛する友のことであれば、言い慣れたmy sweet love（29番）を少し言い換えただけのことである。つまり「錠をかけた」とは友が獄舎に囚われたことを仄めかす。27番で君の姿が思念の闇に「宝石」のように浮かび上がるのも身元照会の手掛かりになる。なおlock-upとすると、監禁、刑務所の意味になって何が起きているのか暗示を強める。ではもはや付け加えるまでもないのだが、12行で大事に蔵ってある宝について、さらに“his imprisoned pride”と言い直している。これは献呈を受ける人物の現状を否が応でも浮かび上がらせる。なおprideは「誇るべきもの」辺りであるが、たとえそれが「〔夏の〕盛り」として使われるときも、友人の自尊心の強さを匂わせていよう。いずれにしてもこれは「投獄された君」、あの若い友人である。最後は、「君の値打ち」を讃え、それを「手に入れれば勝利」だが「手に入らなくても希望を与える」と結ぶ。塔にいるのは辛いだろうがご辛抱ください、生きているだけで嬉しいし、やがて良いこともありましょうといった慰藉の言である。これも蛇足になろうが、明らかに48番の変奏であるこのソネットにおいて、金庫の中身は同じなのにその持ち主が今回は旅人ではなく金持ち（のような者）になっているのは、この旅が鍵を掛けられた友と引離されたことの比喩であったことを改めて示唆する。

50番で私は心重い旅人として登場するが、この旅も囚われの友との別離の迂言法である。つまり27番の君を探し求めての「巡礼」、28番の「君から遠ざかる一方の苦難の歩み」、そして少々は44, 45番の火と空気による君に

向かっての一見形而上学的な使節の訪問などのたぐいである。ここでは旅人がいかんともしがたい二律背反に足をすくわれることに焦点が絞られる。旅は本来君への巡礼として、「私の探しもとめるもの、私の疲れはてた旅のend（目的、終わり）」（2行）に向かうはずだが、しかしそれは他方で二人の隔たりの比喩でもあるから、つまり釈放でもされないかぎり隔たりは埋まらないのだから、そんな旅は気安めでしかなく、それがここでは進むほど遠去かるという不満として語られる。この逆説に妙趣ありと捉えたわけだろう。そんな風だから旅が終っても「安楽」や「休息」が得られるはずはなく、返って「こうして君の方から何マイルも遠去かってしまう」（4行）撞着に陥る。本来前方にあるべき「喜び」が背後になり、行く手に待つのは「嘆き」なのである。これは44番で、肉体の悲しさで、「君が立ち去った時、何マイルもの長い距離を跳び越えるわけには行かない」と述べたのに通じる。去るのが相手から私になったが、逆転しても会えない事情に変わりはない。50番と連作をなす51番は、友との距離をどう克服すればよいのか、その難しさを旅人を運ぶ駄馬の遅い歩みにことよせて一席弁じる。この辺りになると、30, 31番（初期の塔ソネット）の真摯な調子はだいぶ弱まって、言葉遊びで屁理屈を奔する余裕が感じられる。脚韻を揃えた一〇音節の一四行詩を作るのに作者がどの位の労力、時間を要したのか判らないが、多忙な劇作家―おそらくあの問題の悲劇執筆中の―としては、献呈が一六〇一年末頃から始まったとして一六ヶ月程で少くとも―つまり発表されただけで―四〇篇ほどはあるから、それだけでも月平均二篇以上で、これはいくら信義篤き才人でもかなりの負担である。しかも初めの動機は弱まり、状況は一向に変わらないのだから新たな詩想が滾々と湧き上がるはずもなく、草卒の間に仕上げれば同工異曲に陥らざるを得ない。51番では、君と離れたくない旅人の気持ちを汲んで歩みの遅くなった馬は、その鈍足が返って評価されることになる、「君のいる場所から、どうして急いで離れる必要があろうか？」（3行）。友人は背後にいるので、行きはのろのろ進むのは大いに結構。だが帰りとなれ

ばそれでは許されない。たとえ翼を生やして宙を飛んでも遅く感じられよう。相も変わらず、君と一日も早く再会したい、つまりはその釈放の願いを述べたわけである。

57番はもはや旅を話題に上せないが、動機が変わったわけではない。とはいえだいぶ目先を変えて、家に戻りたがらない主人をひたすら待つだけの寂しい召使の悲嘆を、わざとらしい諦観と謙虚ないし卑屈さを装って表明するが、底に流れるのは同じ一日でも早い君との再会の願いである。たしかに一読したところ、同性愛の影を濃厚に湛えたソネット10番、20番の流れを引いて、愛する友に相手にされないことを拗ねてみせたのかと思わせる。「私は君の奴隷だから」、君が遊びごと（“your desire” 2行）にどう時間を使おうと「わが主君よ」、君のご隋意に、君のいない悲しみを嫌とも思わず、時計を見ながらいつまでも唯お待ちするだけ、それが私の勤め、一度「さらばじゃ」と言われれば、君がどこにいるのか、何をしているのかと焼きもちは焼きません、「愛は愚かなもの」、君がそうしたいなら何をしようと正しいのです…　若殿はお楽しみごとで召使たる詩人をいつまでも一人ぼっちにしているという趣向だが、しかし元々この二人の友人は一緒に住んでいたわけではないのだから、やや抑えて語られる君の不在（absence）の悲しみとは、これも囚人と会えない悲嘆の偽装以外ではないだろう。それを遊び好きらしき青年とそれをやむなしと受け入れる愛のお相手もするらしい辛抱強い使用人という関係に仕立てたわけである。もし言葉通りにとれば、普通なら召使というのは主人の不在を喜ぶはずだがという不審も生じようが、それはお門違いの詮索になる。何か遊びごとに耽っている主人に見捨てられた「悲しい奴隷」たる詩人は、だからといって「〔それを〕苦とするわけではない」が、しかしささやかな抵抗は試みる。「ただし君が今どこにいるのか、彼らをどんな風に楽しませているのかは、別だ」。これは塔に拘束された友に、思念や夢によって君の影に出会えるだけでも嬉しいという一途な悲壮調を一捻りして、まるで相手の放蕩で会えないのだと、今度はかなりお道化て抗議してみ

せたのだ。しかし「奴隷」（1行、11行）の語自体が、会うこともままならぬ囚人の立場を暗示している。入獄による相手の「不在」の長さを“the world-without-end hour”という大げさな表現で述べたのも、また adieu という永の別れを意味する語も、会えない理由が世界を支配する女王の意向に基づく以上、嫉妬や文句をつける筋合いのことではなかったからである。この戯言は、会えない悲しみという主題が度重なったための新工夫だろうが、また老衰したエリザベスの死期が国民に見えてきたためとも思われる。この修辞的な逆転は58番でも継承され、相手の立場はさらに輪郭を濃く浮かび上がらせる。これも青年が喜ばしからぬ楽しみごとに耽り相手にして貰えない詩人が、私は我慢する、「私を君の奴隷にした神が禁じたのだ、君のお楽しみの時間を抑えつけるなどとは思ってもならないと」（1～2行）、だからお好きになさい、と拗ねて嫌味を言っているのかと読めるが、その裏には57番と同じ相手と会えない悲しみ、つまりは相手の陥った苦境への無念の思いが流れていよう。それは最後のほうで、「私は［君を］待たねばならない、たとえ待つことが地獄であろうとも」（13行）にかなりはっきり透かし見える。友の心が戻らないのを待つ辛い詩人の嫉妬という体裁で、神―この場合は女神と性を読み替えねばならない―に会うことを禁じられた友人のつつがなき釈放を、一日千秋の思いで待つ心の内を陳べている。そう思って遡ると、“Th' imprisoned absence of your liberty”（6行）という直訳不可能だが、しかしこれまで論じた底意が丸見えともいえる語句に出くわす。これを5行から続けて逐語訳すると、「君が好き勝手に出歩いている間、君の自由の投獄された不在という苦しみを私に耐えさせよ」と理解しがたいものになるが、それは文法や辞書的語義を杓子定義に当てはめるからで、少々突き放すと真意が浮んできそうだ。[20] 例えば52番と同じ唐突な語 imprisoned が偶然出てきたわけではあるまい。前回に倣って自由と監禁の役割が転倒しているが、言外の意味は容易に推察がつく。この「自由」を、「君は特権として自分の時間を好きなように使える」（10行）とか、「自分の冒した罪を許すのも君の勝手」（11

〜2行）などと共に、真に受けてはならないのは例の如くであって、強制的収容を反語的にそう言ったまでなのだ。「投獄された不在」とはもちろん詩人ではなく青年が「投獄され」、だからその「不在」を「私は耐え」ねばならない、「奴隷」ないし「臣下」として「辛抱」強く、ということである。するとその上の“your leisure”〔4行〕も「君が好き勝手に振舞う」とは別の意味を響かせる。逮捕から少なくとも一年ほどは経っていると思えるが、その間まさしく無為に獄中生活を送ったのだから、それは見方次第ではまさしくleisure（自由な余暇）である。しかもそれは長生きカラスの余命と共にまだ続くわけだから、より積極的な第三の意味も帯びてくる。「君のleisureを待つのを義務とする」とは、君が塔から釈放されるのを待ち続けますという忠節の誓いにもなる。13行の「私は待たねばならない」は、とくにこの期待に絡んでいよう。すると「君のcharterは強大なので〔…〕君自身に犯した罪を君自身が許す権利（pardon）も君にはある」（9〜12行）もその辺りに掛かりそうだ。これを塔への献呈詩とする立場からは、「罪」というだけでつい叛逆罪を想起してしまうのだが、ではcharter（勅許状、特別免除）とは、その罪で死刑を言い渡された友の死一等を減した女王による恩赦のことではないだろうか。しかもpardonにも赦免（状）の意味がある。しかし物も言いようで、逆に赦免のお陰で友は囚人として「お楽しみの時間」に耽って私を見捨てていると、やや恩を仇で返す言いがかりを付けるのも一興、長引く牢獄生活への同情を語りつつ、相手の立場から女王への不満を洩らしたというところではあるまいか。意のままにならない拘禁をpleasure, liberty, leasureと好き放題の遊びごとにしたのは、むろん検閲の眼への配慮もあろうが、同時にパトロン文学の道化的妙味の発揮だろう。三〇歳の気難しい囚人も、遊びごとで会ってくれないと拗ねられると一瞬硬い表情を崩したのではあるまいか。

以上見てきた仄めかしの修辞法は、一を聞いて十を知る特権的読み手に意が伝わればそれで主な目的は果たされ

る献呈詩の性質に根差す。では29番も、塔の友人を歌っていると見なしてよいだろう。その冒頭で詩人は、何と私は不運な男だと泣きごとを言うが、どうもそれは自分のことではなさそうである。「運命の女神（Fortune）からも、そして人々の眼にも不興を蒙り、独りぼっちで見捨てられたわが身の上を嘆く時、そして（…）望みなき叫びをあげて聞く耳もたぬ天をうるさがらせ、わが身をみつめ、わが運命（fate）に悪態をつく時」（1～4行）の「私」とは、順風満帆の庇護詩人よりも謀反に失敗し爵位を剥奪されて塔で惨めな日々を送るH・リスリの方が適切である。まさに彼こそ〈運命の女神〉たるエリザベスの不興を買って世間からも「見捨てられ」、獄中「一人ぼっち」で前途のない自分を嘆き、釈放の嘆願には一向「耳を籍さない天」である女王を「無益な叫び」で悩まし、「運命」つまり彼女に悪態を吐いていたのではあるまいか。少なくとも一五九四年以後のシャイクスピアには、私的にはともかく社会的にこれ程の非運に当てはまる状況は―今のところ―知られていない。それを自分のこととして遠回しに述べたのはまずは検閲対策である。しかし6行目以降の「私」は詩人自身にすり換わる。この絶望的状況も「君を思うと」一変すると暗から明に転回して、「私も将来の希望に溢れた人のようになりたい、彼のように容貌すぐれ、友達に恵まれ…」（5～6行）と言いだすが、この「彼」は今度は言葉通りリスリを差していよう。前途を絶たれた塔の住人に「将来の希望に溢れた…」はそぐわないが、これが詩的挨拶というのでなければ時代の変化を映しているのかもしれない。エセックス処刑後の老女王の心身衰弱は世間に知られていたろうし、エセックス贔屓のジェームズ一世が継承することも一六〇二年頃には、一部宮廷内だけの秘密ではなくなっていただろう。とすれば、「友人に恵まれた」彼の未来がもう一度大きく開かれる見通しを二人が抱ける状況だったことになる。数行下で、詩人がこんな無いない尽くしの自分がつくづく嫌になった、しかしそんな時「幸いにも君のことを思うと、夜明けに陰気な（sullen）大地から飛び上がるヒバリのように、天の入り口で賛歌を歌いだす。君の優しい愛を思い出す

と大変な富が与えられるから」（10〜13行）とは、例の如くの友の賛歌と篤い友情の信義の中に、もうすぐ夜明けが来る、君の絶望的な状態はじきに終る、という明るい未来を織り込んでいたことになる。三行目の耳を傾けない「天」（3行）が女王だったとすれば、今入り口に到達した「天」（12行）の方はジェームズのことと考えてよいのかもしれない。ジェームズならエセックスを介してこの上なく頼母しい「友人」である。隣国王の塔の囚人への気遣いはすでに述べた。またstateが三回使われ、初めの二回は「状態」の意味であるが、三度目はそこに「国家」のニュアンスを揺曳させ、「〔君の〕お陰で国王とでもわがstateを取りかえるのは御免だ」（14行）と結ぶ。これは王への野心に目が眩んで挫折したエセックスの旧同志に、昔のことでくよくよするな、王国より大事なものがあるといった激励であろう。ところでH・リスリはどんな顔でこれを読んだのだろうか。前述の渋い顔の肖像画や、ソネットの余りにも度々繰返される慰めや励ましを考えあわせると、ここのsullen（不機嫌な、気難しい…）とは庇護者がパトロンの鬱々と晴れない気分を、さらには自分への不機嫌さえ察知していた兆候なのかもしれない。もっともそれは主に釈放後のソネットから遡った推測なのであるが。

最後に97〜9番の三作に触れておきたい。97番は「君から離れていた時（my absence）は、さながら冬のようであった、すばやく去っていく年の喜び〔たる君〕よ！　何と凍える思いをしたことか、何と暗い日々を見たことか、どこもかしこも老いた十二月（old December）の冬枯れの眺めばかり」（1〜4行）と始まり、ところが実はその季節は実際は夏であり実り豊かな秋だったのだと付け加えて、冬が別離の寂しさの比喩であることを明かす。最後にこの主旋律は、「夏とその喜びは君に仕えているので、君がいないと鳥たちでさえ沈黙する〔…〕木の葉も冬が来るのを怖れて色を失う」（11〜4行）と反復される。この別離は、君がいないとこの世は夏や秋でも暗い冬でしかないという数ヶ月に及ぶ時の長さから見て、これも刑罰による強制されたものと推測できる。でなければ夏を

冬とまで言うだろうか。92～6番の相手の愛のご乱行を責めるらしいソネットに続くので、仲違いでもしたのではないかと考える見方もあるが[五]、それは作者の編集上の術策に嵌ったことになるのかもしれない。前述のように、後者は一五九八年のリスリの結婚前の「恋人の嘆き」と通じるが、97番はT・ナッシュ作『夏の意志と遺言』（一六〇〇年）との「濃厚なつながり」があるという指摘に従えば[五]、その点からもこの時期のabsenceとはまず監禁の暗示と考えるべきではないか。たしかに99番のバラを食いつくす毒虫（canker）は、95番の「香りよきバラに宿るcanker」とつながりそうだし、他の手掛かりもないので92～96番と同時期と思いたくなるが、そう思わせる配列は作者による編集上の作戦だったろう。97番はさらに、96番の「君の罪は若さ、ある種のwantonness（色好み）」に直ちに応じたかのような字句、「春が浮気をしたための（wanton）孕み子」（7行）があり、両者の連続性を想定させるのも同じ目晦ましの策であろう。つまり同時代の権力に口を噤まされたつけが、後世の読者に廻されてわれわれの首を傾げさせているのだ。なおこの7行の句は、色好みの（wanton）のリスリがヴァーノンを妊娠させ、約束していたらしい結婚を反故にしかけて危うく長女を「父なし子」（10行）にするところだった経緯に触れているのかもしれない。そこにはまた相手が死刑判決を受けたことも考慮されていよう。98番も類似の趣向で、「この春中、私は君から離れていた」と始まり、鳥は啼きさまざまな美しい花が咲いたが、それらは全ての〔美の〕お手本である「君の姿を写した形だけの歓喜でしかなかった、世はまだ冬のままに見えた」（11～3行）。その理由はやはり「君がいない」（13行）からである。この不在はこれまでと同じ刑罰ゆえのいかんともし難い隔たりのことと思える。詩人が用事で旅に出たためというには表現が屈折している。あるいは意表を衝いてそういう大げさな言辞を奔さないとも限らないが、それを三回（97～9番）もいうのは芸がなくて興醒めだから詩人たるもの避けたいところである。まして別離の悲嘆はすでに一五回程あれこれの趣向で披瀝するのを瞥見したが、それらとの動機的一

致を考えると、それもこれも暗示に見合う現実が存在したと考えるべきだろう。なお「色々な花」の後に百合とバラが呼び出され、それぞれの白さと深紅を称える気にはならなかった（9～10行）というのは、詩人の歌う通り友こそが本物の百合とバラだからである。既に述べたようにソネットのRose（ないしrose、ここでは大文字）はリスリ（Wriothesley）の別称の可能性が高い。百合の白さとバラの深紅を持ち出したのは、そのためである。かつて第一詩集で、色白のアドニスが死後花に再生した時、それが白い縞の入った血の色だった記憶が漂っていよう。最終行の「私はこれら〔の花〕と、君の影として戯れた」は、夢や思念で出あった「君の影」の流れを汲むが、色鮮やかな花を君の贋者扱いしてyour shadowと呼ぶことには自ずから別の事情がありそうだ。「三度の夏の奢り」の104番では、再会が釈放後すぐではなく六月以降と推測したが、それを考慮するとこの三作は一六〇三年の女王の死後の釈放前後、しかし再会以前という推定が可能になる。97番に戻ると、「年老いた一二月」（4行）は、君がいないと夏も冬と言うための唯の言葉の綾にすぎないのか疑りたくなる。というのも2行の「足早に過ぎ去る年（fleeting year）の喜びたる君」にはどこか希望が射している。釈放への間近な期待がなければ、一年が過ぎるのは囚人にとって又しても悲嘆と慷慨のうちに歳月を浪費したのだから、庇護者としてとてもこんな挨拶は口にできない。しかもこの冬が過去のものであることが二回の現在完了によって強調されている。他方「年老いた一二月」であるが、七〇歳の女王はどういう偶然なのか旧暦の大晦日（三月二三日）の晩に瀕死の床につき、正月元旦の朝三時ごろ息を引きとった。これは新暦に逆に当てはめれば一二月末日に世を去ったことになる。老いた一二月とは死んだ彼女のことであり、その「どこもかしこも枯れ野の眺め（bareness everywhere）」とは、エリザベスが長生きしすぎた老衰ぶり、その治世に倦みまた戦争を怖れる国民一般の感情もさりながら、何より彼女に翻弄された不幸なリスリの気持を代弁していたのではないか。しかしそれはもう過ぎた、というのが主旨であれば、「夏とそ

の喜びは君を待ち続けている」（11行）は、その現在形と共に目を凝らして読まねばならない。「年老いた二月」が姿を消したお陰で、家族と友人はいよいよ君が塔から出るのを待っているところなのだ。主語が夏なのは、君がいなければ夏も夏ではないからである。すると「孤児と父のいない果実〔子〕の希望」（10行）とは、やはり危うくそうなりかけた当時五歳の長女を仄めかしたのではないか。ひょっとするとfleeting yearにはこの長女が生れた時一月ほど幽閉されたFleet監獄への含みがあり、間近な出獄の期待を込めていた、だからそれを「喜び」と言ったのかもしれない。しかしその後「君がいなければ、鳥は歌わない（…）冬が近づくのを怖れて」（12〜4行）と引き取るのは、まだ油断はできないということで釈放以前の作と推測しうる。宮内大臣ハンズドンは職掌柄、女王の生活には気を遣っていたが、個人的にも強い関心を払っていて、女王が死ぬや二月から宮廷に居ついていた弟をジェームズへの第一の使者として先駆けさせた。彼をパトロンとする一座の幹部として、そして宮廷上演の役者として、シェイクスピアは女王の健康や次期王に関する宮廷の動向にかなり通じていたかもしれない。

そこで改めて98番を読むと、確かに類似の趣向だが微妙な違いがあるのに気がつく。97番では夏でも秋でも冬さながらだったし、また冬が来やしないかとぼやいていたのが、今回は曲がりなりにも春は訪れている。それどころか「着飾った四月があらゆるものに青春の息吹を吹き込んだし」（3〜4行）、百合やバラも咲いた。にも拘わらずこれらの花は「匂いだけで、君をなぞった形だけの喜び」であり「君の影」にすぎない、となぜか次第に不満の気配が蓋いがたくなる。どうやら、リスリはすでに塔から釈放されているのだ。それは四月一〇日だったが、『ソネット集』の論理では四月が青春の息吹を冬の世界に吹き付けられるには、リスリがこの世に戻っていなければならない。そう考えれば、これはその十日以降である。にも拘らず、何故か詩人はまだ念願の再会を許されていなかったのではないか。これまで塔へのソネット献呈で誠意を尽くしてきた彼としては納得が行かない。春が来ても小鳥

が歌い香わしい花が咲いても心浮き立たず、それらは君の写し絵だと愚痴る理由もその辺にありそうである。本物に会えないでいるからなのだ。その内に「やっぱりまだ冬なのかな」（13行）などと言い出すのは、今ならいつでも会えるはずなのにという暗示が籠っていよう。真意は早く会ってくださいという催促であるが、これじゃ「君の影」（14行）と遊んでるようなものだという呟きは辛辣でさえある。塔にいる頃「君の影」に遭ってせめてもの慰めにしたけれど、これじゃあの時とちっとも変わらないではありませんかと憎まれ口を利いたことになるからである。しかしそれはどうやら直ちに功を奏さなかった。次の99番もまだお目通りが叶う前の作と読める。春が来て百合やバラを見たが君の贋者だから別に嬉しくもない、第一本当に春なのかね、という98番にさらに一歩を進めて、花々を君の美点を盗んだと――一層焦れた調子で――責め詰るが、要はそれらの本家本元たるリスリに早く御目文字に掛かりたいという再度の訴えである。まずスミレが君の甘い吐息を掠め、紫は君の血で染めたろうと言掛かりをつけられるが、これは『ヴィーナス』におけるアドニスの再生を仄めかして懐かしい思い出を呼び覚まし、友情の原点に立ち帰ろうとしたのだろう。時期としては、君の髪の窃盗罪に問われるマヨナラがおおむね晩春から真夏に咲くのが参考になるのであれば五―六月が考えられる。最新の世相や季節感を盛り込むのは献呈文学の本領発揮であるし、104番が六―七月頃の再会を示唆していたのともほぼ符合する。花を君の肌や髪の香りや色を盗んだと叱りつけるのは本物になかなか会えない苛立ちを遠まわしに言ったわけだが、唯このソネットにはそれで済ませるには不可解な箇所がある。それは白と赤のバラに触れた後、それぞれの色を盗んだという「第三のバラ」が登場することである。このバラはさらに君の吐息（breath）も盗みとるのだが、それらの罪で「花の盛りに、復讐に燃えたcankerに食い荒らされて死んだ」（13行）という。花の盛りの白と赤を混ぜたバラといえば、リスリを考えるのが順当である。しかしそれが復讐で虫に食い殺されたとなると穏やかではない。いくら会えないのが不満でもここま

で言う手はないし、そんな意図も必要も庇護詩人には全くない。いやまさに正反対の思いがあるからこそ塔に詩を献呈してきたのではないか。そこで改めて読み直すと、盗みに関わる語が延べ七回も使用されているが（thief, steal, stol'n, robb'ry, theft）、この拘泥は友に会えない苛立ちを仄めかすだけにしては少々くどい。sweet thief（2行）というと、例えば40番で情人を寝取った青年をgentle thiefと呼んだことがまず思い出されるのだが、しかし他方で君という大事な宝を鍵かけて蔵っておきたいという48番では、君を塔に監禁した側が泥棒扱いされていた。ここは後者の流れを汲んでいるのではないか。その観点からだと、問題の13行前後もそれなりの見通しが立たないでもない。結論から言えば、第三のバラとはエリザベスである。ではそれが白と赤のバラから色を盗んだとは、まずは塔にリスリを（家族や友人から盗んで）送って、その若さを奪ったことを含意しよう。116番の「ばら色の（rosy）唇や頬が〈時〉の振りおろす湾曲した時の大鎌の内側に入ろうとも」、19番の「ものを貪り食う時が大地にその愛しい子供たちを貪り食わせようようとも」、いやむしろ同じソネットの「年老いた〈時〉」が「わが愛する者の美しい額に古臭いペンで皺を入れる」というやや定型化した表現の変奏なのである。すると「バラは棘の上で恐れ戦いていた」（8行）というもう一つ不可解な箇所も見当がついてくる。これは女王下の獄中にある友の危うい立場を語っていたのだと思われる。第三のバラが色の他に「君の吐息（breath＝生命）」も盗みに加えたとは、女王が彼の生殺与奪の権を握ったことを強調したのだろう。だが彼女はついに死んだ。自然死であろうが、それを「復讐に燃えたcanker云々」としたのは、まずリスリの立場からは天罰が下ったと言いたいところだからである。だがこの表現はさらにあの同時代の悲劇の「腐敗した」王妃の死に方に一脈通じている。cankerは害虫の他に腐敗、潰瘍、病根などの意味があり、史実と虚構を区別しないで言えばこの真の仇の死にはどれも似つかわしい。125番の「あっちに行け、偽証の密告者め」、『フェニックス』における「この一座にお前は近づくな」や最後の復讐の呼

びかけ（let…repaire）を、ここで思いだしても見当違いではないだろう。

サザンプトンとの友情はシェイクスピアにとって一六〇〇年頃には危殆に瀕していた。『ソネット集』の87～96番はおそらくその少し前の腰低く出た縁切状である。ところがそれは一六〇一年二月八日における友の運命の急変に遭遇して新しく蘇った。友の身を案じる詩人の思いがきわめて真摯であることを疑う理由はなく、塔へのソネットは当時の献呈一作いくらという売買関係にはとうてい帰しがたい友愛の情から生れた作だとわれわれは考える。ただ口は重宝だから、老い先短いエリザベスがいつまで君臨するのか考えるとここは思案のしどころで、やがて復権するだろう伯爵との仲をつなぐのも得策という見方はあるだろう。実際出獄した彼には多くの詩が献げられ、F・ベーコンも抜かりなく、これで小生もようやく閣下の献身的な召使いであることを安全に表沙汰にできるようになりましたという手紙を書く。[吾] シェイクスピアのソネットがその種のものでないことは後述に譲って、では肝心のリスリはどんな気持で一連の書簡詩を受けとっていたのかというと、どうも抜きがたい不信を抱いていたようなのである。それも無理はない。基本的に彼は女王に憎まれ通しだったといっても過言ではない。一五九二年のオックスフォード巡幸の随身に選ばれたが、バーリーの孫との縁談を蹴ったのが祟ったのか以降格別の引き立てに預かったことはなく、しかも女官との秘密結婚というおまけまで付けた。これは多分アイルランド遠征の都合でだろうが一月の入獄で済んだものの、エセックスが今や親戚の彼を馬匹長官に任じると女王は断固として拒否した。つまり彼は女王下では幸運を望めなかったのだ。エセックスに人生を賭けざるをえなかったわけだが、それが裏目に出て仲間は処刑、自分も風前の灯だったのを危うく一命取り留めた。しかしだからといって女王のご慈悲に感謝したとは思えない。『ヴェロナの二紳士』『終わりよければ』を通してみる限り、このタルクイニウス王子の人物像は逆恨みする身勝手なお坊ちゃまタイプなのである。その上逆境に突き落とされて死の淵を渡り囚人として二年以上

世の嫌な面を見せ付けられたのだから、そうとう気難しい中年男が娑婆に戻ってきたのではあるまいか。それに対してシェイクスピアは詩人・劇作家として名声を博し世の大道を闊歩している（と囚人には見える）。しかもついその一月にも憎い女王のお気に入りとして『十二夜』の御前公演をしている。神経を逆撫でされた彼には、僻み根性から折角の忠実な友が時には敵側の一人に映っていたのではないか。心を込めたソネット献呈も、二股かけた如才ない世渡りと疑い深い目を向ける折があったかもしれない。ソネット作者が六～七月頃まで、夢にまで見たと歌った友に会えなかったことに理由があるとすれば、その辺に探れそうである。

しかしリスリが女王下で獄舎に繋がれていたことは、外国から来た次期王にはそれだけで良い印象を与えるだろう。前王の不興者には自分への忠誠を期待できる。しかもジェームズはエセックスの盟友だった。そのエセックスの弟分のリスリは釈放後すぐにサザンプトン伯の復位を認められ、最高の栄誉ガーター勲章を授与され、ワイト島総督に任じられた。長い暗闇から一転して日当たりの良い場所でわが世の春を謳歌したことになるが、しかしストラッドフォードの紳士に対する不信や不満は、一種の八ツ当りかもしれないが、消えなかったのではあるまいか。というのもおそらく釈放以降に、十にあまる弁明ソネットとでも呼ぶべき連作が書かれている。既に取り上げた110番の、やむなく道化師となって君の大切な友情を裏切ったが、それは終った、君の清純な胸に私を受け入れてくれたまえ、111番の、私を憐れんでくれ、私が君を傷つけたのは運命の女神が悪いからだ、私のためにあの女神を叱ってくれ、は共にその顕著な例である。さらに112番の、「君の愛と哀れみで私の受けた世間の中傷」を癒してくれ、「君こそ私の世界の全て」であり、君以外は何も存在しないのも同然なので、「わが恥辱も賞賛も君の口から聞こうと懸命の努力をしなければならない云々」も、繰返し君こそわが全てという信義を強調することで、相手の不機嫌を解きほぐそうとしている。しかし当時のシェイクスピアが世間からどんな中傷を受けたというのか。こ

の「世間の中傷（vulgar scandal）」とはどうやらリスリ自身のscandal（憤慨）の婉曲表現であって、するとこれも君が塔で辛い目に遭っている間、私は君の敵から引き立てに預かったがそれは仕事なのだから怒らないでほしいという意味を込めていたのではあるまいか。他に114～121番、124番もこのグループに数えられる。例えば115番だが、昔君をこれ以上愛することはできまいと言ったが、あれは嘘を吐いたのだと始まるので、前言を翻したのかと意外に思うが、反対に「この上ない愛の炎が後になってもっと明るく燃え熾ろう」とはその頃は思いもしなかったからなのだ、と言葉巧みに弥増す愛の信義を訴える。依然として憮然たる面持ちのパトロンの顔がこの向うに浮かんできそうである。117番は110番に近い発想で、「こう私を責めてくれ、君への大いなる恩義に報いるべきなのに疎かにしたと。あらゆる絆が毎日毎日私を結びつけるこの上なく大切な君の愛に応えるのを忘れたと」（1～4行）と自分の非をあげて改めて汗顔のていで平謝りする。「君への大いなる恩義」とは、千ポンドではないにしても多額の援助と口利きで宮内大臣一座の旗揚げに参加できたことや紋章の公認などの後楯を指すのかと推測する。さらにおのが罪状として、「よく知らない輩と交際して、君が高値で買い取った権利を時に上げたこと」（6行）を挙げるが、これはまさにこうした支援への感謝を言葉を変えて述べたものであろう。さらに「どんな風にも私は帆を挙げて」君に背を向けたと自分を責めるので、よほど多くの人間と大切な友を裏切ったのかと思えるが、しかしそれは言葉の綾で実はすべてはほぼ前女王一人に帰するのかもしれない。エセックス派をはめたセシル一派も憎いが、ひとまず助命嘆願に力添えしたセシルより、死ぬまで監禁を解かなかった―そして友人たちを殺害した―彼女こそ最もリスリの恨みを買っていただろう。実はそれはこの第六行にも読み取れる。詩人は「君が高値で買い取った権利」を「時」に与えたと前非を悔いるが、この時とは115番116番などの大文字や小文字のtimeと照らし合わせれば、111番（や124番）の運命の女神と同じ人物を指示対象に持つと考えられる。なおこのソネットにはこ

れまで詩行の向うに透かし見るだけだったパトロンの渋面が珍しく表面に現れてくる、「私を君のしかめ面の届く範囲に連れてゆきたまえ」（11行）と。「でも烈しい憎しみの内に私を射るのは勘弁してくれ」と続くのはお道化の下に本心を卒直に述べている。ところが宥めても賺しても哀願しても開き直っても、前女王の贔屓役者への面白からぬ思いは軟化しなかったようだ。シェイクスピアは八歳下の貴公子の扱いをかなり心得ていたと思えるが、十をこえる弁明ソネットが書かれたところを見ると、苦渋を嘗めて出獄した中年男にそれまでのやり方は通じなくなっていた。117番は、私の心変わりはじつは「君の愛」がどれだけ本物か試しただけのこと、と軽口を利いて終るが、押してだめなら引いてみなという戦術転換であろうか。以降この路線が三つ続く。118番は、愛をまず美食道として、「私は決して食べ飽きることなどない君の美味なる味〔＝決して飽きない君の優しさ〕に腹くちて、苦いソースで食事をピリッとさせたまでのこと」（5～6行）と心変わりに深い意味はないと述べ、他方でわざと病気になる人間もいるが私もその口、「幸福に倦んで」（7行）おかげで本物の病気になったというのも、一工夫こらした弁明である。119番は禍を転じて福となす論法で、「良いものは悪いもののお陰で一層良くなり、壊れた愛も新たに建て直せば、より素晴らしい、より力強い、はるかに偉大なものになる」（10～12行）と相手の咎める浮気の積極的な意義を唱える。[五四] しかし効き目なしと見たのか、次の120番では、以前君につれない仕打ちを受けて地獄の思いをしたけれど、それだけに君の辛さがよく判ると同情するが、要はこれでおあいこではないかという駆引きである、「私の罪が君の罪をあがなう、君の罪も私の罪をあがなわねば」（14行）。相手の旧悪の傷を突いて頑なな不興を和らげようとしたのだ。crime（8行）とかtrespass（13行）とまでいうのだから、いわゆるライバル詩人に絡む確執ではなく、やはり十年以上前のダークレディを寝取った件が問題になっていよう。あの時リスリは後悔という「軟膏」で詩人の傷を癒そうとしたが（34番）、今度は詩人がそれを差し出す番になったわけだ。「傷ついた

胸を癒す慎ましい軟膏」（120番12行）とは、一連の弁明ソネットを指しているのだろう。

124番は正面切った直截な愛の断言である。すでに116番で、心の結婚である真の愛は周りの影響は一切受けない、嵐にも揺るがず、「バラ色の唇と頬が〈時〉の湾曲した大鎌に刈り取られようとも」、「〈時〉の道化」とはならない、「短い時間や週」の動きに躓かず最後の審判まで変わることがない、と大見得切って愛の不滅を歌ったが、いわばその焼き直しとも言える。〈時〉の大鎌にバラ色の唇と頬が損なわれたとは、リスリがあたら二年の青春を塔で無為に費やしたことだが、したがってこの〈時〉もあの人物の一種の暗号名であることはもはや言うまでもない。すると「〈時〉の道化」とは、110番でまだらの道化服を着用させ、111番で〈運命の女神〉に自分の責を転嫁したシェイクスピア自身かと思いそうだが、今度はおそらく女王に忠実な、つまりは言いなりの反エセックス派の要人たちへの当て擦りである。しかし124番は116番の変奏であると同時に、直接には123番で〈時〉に向かって、お前の大鎌に逆らって愛の信義を貫くと言明したのを承けその延長として、私の愛は「stateの子」ではない、「時」に好き勝手に愛され憎まれる、「運命の女神の私生児」ではなく、どんな成行きにも揺るがない場所に築かれている（1〜5行）と述べる。このstateは濃く国家の意味を帯びる。この愛が、「短く区切られた時間の貸借契約で動くような政策（…）など怖れない」（9〜10行）とは、昨日の寵児が今日は獄につながれる浮沈の激しい宮廷の勢力関係を背景に、それとは違って、そしてその煽りを受けて君が「時」から不興を蒙ったからといって、わが愛に何の変わりもないという5行目の繰り返しである。「運命の女神の私生児」とは、まずはあの至高者の意を迎えんとひしめく節操なき廷臣たちを匂わせているが、同時にエリザベス自身への当てつけになっている。彼女はヘンリー八世の二番目の妻アン・ブリーンの長女であるが、彼女の誕生によって男子出生の悲願を裏切られた王は妻を不義の名目で処刑し、長くこの娘を王女として承認しなかった。つまり彼女こそ「私生児として父なし子」になる

ところだったのだ。ところで、詩人は君への愛を自画自賛して、「それは権力者の笑みにも（in smiling pomp）動ぜず、[五五]人を奴隷のように撲つ（thralled）不興の一撃にも屈しない」（6～7行）とも述べていたが、[五六]これがホレーショに対するハムレットの褒め言葉、「君は（…）〈運命の女神〉に叩かれても褒美を貰っても同じ感謝の念で受け入れてきた」（III-2）とか、「〈運命の女神〉の指が好みの音をだす笛ではない」（同）を思わせるのは偶然なのだろうか。ここでも弁明を続けていた可能性を考慮する必要がある。

しかしこのくどいまでの言い訳、前に変わらぬ愛情の誓いも、結局功を奏さなかった。ジェームズの世になって、その寵臣の一人と国王一座の幹部とはなにかと出会う折があったろう。記録に残るのは、一六〇四年スペイン使節を迎えて平和交渉が締結した時、接待幹事を―例のW・ハーバートと―仰せつかった伯爵は、余興の劇を演じた一座の役者と少なくとも同じ場所で仕事をしたわけだし、[五七]その年のクリスマスにはサザンプトン邸で『恋の骨折り損』の上演が予定されている。[五八]そこには二人の古くからの付き合いが生きているように感じられる。しかし二人の仲は徐々に疎遠になっていったはずである。そしてそれは弁明ソネットが透かし見せるリスリの頑なさだけではなく、シェイクスピアの側にもそれなりの理由がある。われわれの推測では一六〇〇年一月にW. S.が『愛』という詩集を出版登録したのは、身勝手な友に嫌気が差してきた詩人がソネット献呈は止めるつもりでいたからである。ところが友が叛逆罪で死刑宣告を受けるや愛想尽かしは吹きとんで、長年の交友に発する強い愛情が燃え上がった。こうして『フェニクスと雉鳩』、一連の塔への献呈ソネットが執筆された。しかしこれが逆境の友への憐憫に発するなら、今や釈放されて爵位を取り戻し、王から様々な贈り物を授かる寵臣に対して、もはや言うべき言葉は失われていた。新たな詩作の動機は消滅していた。こうして二人は一六〇〇年以前の友情の倦怠期に逆戻りしていたことになる。シェイクスピアが年下の美青年と稚児愛的関係にあったという見解に根拠があるならこの愛も、せめて相

手が猜疑心を捨ててくれればともかく、今や気難しい中年男に変貌した友に対しては弱まっていただろう。他方、リスリよりはるかに疑りぶかい国王を一座の新パトロンとする劇作家としても、旧友の後楯をどうしても必要とする状況ではとうの昔になくなっていた。多忙な仕事の合間を縫って信義のソネットを送り、それで余り嬉しがらない人間と友情を結び直そうとする努力は、気がつけば無意味になっていたのではないか。107番を一六〇三年の六～七月頃の再会、123, 125番を一六〇四年三月十五日における新王の市内行進に関わる作とすれば、ソネットの配列が幾つかの例外を除けば意外なほど年代順と思えるので、以上の弁明ソネットの制作時期は大まかには一六〇四年以内に収まるだろう。[五九] いくら恩義を蒙っても、誠意は尽くしたのだし、脈のない卑屈な弁明を一年も繰返すとは思えない。それでも十以上それを献呈したのは、サザンプトンの返り咲きに世の詩人たちが新たな金蔓を見出したのとは全く類を異にする、内面的な理由があった。すでにその一端を垣間見てきたわけだが、しかしその心情がより全体的に見て取れるのはなによりあの問題の悲劇においてなのである。

いわゆるQの出版の事情を検討することもその点で無駄ではない。一六〇〇年に出版登録されたJ. D. の*Amours*という題が、そこに付加されたW. S. の「他のソネット」と主客逆転して、実際はミアズの「砂糖の」にふさわしい後者のmy sweet loveへの賛歌に照準を合わせているのではないかという見解を述べたが、たしかにJ. D. ことジョン・デイヴィス・オブ・ハートフォードにはその後こうした題の詩集は刊行されていない。いわば当代一流の詩人・劇作家が新人のデビュー作（になるはずだった）に自作を付加しようとしたのには、[六〇] チェスター『愛の殉教者』（1601）の付録詩に通じる検閲への配慮があったと思われる。それはまず、Ｐｈ・シドニー、Ｊ・ダン、ローリーなどが詩の刊行を潔しとしなかったのに通じる、私的な事情を赤裸々にすることへの憚りであろう。しかし献呈が再開されたために、この出版は見合せられたが、弁明ソネットを最後に次の献呈期が終わると一纏まりの

ものとして刊行しても差し支えない状態に戻っていた。まだ版を重ねつづける『ヴィーナス』の作者の新作ともなれば出版人たちは跳びついてきただろう。しかし今回は出版を躊躇する別の理由が加わっていた。塔の囚人への同情と慰撫は、それが真摯であるほど謀叛の正当化へと踏み込まざるをえないからである。その上で『ソネット集』の出版登録が一六〇九年五月二〇日で、同年に刊行されたこと(六)に注意を払いたい。詩集の性格を考える上でこの時期にはわけがありそうだからである。一六〇八年、因縁の『リチャード二世』のQ第四版が、ついに降位の場面を削除せずに世に出た。これは如実に一時代の終焉を告げている。エリザベスの王位継承に絡むエセックスの謀叛という世を震撼させた出来事がもはや影うすく過去のかなたに遠ざかっていなければ、例えば一六〇四～五年『フィロータス』と『セジェイナス』の作者がエセックス正当化の疑いでそれぞれ召喚され、またこの一六〇八年に『東行きだよ』の合作者の一人マーストンが、今は散逸したらしいある劇で国王を侮辱した廉で投獄されている時に、この無削除版は考えられない。しかもそれは何の問題も引き起こさなかった。つまりエセックスのタブーは終っていた、位人臣を極めるセシルがその件はもはや大目に見ても差し障りないと判断した、ということである。この情勢の変化が翌年の『ソネット集』刊行へと踏み切らせたのではあるまいか。それに加えて、作者個人の内的理由もあった。そろそろ引退を考えていたからである。タブー消滅の機を逃さなかったのは、引退を間近にして青春の美しい友情の思い出をささやかな記念碑として残しておきたいという、おそらく九年前と同じ願いを強くしていたのだろう。後から見れば決定的な引退は、『ヘンリー八世』、フレッチャーとの合作『血縁の二公子』を書いた一六一三年が妥当だが、しかし一六一〇年には第一線を退き、故郷のストラッドフォードを主な居住地にしていたようだ。だとすればその思いは既に一六〇八年には萌している。当時ニュー・プレイスを借りて住んでいたのは従弟のトマス・グリーンだが、彼は一六〇九年九月九日、所有者の許可で「思いがけずそこにもう一年留まっていい」ことに

なったというメモを残している。[六三] これはアクリッグも言うように、故郷に引きこもる意図があったことを告げていよう。[六四] おそらく前年の賃貸借更新時にでも一年後の引渡しの話が出たのだ。というのもこの年の九月九日に母の故メアリ・シェイクスピアの埋葬があり、[六四] その席で当然顔を合わせたはずだからである。この年は疫病で夏から暮れまで劇場は閉まっていたし、また八月一七日にストラッドフォードの裁判所に出頭する用事があったことからも、彼が葬儀に出席したことは充分推察がつく。[六五] それから一〇ヶ月後に『ソネット集』の登録があり、まもなく刊行された、という流れを見ると引退前に青春の思い出を残したいという作者の気持が見えてくるようである。一五九二年以来の、愛ないし同性愛的な友情、情人を間に挟んでの痴情の縺れ、非難、赦し、女漁りに溺れる友への難詰、嫌気が差して縁を切りかけた矢先の友の不幸、塔の囚人への友情の再燃、思いがけぬ心の行き違い、という紆余曲折の青年との交友の一二～三年間は、シェイクスピアにとっては文運が開けてからの盛りの半生とほぼ重なっており、それだけにひとしお感慨も深かったはずである。といっても今なら四四歳の働き盛りであるが、五一～二歳で死ぬのだから何か持病でもあったのかその辺りは不思議なほど不明である。しかし当時の芝居人としてこれは引退しておかしくない年齢ではある。[六六] 長女スザンナは一六〇七年ケンブリッジ出の医師と結婚し、一六〇八年には初孫が誕生したが（二月二一日に洗礼）、その夏の終わりに六八歳の母を失ったのである。これは人生設計において節目になろうし、それにもし妻に信頼を置いてなければ、親心からだけでなく財産管理上からも故郷に戻りたくなろう。この年はまた、国王一座が冬用に室内劇場のブラックフライアーズ座を借り、経営者の一人となった劇作家の収入はさらに増えた。功成り名遂げた詩人・演劇人（国王一座の）として、また左うちわの gentleman として故郷で名士の生活を送る料簡が生れてもおかしくはない。『マクベス』（一六〇六年）において頂点に達した感のある彼の創作意欲も、『アテネのタイモン』（一六〇七年）、『コリオレイナス』（一六〇八年）になると緊張感が緩んだ

ように構成が散漫で、翳りが感じられる。とはいえ他方で『ペリクレーズ』（一六〇八年）、『シンベリン』（一六〇九年）という新しい主題を掘り起こしかけていたのだから、一概に言えることではないが、T・グリーンのメモやその後のストラッドフォード暮しから、この頃が引退に向かって生活の転機を画したのは否定しがたいだろう。それに一六〇三年の『ハムレット』第一版以降、一六〇四～五年の第二版を除くと一六〇八年の『リア王』まで五年ほど出版の空白があったのに、それが一六〇九年には立続けに旧作『トロイラス』、新作『ペリクリーズ』、そこに『リチャード二世』の無削除版、そしてこの『ソネット集』の刊行が集中するのだから、引退前の身辺整理という印象は拭えず、自ずから最後の詩集にこもる上掲の意味を示唆していよう。その点で興味深いのは『リア王』の表紙における作者の扱いである。シェイクスピアの名が作者として初めて表紙に掲げられたのは一五九八年の『恋の骨折り損』においてであるが、その活字の大きさは中段のタイトルの九分の一しかなく、しかも「楽しい（…）喜劇」という上段の謳い文句はタイトルの三倍なのだから、中段末尾の彼の名はなきが如くに小さい。この扱いは一六〇五年の『ハムレット』第二版でもそう変わりはなく、芝居本のステータスの問題かと思える。ところが『リア王』では関係が逆転する。まず上段に作者名が特筆大書きされ、次に三分の一の寸法で、「彼によるリア王とその三人の娘の生と死の偽りなき年代記」という長いタイトルが来るが、中でも肝心のKing Lear自体はさらに小さく、作者名の六分の一位であろう。この扱いは作者の名声がよほど確立していなければ考えられないが、しかしたとえそうでも作者名をこれ程大々的に銘打つことが度々あるとも思えない。仲間内に作者の引退が知られていて、業界の功労者に花道を用意しようとしたのではないだろうか。おそらく翌年の『ソネット集』もその一環である。表紙のレイアウトは『リア王』に準じ、上段に大きく作者名が掲げられ、その下に約三分の一の活字でタイトルが続く。[六七] こうした事情を斟酌すると、この詩集は引退者がきわめて私的な青春の思い出を自ら豪語する不滅の記念碑と

して、しかし置きみやげのようにそっと残していこうとしたのではあるまいか。パトロンの名を今回は頭文字（それも逆転した）だけに留めたのも、また献辞を作者ではなく出版人に（おそらく例外的に）書かせたのも、まずはサザンプトンに迷惑を及ぼさない配慮であろうが、しかし詩人としてはそれで充分だったに違いない。なおリスリはジェームズの寵臣ではあるが、その後重要な政治ポストに恵まれず、エリザベス下の不運を挽回しようと奔走に明け暮れていたかもしれない。であれば、敵つまりは同じポストを狙う廷臣たちに付け入る隙を見せたくない。陰謀渦巻く宮廷では—後のセシルのように—針の一穴が墓穴になりかねない。塔の献呈において「権力に固く舌を縛られて」、「物言わぬ」ソネットを献呈した詩人は、刊行においてもその時に劣らぬ慎重さを求められたはずである。奥歯にものの挟まった一筋縄ではいかない判じものにならざるを得ないが、しかしそれにしても『ソネット集』が全くと言っていい程反響がなかったのはそのためなのだろうか？

当時の知識人にとっていわば当代最高の詩人の待ちに待った新作がいよいよ一五年ぶりに世に出たのだから、宮廷でも巷間でも大評判となり、劇作家としての盛名と相俟って本屋の前には行列ぐらいできたのではと想像したくなる。ところがそうではなかった。それも作者にふさわしい反響どころか、反応の痕跡さえないといっても過言ではない。例えばこの年に出た『トロイラス』は年内に再版されるが、その折にシェイクスピアの一ファン（名は不詳）が彼の喜劇の面白さを論じ、『ヴィーナス』はその本領を発揮したものと褒めたが、それと重なるところのある『ソネット集』に何ら言及がないのはたんに時期にずれでもあったからだけなのか。[六八] T・ヘイウッドはシェイクスピアの息の掛かった劇作家だが、彼はジャガードが昔一五九八年頃『情熱の巡礼者』に四篇のソネットを断りなく掲載して出版したのを作者は怒っていたと一六一二年に言明している。ところがその内二作を含む一五二篇の『ソネット集』のことは何も述べていない。しかも一六三五年になっても「蜜のように甘いシェイクスピアの心酔

わせる葦笛は歓喜や情熱を掻き立てるが、それは彼ならではのもの」と言っているのは、一六〇一年以降の悲嘆、会えない苦痛、諦観、絶望など苦さに満ちたソネットを多数載せたこの最後の詩集の存在を知らないからではないか。[六九]一六〇〇年登録の詩集『愛』の主要作者ジョン・デーヴィスは一六一〇年に、「イギリスのテレンティウス、ウィル・シェイクスピアに」捧げる詩を書いて、貴方は国王一座の一員であるばかりか斯界の王であったと功績を讃える。引退する先輩詩人へのはなむけの言葉と思えるが、もし彼が前年のQを知っていたら、十年前の幻の共同詩集との関連に気づいてせめて一言あってしかるべきではあるまいか。[七〇]しかも彼は『ミクロコスモス』（一六〇三年）の序文でサザンプトンに言及し、巻末には釈放祝いのソネットを載せているのだから、事情に通じていた方なのである。前の二詩集に言及したG・ハーヴェイも、砂糖のソネットと評したミアズもまだまだ健在だったが、彼らの証言は残されていない。『憂鬱の解剖』の著者ロバート・バートン（一五七七～一六四〇）は熱狂的な本の収集家であるが、死後その蔵書二千冊がボドリー図書館に遺贈されたが、そこには『ヴィーナス』『ルクレティア』はあってもこの詩集は含まれていない。[七一]劇だけ集めたフォリオ版全集へのB・ジョンソンの序文でそれが問題にならないのはともかくとしても、E・K・チェンバーズが収集した資料などに依拠するかぎり、三〇年を経た一六四〇年にジョン・ベンソンがその独自な再編纂版を出して書簡体序文を寄せるまでは、それは謎めいた沈黙に包まれていたのだ。[七二]その間Qが再版された様子はない。K・ダンカン＝ジョーンズも、初期の二詩集が直ぐに大勢の熱狂的な読者を克ちえ、「幾つかの仄めかし、引用、模倣」を誘発したこととの対照的な相違に驚き、この詩の熱心な読者であるはずのジョン・ダンも、一六三二年のフォリオ第二版に推薦のソネットを寄せたミルトンもこの詩集を読んだ形跡がないと主張する。なおこのアーデン版編者によれば、「一七世紀で唯一」それを読んだことが明らかなのは『ブレノラルト』の作者J・サックリングぐらいで、この悲劇にはソネット33, 99, 104, 140及び付録詩『恋人の嘆き』

との間に明白な照応があると言う。[七三] しかしこれは一六四〇年頃の作品であり、もう一人の確実な読者であるジョン・ベンソンの再刊と同じ頃であるからサックリングが繙いたのがこの再刊なのか元のQ版なのか判定しがたく、いずれにしても同時代人の沈黙に変わりはない。この不可解な無反応の原因は何なのだろうか。幾つか解明の試みがあるが、いずれも推測の域を出ないことはいうまでもない。一つは、内容が不出来かつ皆目雲を掴むようなので読者は期待を裏切られた、という失望説である。[七四] しかしそれならそれで沈黙ではなく、文豪にあるまじき劣悪な作を物したとむしろ格好の話題を提供し喧々諤々の大騒ぎを惹き起こすのではないか。別の見解は、「発禁処分」を受けたためという説である。[七五] しかしこれも以上の無反響には結びつかない。たしかに発禁本については人前では話題にするのを慎もうが私的な会話や書簡ではどうだろうか。それに既に売れたものまで回収できないし、人の口に戸は立てられない。なにかの痕跡が残ってもよさそうだ。たまたま記録が逸失したといわれればそれまでだが、しかし処分を受けた作者はさらに別の制裁（召喚、拷問、入獄ないし処刑）を受けるはずなのに、そうした記録も残されていない。そもそもなぜ発禁になったのか、論者はその理由さえ明らかにしていない。それに劇界の大物であり、B・ジョンソンなどと違って一度も当局に睨まれたことのない「温和なシェイクスピア」の待望久しい新詩集が発禁となれば、その方が返って反響を呼びそうである。こう検討してくると唯一考えられる沈黙の原因は、『ソネット集』は確かに出版されたがしかし読者の手には渡らなかった、その出版の事実さえ知らされていなかった、ということになるのではないか。といってもそれは具体的にはどんな状況なのか。三〇年間の沈黙を思えば、一体ベンソンはどういう経路で一六〇九年版を入手したのかということ自体が謎である。ちなみに愛読された『ヴィーナス』は一六〇二年までに九版、作者の死後に十版を重ね、一回最低五百部としても五千冊は世に出回ったが、初版は一部しか現存しないのに対して、Qは一三部がきわめて良好な保存状態で発見されている。この違いは消費の

有無、つまり読まれたかどうかによるのではないか。要するに店頭に出ることなく、ひょっとするとどこかに一括して蔵われていたのかもしれない。だがそれではT・ソープは丸損で、出版する必要もなかったことになるが、この異様な事態の原因としてはパトロンの都合が考えられる。見る者が見れば私生活が丸見えの詩集の公刊に拘泥し、しかもこれほどの無理を通せるのは唯一の読者にして主人公である版権者サザンプトンを措いて他にいないだろう。あえて想像すれば、一旦は出版に同意したのだが、しかし刷り上った『ソネット集』を手に取ると、二年余の牢獄暮しで世間の怖さが身に沁みた彼の目には内容からか外的な情勢（判断）の変化によるのか、伯爵の立場上不適切な箇所があって（それが同性愛なのか、痴情沙汰なのか、過敏になっていたはずのエセックス関連なのか、例えば66番の露骨な政治風刺なのか、あるいは今は夫人に納まったE・ヴァーノンが自分を卑劣な女誑しに仕立てた付録の『恋人の嘆き』が気に喰わないのか、むろん判じがたい）、結局販売に首を縦に振らなかった。といっても一喝して済むことではなく、その場合は金銭的解決がどうしても必要になる。位が高いほど気前の良さが求められるから、印刷したソープにはその費用を、本屋のW・アスプリには儲けそこねた売値との差額を賠償するのは勿論、さらに口止め料も支払ったのではないか（とすればそれは確かに守られた）。その額を試算すると、部数五百とし、単価は不明だがアレンの帳簿の五ペンスを参考にやや高めの八ペンスと仮定しても全体を買い上げて二十ポンドを大分下回る。サザンプトンは領地収入で年千ポンド、スイート・ワイン専売権で二千ポンド近く、さらにワイト島総督としての収入も六千クラウン（千五百ポンド）あるから、この出費はたいした負担ではない。それを全部蔵いこんだのか、それとも信用の置ける、つまりは詩の原稿を廻し読みするようなごく一部の友人・知人には贈呈したのか。ジョージ・ハーバードは一六〇九年ケンブリッジに入学し、翌年始め母に二篇のソネットを贈るが、そこには詩人たちはなぜ愛の歌ばかり書きたがるのかと不満を述べる一方で、シェイクスピアのソネットを思わせ

る言葉遣いがあるが、[六]これは偶然なのだろうか。彼は『ソネット集』のパトロン、W. H.の候補に挙げられるW・ハーバードの従弟、つまりPh・シドニーの妹で文学的パトロンのペンブルック夫人の甥だから、その縁でQを手に取る機会があったのだろうか。夫人の庇護者にはS・ダニエルやJ・デーヴィス・オブ・ヒアフォードがおり、兄との関連ではエセックス側である。ただし『ソネット集』が出る以前からその一部はジャガードの『恋の巡礼者』に載り、またそれが仲間内で回覧されているのはミアズも知っていたのだから、これだけでは愛という主題に異論を立てるケンブリッジ大学生がQを読んだ証拠にはならない。なおこのJ・デーヴィスが多分それを知らないことはすでに述べた。シェイクスピアの友人トーマス・ラッセル（1570-1634）は、最初の妻が『アリサ』の作者として名を使われたヘンリー・ウイロビと縁戚だが、後に裕福な未亡人と再婚する。その相手の連れ子レオナード・ディッグス（1588-1635）はシェイクスピアの熱烈な愛読者で、フォリオ第一版に礼賛詩を二作寄稿しているが、ダンカン＝ジョーンズによれば彼もQを読んでいない。[七]となるとこの詩集は若干の関係者以外はどうやら誰にも知られなかったと考えざるをえない。

だが作者は詩集が印刷され後に残ればそれで良かったのではないか。暴君の紋章や真鍮の墓さえ消え去るのだから、一輪の花のようなかよわい美がどうして横暴な時の力に打ち克てようか、だが君は永遠に残る、愛する者よ、私の詩の中で、奇跡的に、と歌ったシェイクスピアの友愛の念にはむしろこの方が似つかわしい。「夏の一日」に譬えられた「君の記念碑」を樹立する願いは、利害の錯綜する同時代より後世に読者を持つことで真に成就しよう。そして今のところ詩人の不遜な約束は守られている。

注

(一) *Sonnets* のテクストは主として、Katherine Duncun-Jones 版、The Arden Shakespeare, 1997 に拠り、適宜 G. Blakemore Evans 版、The New Cambridge Shakespeare, 1996, John Kerrigan 版、Penguin Books, 2005（1986）などを、また一六〇九年版（Q）に関してはS. Booth、*The Sonnets*、1977、Robert Giroux, *The Book Known As Q*, 1982 を参照した。但し大文字、イタリック体は一六〇九年版に依拠した。解釈の出典は随時示す。また訳解については、二種の仏訳（以下逐次出典をあげる）の他に、今回も高松雄一訳（岩波文庫、一九八六年）を参照した。

(二) エセックス処刑後、宮廷内は隣国ジェームズ六世を王位継承者とすることで一致していたようだ。エセックスを介していわば敵側だったR・セシルが秘かにその画策に乗り出したのだから、是が非にも英国の王冠を手に入れようとしていたジェームズには勿怪の幸いであり、次期王の指名を最後までしなかった女王もその辺を落としどころと見ていたのか、宰相の奔走を黙認したといわれる。それを察知して勝ち馬に乗ろうと、ハワード、ノーサンバーランドなどもそれぞれジェームズと内通していた。それは王位交代という宮廷人にとって危険な時期を乗り切るため、そしてそれ以上により高い栄誉を克ちえるために必要な心得である。女王側近の宮内大臣も、女王の死が確認されるや危険を冒して弟を三日ぶっ通しの早駆けでジェームズに通報させた位だから、例外ではない。唯この宮廷内の暗黙の同意は民衆には必ずしも伝わらず、疑心暗鬼な不安は world wide にあったのかもしれない。とすれば戦乱もなくことが運んだ時、人々は大いに安堵しただろう。その時の雰囲気についてJ・ケリガンは幾つかの例を挙げているが（*Ibid*, p315-7）、J・ダンは後の説教（一六一七年）で、三月二三日～二四日における側近の喪の涙と「ロンドンの歓喜」を追懐している。なおこれは107番の注で、ケリガンもわれわれと同じ解釈である。とはいえ何事もなかったわけではない。アラベラ・ステュワートを王位に即けようとしたコバムのメイン・プロット、カトリックの容認を求めるバイ・プロットが発覚し、逮捕者が出たが、これは即位後である。

(三) S. M. Gardiner, *History of England*, I, 1887, p.116.

(四) 英国制作『エリザベス一世』がテレビで放映されたが（ＮＨＫ、衛星、二〇〇七年二月）、エセックス処刑後の女王の頭上には、鳥の羽根を七～八本束ねた飾りが載っていた。考証を信じれば、crest が冑の羽根ばかりでなく女王の装飾にも適用可能になる。しかし他方で、五代続いたチューダー朝から新たにスコットランドを傘下に置くスチュワート朝に移行することで、「紋章」も改められたことを忘れてはならない。

(五) 107番はほぼすべて了解可能だが、12行「一方死は dull で speechless な種族を侮り、従わせる」の種族が誰なのかが引っかかる。差し当たり、死に屈しない詩人に歌われない（speechless）ので、「面白くない・活気がない・さえない（dull）」、つまりここでは死を乗り越えられない、パトロンと利害が対立する連中を総じて諷した言と理解する。

(六) これは他のソネットでも、「わが愛する者は詩の中でいつまでも若いまま生き続けよう」（19番14行）と度々繰返され、パターン化している。

(七) 前掲『英仏対訳全集』、p.882-3.

(八) 前掲アーデン版、p25. ただしこの図は、M. Wood, p.262 の凱旋門と大きく異なるが、凱旋門は七つ建てられた。

（九）A. L. Rouse, p.180.

（一〇）アーデン版、p27. S・ハリソンは建具師兼建築家で、『凱旋門』はB・ジョンソンなど三名の表敬詩と七つの版画から成る二十頁の小冊子とのこと。

（一一）G. P. V. Akrigg, *op.cit.* p.140-141.

（一二）さらに付け加えれば、リスリがヴァーノンと識り合ったのが一五九四～五年であれば、ダークレディものは献呈を憚るべき主題になっている。たしかに青年はその後も色恋に熱中したようだが、そのお相手のことで苦情を言わないにしても、詩や喜劇でヴァーノンに同情する立場をとったのは前述の通りである。

（一三）Raleigh Travelyan, *Sir Walter Raleigh*, Penguin, 2002, p.413-4. ただし入獄は一六〇五年夏のことである。なお同書によれば、ノーサンバーランドの逮捕は当人の問題ではなく、彼の執事がカトリック勢力に四千ポンドを提供したために星法院に管理責任を問われたのだが、それにしては罪が重すぎる。しかも王位継承の功臣ではないか。ジェームズは彼が二年来塔にいるローリーの友人であるばかりか、科学（当時は魔術）好きで、魔女裁判の権威である王の疑心を募らせたという。つまり裁判の判決は王次第なのであるから、エセックスの死刑判決にその取巻き連が不満を抱くのは一理あるわけだ。

（一四）A. L. Rowse, *op.cit.* p.165

（一五）G. P. V. Akrigg, *op.cit.* p.132. ンの密書（人名に暗号を用いた）は、*Correspondance of King James VI of Scotland with Sir R. Cecil and others in England.* AMS press. 1871. p.71 に掲載。

（一六）E. K. Chambers, *op.cit.* 1, p.567.

（一七）もっともこれは例えばベン・ジョンソンならそう考えただろうというだけであって、ペンブルック説のカサリーン＝ジョーンズがこの推測を立てたのは当時両者が親密な関係にあったといいたいからである（アーデン版序文、p68）。いかに親密でも献辞に用いるのは別問題であろう。とりわけペンブルックがそんな馴れ馴れしさを許すとは思えない。

（一八）W・ハーバートには「度外れな女好き」という評が残っている（前掲『英仏対訳全集』、p.744）。

（一九）われわれが参照したのは、M. Wood, *op.cit.* p.179 の図版。それに対してリスリの女性的面立ちについては、N・ヒリアードの肖像画に加えて、二〇〇二年により強い確証が得られた。この年、「数世紀来、ノートン夫人のものと信じられていた肖像画」が若き日のリスリのものと認定されたのである（P. Edmondson and S. Wells, *Shakespeare's Sonnets*, Oxford, 2004, p.76）。

（二〇）母メアリ・ブラウンの肖像画は、A. L. Rowse, p.52～3 の図版に拠る。もっともメアリ・ハーバートの一五九〇年頃の肖像画を見ると、ふっくらとしているが目や口元が息子と似ていないともいえない（M. wood, p.180）ので、断定はできないが

（二一）『シェイクスピア辞典』、研究社、同項目による。

（二二）G. Akrigg, p.153.

（二三）P. Edmondson and S. Wells, *op.cit.*, p.7.

（二四）*The Wordsworth Dictionnary*, p.489.

（二五）アーデン版編纂者は107番の月蝕について女王の死という見解を取るが、奇妙なことにW・ハーバード説に固執している。

（二六）John Kerrigan 版、p.169. ただしケリガンはそこまで言いながら、ソネットが自伝を踏まえているとしても、それは詩の鑑賞とは別問題で、伝記を参照する必要はないという自立文学論者である。

（二七）この説は K. Muir 版 *Shakespeare' Sonnets*, Union Critical Library,, 1979., p.154 および Edmondson and Wells, p.74 に紹介されている。もっとも後者に寄れば、サザンプトンの姓の発音が Rosely ではなく Wrisley であることが確定されたのは一九三七年一〇月二日（の *Time Literary Supplement* 誌上）においてである（p154, 173）。だからと言って花名のアナグラム的性格が著しく損なわれたともいえない。

（二八）K. Muir, *ibid.*, は、ソネット中のイタリック体を網羅して、おおむね固有名詞（*Saturne, Helen...*）か、充分英語化していない外来語（*Intrim, Quietus...*）などに使われているので「美のバラ」（1番2行）を beautie's *Rose* と表記したのは相手の名を織り込むつもりではないかと述べている。このソネットを冒頭に置いたのは以下の rose/Rose に影響を与える。なお最近の九〇年代の版（アーデン、新ケンブリッジ、ペンギンなど）では、一六〇九年版の大文字やイタリック体を恣意的もしくは植字工のミスと見なしてなのか、おおむね小文字に平準化する傾向があり、そこにありうる作者の意図を読むことを妨げているのは残念である。もっともこうした良識的な按配ないし改変は『ハムレット』にも見られる。

（二九）Shakespeare, *Les drames historiques et les poèmes lyriques, édité par* Pierre Messiaen, Bruges, Desché, 1948, p.1335.

（三〇）『変身物語』巻一五、岩波文庫、中村善也訳（下巻、p310以下）。

（三一）レスター、ローリーも愛人であったろうが、シェイクスピアが彼らのために弁じるとは思えないので、これは一般化による暈しの手法であろうか。

（三二）『ソネット集』の最初の一二五篇は、一～一七を除けば配列は年代順では必ずしもない。塔のソネットとみなした18, 19番は、遅くとも一五九五年以前の裏切り告発の33～36番と39～42番より順序が前に置かれている。意図的な攪乱と思われるが、他方塔釈放後と思われる97～125番はなぜか大体時間軸に沿っているようである。といってもS・バトラーのように制作年代を断定的に割り出す余裕も根拠もわれわれには欠けている。

（三三）R. Gibson 版、Cambridge, 1997, p.34. とはいえ注釈者は彼もまた、こうしたモデル探しは文学研究上正当ではない、「シェイクスピアは、一般的に言ったまでで特定の人物を考慮してはいなかっただろう。ソネットの興味や理解は、歴史上の人物と結びつくことで高下するものだろうか?」（Ibid.）と述べる。美というものが実在しており、それを物質的に（言葉、色・線、音で）表現するのが文学・芸術なのである（Ibid. p.122, 143）。差し当たり見解の違いというほかはない。

（三四）エリザベスもはらはらしたエセックスの勇敢さ、ないし向う見ずは否定しがたいが、武将として有能であったかは別問題で、アゾレス遠征に大過がなかったのは指揮下のローリーのお陰といわれるし、おそらく閣下は宮廷の華として留まるべし（つまり女王の膝下を離れるな）、とアイルランド遠征を諫止したF・ベーコンの言は正しい。そのお粗末な成果といい、何より一六〇一年の蜂起の杜撰さといい如実にそれを語る。一五九六年のカディス攻略は幸運だったが、戦利品が乏しく女王はお冠だった。

（三五）といってもエセックスの処刑は政府要人のみの立会いで非公開だった。当人が曝しものになりたくないと要求したためとも言われるが、エ

セックスびいきの民衆が興奮して騒擾を惹きおこすのをセシルたちが警戒したというのが真相に近いだろう。この叛逆者たちを収容して以来急に塔の警備は厳重になり、わざわざ見張り小屋が数箇所城壁の上に建てられ、それまで空位の塔長官にハワード一門のトーマス（後のサフォーク）が任命された。

（三六）前掲『エリザベス朝演劇と検閲』の年表に拠る。

（三七）R・セシルは「背むしで、splayed legs の病弱なる」人物と、ODNB（Oxford Dictionary Of National Biography）にも紹介されている。

（三八）アーデン版の 37 番の注では、これを文字通りにとってシェイクスピアは足が悪かったと思ってはならないと述べ、足萎えの振りをしてやろうかという 87 番がその証拠だという。結論として反対する理由はないが、辞書があれば詩は読めるという文学観が気になる。

（三九）戦う力が足萎えの支配に「阻まれる」と訳した diabled（66 番 8 行）にも「人を身体障害者にする」という意味があり、底意があるかもしれない。

（四〇）A. L. Rowse, p.153.

（四一）例えば新ケンブリッジ版。なお book は量に関係なく紙に書かれたものを広く指し、『シンベリン』では一枚の手書き文もそう呼ばれている（ペンギン版、注、p203）。なおJ・ケリガンはこの books に『ヴィーナス』『ルクレティア』も入るというが、事の当否はともかくこれは W. H. をサザンプトンと断言したに等しい。G・B・エヴァンズもその可能性を示唆するが、こうした自己矛盾を無造作に冒すのは、パトロン文学を無視しているからであろう。

（四二）14 行目の解釈は構文上強引だが、Qでは 13 行は―セミコロンではなく―カンマで終るので、その learn to read が次行の To hear へ続くと解せるが、この場合は what か何かを belongs の主語として補う必要があろう。

（四三）A. L. Rowse, p.164 向かいの図版による（画家の名は不詳）。

（四四）アーデン、新ケンブリッジ、ペリカンの諸版はこの点で一致している。

（四五）新ケンブリッジ版、p212

（四六）サザンプトンの肖像画は、ソネットに関わりのない中年以降を考慮に入れなければ、これまで言及した二十才代の二点（片や愛らしい美青年、片ややや異様に女性的）と塔の一点の他に、三〇才前後の甲冑を脇に置いた軍人姿の画像がある（Akrigg, 口絵写真）。凛々しいというより人を寄せ付けぬ厳しい高慢な表情であるが、アイルランド出征前の記念画だろうか。とするとリスリの容貌の変化は塔以前に遡り、われわれの推測を一部弱めねばならない。画家が同じなのか、塔の囚人とよく似た顔つきで、猜疑といえばこちらの方が顕著である。ただいずれも「描かれた饗宴」には該当しないだろう。サザンプトンは多くの肖像画を描かせ人に与えたといわれる。

（四七）アーデン版編纂者は概して伝記的考証に立ち入らないが、珍しくこの「わが愛する者の絵」に関して、これは「心象ではなく、具体的な図を指したと思える」（p204）と注をつけている。

（四八）ヘレンとの比較は、例えば 20 番における青年の女性的美と、アドニスは第一詩集と結びつこうが、それぞれに相手の「君」がサザンプトンであることを語っている。

（四九）J・ケリガンのみ、四行の wards, bars に関してこの意味の可能性に言及している（ペンギン版、p232）。

（五〇）因みにこの6行は、P・メシアンの仏訳では「君の自由が私に味合わせる不在の孤独」であり、翻訳としてはやむをえないが、「別離を長引かせる友への軽い非難」と評している。K・ダンカン＝ジョーンズは、「私が君から離れているので、君はその不在による自由に突けこんでいるが、この不在は私には牢獄のようなものだ」とほぼ同じように理解する。言葉を真に受ける嫌いがあるのではないか。

（五一）新ケンブリッジ版、p205

（五二）アーデン版、p304. ナッシュの *Summer's Will* は六〇頁ほどの韻文喜劇であるが、内容は確認していない。

（五三）G. Akrigg, p.137-9.

（五四）119番の前半はとりわけ難解であるが、9行から自分の非を認めて「悪いことにも利得あり」と新たな愛情の提案に入るのだから、この頃と思われる他のソネットと重ねると、エリザベスのご愛顧を得ていた言い訳のたぐいと思える。では「私の眼はそれ本来の〈領域〉(Spheres) を離れて、あの (this) 頭をおかしくさせる興奮に満ちた気晴らしに、何とまあぴったり納まってしまったことか」(7~8行) とは、簡単に言えば君の愛情に背を向けて一見華やかな宮廷で何度も芝居 (distraction) をやる羽目になってしまったが、申し訳ないという例の如くの謝罪を込めている。Spheresが大文字で始まるのも、「あの」も特定の何かを指している。その読み筋で遡ると、「わが心は、それまでこれほどの恵みにありついたことはないと思い込んだまさにその時、何とも情けない過ちを冒していたのだ」(5~6行) も同じで、至上のパトロンの愛顧で良い気になったが、それで君の愛に背くことになったという反省の弁である。「自分が勝ったと思った時、〔実は〕失ったままでいたのだ」(4行) もその板挟みの立場からの釈明である。それにしても冒頭の「内側は地獄のようにインチキなランビキで蒸留したシレーヌの涙を何とたくさん飲み干したことか」(1~2行) とは何なのか。シレーヌは女王、涙とはエセックスの死を嘆いてというところだろうか。参考までに、宮内大臣一座はエセックス処刑の前日、女王の前で『リチャード二世』を上演した。

（五五）この箇所の解釈は前掲『英仏対訳全集』p.885. を参考にした。

（五六）G. V. エヴァンズはこの thralled（奴隷にする）について、塔に閉じこめられたサザンプトンとの関係を推測しているが（新ケンブリッジ版、p.238）、にも拘らずそれ以上踏み込むのを避けている。

（五七）A. L. Rowse, p.182. ただし平和交渉の席を描いた絵にはR・セシルを筆頭にハワード一門の二人など五名の顔が見えるが、サザンプトンの姿はない。王の優遇を得たが、政治的な評価は低いのか、彼が枢密院に選ばれるのは一六二〇年になってである。

（五八）もっとも喜劇が予定通り上演されたかどうかは別問題である。一六〇四~五年のクリスマス・シーズンにコープ卿がセシルに、サザンプトン邸での上演予定を告げ、しかし閣下の一言でその場所はストランド邸に変更できます、バービッジ（カスバート）は私の使い走りだから、という手紙を書いている。それでどうなったのか。一月一五日の通信員D・カールトンの手紙では、この数日来夜の余興はクランボーン邸で催されていると伝えている。クランボーン〔子爵〕とは当時のセシルの爵位であり、コープはセシルの秘書である。『恋の骨折り損』（一五九五―六年？）はおそらくサザンプトンとのパトロン関係を背景にしている。それが選ばれたのも屈託のない時代を懐かしんでであろう。ところがセシルは強引にも九分九厘決まっていたその上演を横取りしたようである（Andrew Gurr, *The Shakespeare Company, 1594-1642*, Cambridge, 2004, p.57）。新王下での寵臣同士の鞘当てというか、第一の功臣が良い気になるなと釘を刺した気配である。しかもこの時アン王妃を迎える予定だったなら、伯爵の顔は丸つぶれである。彼の怒りは又しても裏切ったことになる庇護者に八つ当たり気味に向けられたかもし

れない。他方シェイクスピアにはカスバートに従うという以上に、セシルに弱みがあっただろう。丁度『ハムレット』第二Q版の刊行と重なる時期だったのである。

（五五）一六四〇年の『ソネット集』第二版でJ・ベンソンは126番を削除したが、このソネットは「時」の意味を見破られないために付加したと思えるので興味深い選択である。ダークレディ群（と一概には言えないが）を除くと、125番が最後の献呈であろう。

（五六）J・デイヴィスの最初の詩集は一六〇二年の *Mirum in Modum, a glimpse of Gods glorie and of the soules shape* であるが、出版人のW. Aspley は劇作中心であり、また一五九八年に『恋の骨折り損』、一六〇〇年に『ヘンリー四世、第二部』を出し、一六二三年のフォリオ版刊行にも加わった。アスプリにデイヴィスを紹介したのは劇本を出して十年になる先輩ではないか。

（五七）俳優を辞めて実業人となったエドワード・アレンの残した帳簿の一六〇九年六月の欄には、“A book Shakesp*r Sonett _5d” という購入記録が残されている（Edmondson and Wells, p.5）。しかし五月二〇日に出版登録したばかりなので早すぎるために、これはペイン・マリアの偽筆と疑われている。

（五八）E. K. Chambers, I, p.96.

（五九）G. A. Akrigg, p.261.

（六〇）P. Honan, p.358.

（六一）M. Wood, p.304.

（六二）当時の劇作家は、S・ダニエル、G・チャップマンのように長生きしても四〇代半ばで劇作の筆を折っている。B・ジョンソン（1572-1637）は一六一六年四四歳でフォリオで自作全集を刊行したが（これは芝居が文学の価値を認められていなかったので、世の失笑を買った）、ジェームズから終身年金を貰い、実質的な最初の桂冠詩人となって以降意欲は低下した。たしかに一六三一年まで王室のために仮面劇（一六二五年と一六三〇年の二回刊行）やその他の余興を書き続ける一方で、劇にも手を染めたが見るべき作は、ワーズワース事典によると *The Staple of News*（一六二五年）一つといわれる。フォリオ版全集の刊行は一区切りをつける以上の、総決算的な意味があったのではないか。J・マーストンは筆禍で投獄された（一六〇八年）後は、芝居と縁を切り、一六一六年にプロテスタントの牧師になる。二人とも今日考えるような作家魂とか文学者根性とは少し違った理由から筆を取ったのではあるまいか。文学は男子一生の仕事ではなかったのである。F・ボーモントは二二歳から書き出すが、二九歳で裕福な未亡人と結婚するとさっさと引退する（もっとも三年後に死ぬので、健康上の理由も考えられる）。平均死亡年齢や公衆衛生の問題があるが、概して引退は早い。T・ミドルトンは四七歳、T・フレッチャーは四六歳、T・キッド、T・ナッシュ、R・グリーンはいずれも三〇代で世を去っている。売れっ子のグリーンが劇を書いたのはわずか四～五年で、生きていても他にいい仕事があれば転職を躊躇しなかったかもしれない。その中で一六〇九年のシェイクスピアがすでに一八年ほどこの稼業に従事していたのは、ジョンソンを除いて例外的に長い。自他共にそろそろ引退という雰囲気だったのではないか。

（六七）表紙は M. Wood, p.216, 239, 273, 305 の写真による。

（六八）E. K. Chambers, II, p.216-7

（六九）*Ibid.*, p.218-9. もっともJ・ベンソンも再版の序文で〝sweetly composed poems〟と言う位だから（ibid., p.237）、ミアズの最初の評言は通

説として定着していたのかもしれない。

（七〇）*Ibid.*, p.214

（七一）R. Giroux, *op.cit.* p.7-8

（七二）E. K. Chambers, p.214-243. 但しW・ドリュモンドは「最近出版の彼の仕事」と一六一四年に語るが、それが『ソネット集』なのかは不明である。ミルトンは一六三〇年に書いたシェイクスピア賛で、直接の言及はないが、「ピラミッド」「不滅の記念碑」「王の墓」〝such pomp〟という塔釈放後のソネットを思わせる表現を使うが、二〇年後なのでここでは問題にしない。

（七三）アーデン版、p.69-74.

（七四）*Ibid.*, p.69.

（七五）この沈黙ないし空白は一九二二年、フランク・マシューによって始めて注目された。発禁本説を唱えたのも彼である。その後二人賛同者が現れる（R. Giroux, p6-8 の紹介に拠る）

（七六）アーデン版、p.70-71.

（七七）*Ibid.*, p.72.